ついに自由を我らに

米国の公民権運動

ついに自由を我らに

米国の公民権運動

「わたしには夢がある」　1963 年8月の「雇用と自由のためのワシントン大行進」は、米国史上前例のない大規模な政治デモとなった。リンカーン記念堂前とワシントン記念塔を映すリフレクティング・プールの周囲に集まった群衆は、マーティン・ルーサー・キング・ジュニア師の演説に耳を傾けた。これは、おそらく、建国以来の米国人による演説の中でも最も素晴らしいものであった。

目　次

— 1 —

奴隷制の米国への拡大　3

米国に移植された世界的な現象
奴隷制の確立
奴隷たちの生活とさまざまな制度
家族のきずな
スポットライト　黒人教会の特質

— 2 —

「他の人間の5分の3」　棚上げされた約束　8

自由の地？
フレデリック・ダグラスのペンの力
地下鉄道
剣によって…
反逆者ジョン・ブラウン
南北戦争
スポットライト　南北戦争の黒人兵士

— 3 —

「分離すれど平等」　「再建」の失敗に対する アフリカ系米国人の反応　18

議会の再建活動
一時的な前進、そして多くの後退
「ジム・クロウ」の出現
ブッカー・T・ワシントン　経済的自立の追求
W・E・B・デュボイス　政治運動の推進
スポットライト　マーカス・ガーベイ　もうひとつの道

— 4 —

チャールズ・ハミルトン・ヒューストンとサーグッド・マーシャル 人種隔離制度に対する法的な挑戦の開始　26

チャールズ・ハミルトン・ヒューストン　ジム・クロウを抹殺した男
サーグッド・マーシャル　「ミスター公民権」
ブラウン判決
スポットライト　ラルフ・ジョンソン・バンチ　学者兼政治家
スポットライト　ジャッキー・ロビンソン　人種の壁を破る

— 5 —

「運動が始まった」　35

「譲ることに疲れた」　モントゴメリーのバス・ボイコット
座り込み運動
フリーダム・ライド
オルバニー運動
バーミングハムでの逮捕
バーミングハムの獄中からの手紙
「運動が始まった」
ワシントン大行進
スポットライト　ローザ・パークス　公民権運動の母
スポットライト　公民権運動の活動家たち　ミシシッピに死す
スポットライト　メドガー・エバーズ　ミシシッピ運動の殉教者

— 6 —

「このままではいけない」　法的平等の確立　52

政治的な変化
リンドン・ベインズ・ジョンソン
1964年公民権法
公民権法の威力
1965年投票権法　その背景
セルマの「血の日曜日」
セルマからモントゴメリーへの行進
投票権法の制定
投票権法の成果
スポットライト　公民権運動に対する南部の白人の反応

エピローグ　65

公民権運動の勝利

— 1 —

奴隷制の米国への拡大

ニューヨークの国連本部に展示されている古代の遺物の中に、キュロスの円筒印章の複製がある。キュロスの円筒印章とは、紀元前539年前後にさかのぼる文書で、バビロニアを征服したペルシャ帝国のキュロス大王にちなんで名付けられたものである。キュロス大王は、臣民に、今日公民権と呼ばれている権利の多くを保証した。その中には、信教の自由、個人の財産の保護なども含まれていた。またキュロスは、奴隷制は「全世界で根絶されるべき伝統である」として、これを廃止した。

歴史を通じて、個人としての国民の保護および特権を、国家がどれだけ広く定義するか、そしてどの程度強く擁護するかは、各国家によってさまざまに異なってきた。米国は、こうした公民権、独立宣言に記された高い理想と合衆国憲法で制定された法的保護、そして最も重要なことに、その合衆国憲法の修正第1条～第10条の修正条項、すなわち米国民の権利章典を基盤として築かれた国家である。

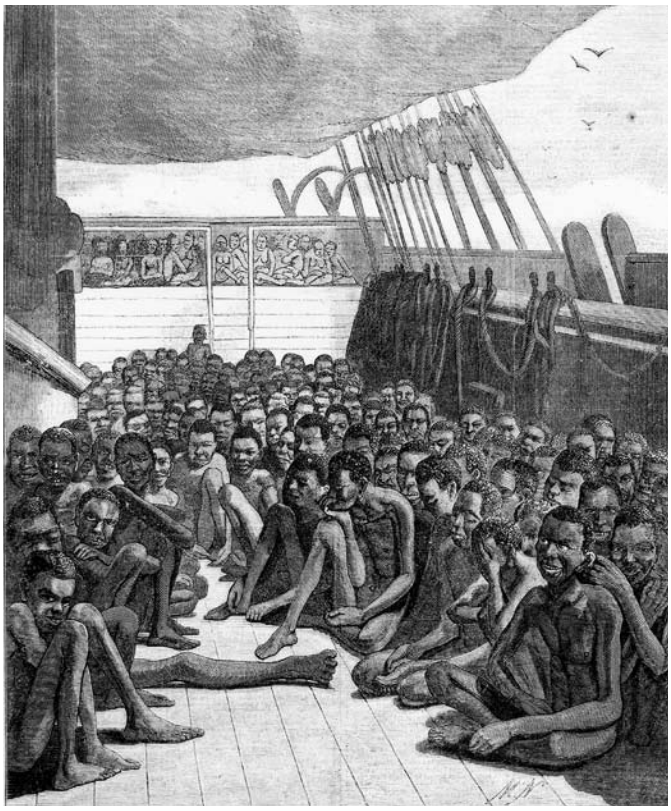
ところが、米国に到着した人々の中で、こうした権利と保護の恩恵を受けなかった集団がひとつあった。ヨーロッパからの移民が、新世界でかつてない経済機会とより大きな個人的、政治的、宗教的な自由を享受する一方で、アフリカの黒人は、多くの場合鎖につながれるなどして、自らの意志に反して輸送され、動産である奴隷として売られ、特に米国南部の大規模農園で「主人」のために強制的に労働させられた。

この冊子では、こうしたアフリカ系米国人の奴隷たちとその子孫が、他の米国人の享受する公民権を法的にも実質的にも勝ち取るためにどのように苦闘してきたかを詳しく述べる。それは尊厳に満ちた忍耐と闘争の物語であり、偉大な英雄たちを生んだ物語である。また米国人の大半に対して、平等や公正という彼らの普遍的な原則と、何百万もの同胞が直面する不平等、不公正、および抑圧との間の恥ずべきギャップに正面から取り組まざるを得なくすることによって、最終的に達成された勝利の物語でもある。

米国に移植された世界的な現象

人間は、有史以前から自分たちと同類である人間を奴隷としてきた。隷属の条件はさまざまだが、奴隷労働は、メソポタミア、インド、および中国の古代文明、古代のギリシャやローマ、そしてコロンブス以前のアメリカのアステカ、インカ、マヤの各先住民帝国に存在していた。聖書によると、エジプト人はヘブライ人の奴隷を使い、ヘブライ人自身もエジプトを脱出した後で奴隷を使った。初期のキリスト教やイスラム教も奴隷制を認めていた。アフリカ北部および東部のアラブ人はアフリカの黒人を奴隷とし、エジプトとシリアは地中海地域のヨーロッパ人を捕らえたり奴隷商人から買ったりして、主として、砂糖製造の労働力として使った。また多くのアメリカ先住民の部族は、戦争で捕虜にした他部族の先住民を奴隷とした。

大西洋を挟んだ奴隷貿易は、いくつかの要因が組み合わさって促進された。1453年にオスマン帝国がコンスタンティノープル（今日のイスタンブール）を征服したために、貿易パターンが乱され、甘い物好きのヨーロッパ人にとって貴重な砂糖を手に入れにくくなった。ヨーロッパ人はポルトガルの主導でアフリカ西海岸を探検し、アフリカ人の奴隷商人から奴隷を購入し始めた。1492年にクリストファー・コロンブスが新世界を発見すると、ヨーロッパからの入植者が土地を開拓するために大勢のアフリカ人奴隷を輸入し、特にカリブ海地域ではサトウキビの栽培に奴隷を使った。間もなくカリブ諸島は、西欧の砂糖需要のおよそ8割から9割を供給するよ



小型帆船ワイルドファイア号の甲板上のアフリカ人奴隷たち（1860年4月、フロリダ州キーウェスト）

カリブ海のアンティグア島でサトウキビを刈り取る奴隷たちを描いた 1823 年の作品

うになった。

今日の世界では理解しにくいことだが、かつての世界経済においては、砂糖、タバコ、綿花、香辛料などの作物が極めて重要な役割を担っていた。例えば、1789 年には、小さな植民地サン・ドマング（現在のハイチ）がフランスの外国貿易総額のおよそ 40％を占めていた。大西洋の奴隷貿易を推し進めようとする経済の力は強大なものだった。少なくとも合わせて 1000 万人のアフリカ人が、「中間航路」の苦難に耐えた。（中間航路とは、アフリカへの織物、ラム、製造品輸出、米州への奴隷輸出、およびヨーロッパへの砂糖、タバコ、綿輸出から成る三角貿易に使われた大西洋の航路のうち２番目のもので、最も長い航路であった。）アフリカ人の大半は、ポルトガル領ブラジル、スペイン領中南米、および英領・仏領カリブ諸国の「砂糖諸島」に送られ、アフリカ人のうち英国領の北米に送られた奴隷は、全体のわずか６％前後にすぎない。しかし、アフリカ系米国人の体験は、米国を建国し拡大した他の移民たちの体験とは大きく異なっていた。

奴隷制の確立

奴隷が最初に北米の英国領に到着したのは偶然の結果であった。1607 年に英国の最初の永久植民地として設立されたバージニアのジェームズタウンに、その 12 年後、カリブ海でスペイン船から捕獲した「ニグロ 20 人余り」を乗せた私掠船が入港した。入植者はこの「貨物」を購入した。それが米国における最初の奴隷である。

その後 50 年間は、新しいバージニア植民地において、奴隷たちはとりわけ顕著な労働力とはならなかった。上流階級の地主たちは、「年季奉公」の白人労働力を使うことを好んだ。年季奉公契約に基づいて、ヨーロッパからの移民がアメリカへの交通費を雇い主から借り、その借金を返済するために数年間働くことに同意した。社会学者のオーランド・パターソンによると、この時期、人種間の関係は比較的親密であった。きわめて少数ではあるが、特に有能な黒人が、自由を得て自ら富を築くことさえあった。

しかし、17 世紀後半からは、奴隷の値段が下がるとともに、年季奉公契約の移民志望者が減少した。奴隷労働者の価格が年季奉公労働者の価格より低くなるに従い、奴隷制が拡大した。1770 年までには、アフリカ系米国人が米国南部の植民地人口のおよそ 40％を占め、サウスカロライナではその割合が過半数に達した。（北部の植民地にも奴隷はいたが、北部では奴隷人口が全体の５％を超えることはなかった。）これだけ大勢の、抑圧されて反乱の可能性を秘めた少数民族の存在に直面して、南部の上流階級は、アフリカ系米国人に対する社会の姿勢を硬化させることを奨励した。奴隷である女性の子どもは奴隷とされ、奴隷主は奴隷を罰する際に奴隷を殺してしまってもよいとされた。そしておそらく最も重要なことに、バージニア州の白人エリート層は、経済的にあまり豊かではない白人労働者と黒人とを分断させる手段として、黒人に対

する人種差別を推進し始めた。

アフリカ系米国人の奴隷の大半は、メリーランド、バージニア、ノースカロライナの各州ではタバコ、深南部ではコメといった主要作物の農場で働いていた。1793年に、米国の発明家イーライ・ホイットニーが綿花から種を除去する綿繰り機を発明したことによって、深南部各地で綿花栽培が飛躍的に拡大し、アラバマ、ミシシッピ、ルイジアナ、テキサスの各州へと西方に広がった。1790年から1860年までの間に、およそ100万人のアフリカ系米国人が西へ移動した。これは、アフリカから米国へ運ばれた奴隷の人数の2倍に近い。

奴隷たちの生活とさまざまな制度

アフリカ系米国人の奴隷は厳しい労働を強制され、極めて苛酷な条件下で働かされた者もいた。州によっては、奴隷法と呼ばれる法律に基づいて、規則に従わない奴隷に対する厳しい懲罰が認められていた。1705年のバージニア州の奴隷法には次のように定められている。

> 本領土内のニグロ、ムラート（ヨーロッパ系とアフリカ系の混血）、およびインディアンの奴隷はすべて（中略）不動産と見なされるものとする。奴隷が、（中略）彼を矯正している主人に抵抗し、かかる矯正中に殺害された場合、（中略）その主人は（中略）かかる事故が発生しなかったかのように、いかなる懲罰をも免れるものとする。

またこの法律では、奴隷は、所属する農園から出る場合には事前に許可書を得なければならないと定められていた。そして、微罪に対しても、むち打ちを行う、焼き印を押す、重傷を負わせるなどの懲罰が認められていた。奴隷に読み書きを教えることを禁じた法律もあった。ジョージア州では、この規則に違反した者が「奴隷、ニグロ、または有色の自由人」であった場合には、罰金かむち打ち（またはその両方）の刑が科された。

米国の奴隷たちの運命は厳しいものであったが、彼らの物理的な労働条件は、ある意味では、当時のヨーロッパの労働者や農民の多くが耐えねばならなかった条件とそれほど変わらなかった。しかし、ひとつ違いがあった。奴隷たちには自由がなかったのである。

基本的人権を拒否されたことは、アフリカ系米国人の政治的・経済的前進の障害となったが、これに対して奴隷たちは独自にさまざまな力強い制度を作り出し、後に20世紀半ばの公民権運動がこうした制度から滋養と社会的資本を得ることになった。初期の記録では、奴隷が白人の主人の「影響下にある」幼児化された存在として描かれることが多かったが、現在では、多くの奴隷コミュニティにおいてある程度の個人的・文化的・宗教的な自律性が切り開かれていたことが分かっている。歴史学者のユージーン・ジェノビーズは、「奴隷たちは、人間らしく行動しなかったのではなく、ひとつの民族としての集合的な力を自覚して政治的な人間として行動することができなかったのである」と書いている。しかし、ジェノビーズの結論によると、ほとんどの奴隷は、「危険な状況に屈従させられていたにもかかわらず、成人男性および女性としての自らの資質を開発し主張する手段を見つけた」

その手段のひとつが「黒人教会」であった。時とともに、キリスト教を信じるアフリカ系米国人の奴隷が増え、特に南部の白人の間で有力だったバプテストやメソディストなどの宗派の信者となる奴隷が多かった。キリスト教の教義が奴隷制の正当性を弱めることを恐れた奴隷主もいたが、奴隷が教会へ行くことを奨励する奴隷主もいた。ただし、奴隷たちは教会の中でも「黒人専用」の席に隔離されていた。

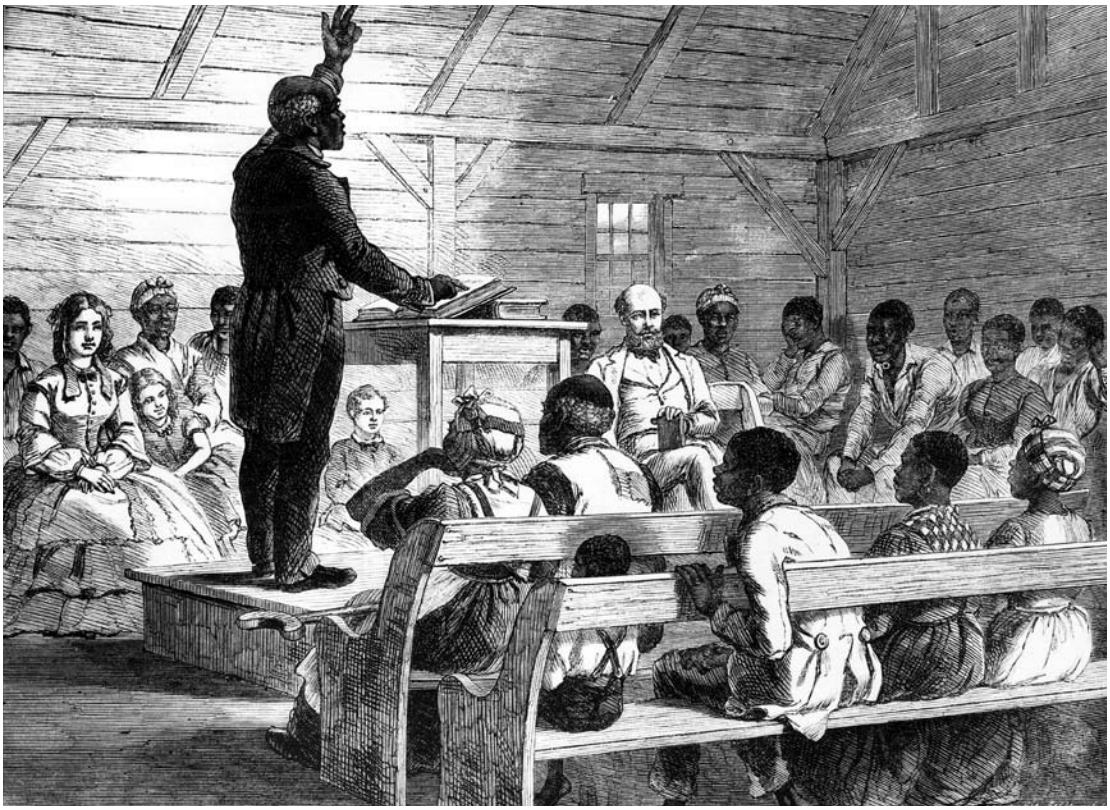
キリスト教に出会った多くの奴隷たちは、やがて独自の地下教会を設立した。これは主に、キリスト教と、奴隷たちのアフリカでの宗教文化や信仰を融合したものであった。その礼拝は、通常、叫びや踊り、そして後にマーティン・ルーサー・キング・ジュニア師をはじめとする指導的な黒人牧師の偉大な説教に顕著に見られるようになる「呼び掛けと応答」という形式を取り入れたものであった。黒人教会では、南部の白人教会におけるキリスト教の伝統とは異なる側面を強調することが多かった。例えば、南部の白人教会では、聖書のハムの呪い（「兄弟たちのしもべらのしもべとなれ」）が奴隷制を正当化するものと解釈されたのに対し、アフリカ系米国人の礼拝では、モーゼがイスラエル人を捕囚の身から脱出させた話が強調された。

アフリカ系米国人の奴隷たちにとって、宗教は、ある程度の慰めと希望をもたらすものであった。南北戦争によって奴隷制が廃止されると、黒人の教会や各宗派の組織は、信者数、影響力、組織力共に拡大し、これが後に公民権運動の成功に極めて重要な役割を果たすことになった。

家族のきずな

奴隷の家族の強いきずなも、同様に力の源泉となった。奴隷主には奴隷の家族を分散させる権利があり、事実そうする例が多かった。夫が妻から、また親が子から引き裂かれ、他の奴隷主に売られた。しかし分断されなかった家族も多く、「奴隷制の下での核家族の顕著な安定性と強さと持続性」に多くの学者が注目している。通常、奴隷たちは、拡大家族として暮らしていた。歴史家のC・バン・ウッドワードによると、奴隷の子どもたちは、少なくとも「子どもとして暮らすことを保証され、英国やフランスでは労働階級の子どもたちが鉱山や工場で働くことを強いられた年齢を超えても、労働と困窮を免れていた」

アフリカ系米国人の家族構造は、奴隷制や、後には差別と経済的不平等がもたらす困難に適応したものであった。多くの場合、黒人の家族単位は、小規模な血縁者の家族ではなく、拡大された一族に近かった。しっかりした強い女性が中心的な権威を持つ存在となっている場合もあった。奴隷が家族で



サウスカロライナのプランテーションで、白人と黒人から成る信徒に説教をする黒人牧師（1860年ごろ）

暮らしていれば家族離散を恐れて不服従や反抗の可能性が低くなると考え、こうした家族のきずなを奨励する奴隷主もいた。

いずれにしても、家族や一族の強力なきずなが、アフリカ系米国人の生き残りに貢献した。カリブ諸島の植民地やブラジルでは、奴隷の死亡率が出生率を超えていたが、米国の奴隷の人口増加率は、白人のそれと変わらなかった。1770年代までには、北米の英国領における奴隷のうち、アフリカで生まれた者はわずか5人に1人となっていた。米国が奴隷の輸入を禁止した1808年以降も、米国の奴隷人口は120万人から、1861年の南北戦争直前には400万人に増加した。

アフリカ人は奴隷制によって米国に連れてこられ、ヨーロッパ生まれの米国人が享受した自由を与えられなかった。しかし、束縛されていても、多くのアフリカ系米国人は、強力な家族のきずな、そして信仰に基づく制度を築き、後の世代が公民権運動の勝利を達成するための基盤を作った。ローザ・パークスがバスの前部の席に座るはるか前に、そしてマーティン・ルーサー・キング・ジュニアがその有名な夢によって米国民を鼓舞する1世紀以上も前に、自由と平等を求める闘いは始まっていたのである。

黒人教会の特質

アフリカ系米国人の宗教共同体は米国社会に極めて大きく貢献しているが、中でも、20世紀の公民権運動の精神的・政治的・組織的な基礎を築き、ローザ・パークスやマーティン・ルーサー・キング・ジュニア師など公民権運動指導者の考え方を形成したことは特筆に値する。

アフリカ系米国人の奴隷と自由人は、18世紀半ばから後半にはすでに独自の宗教的な集団を形成していたが、奴隷解放後は、本格的にいくつかの宗派が出現した。今日「黒人教会」と呼ばれているものは、古い歴史を持つ7つの主な宗派から成る。それは、アフリカン・メソディスト監督教会（AME）、アフリカン・メソディスト監督シオン教会(AMEZ)、クリスチャン・メソディスト監督教会（CME）、米国ナショナル・バプテスト連盟（法人）、米国ナショナル・バプテスト連盟（非法人）、プログレッシブ・ナショナル・バプテスト連盟、およびチャーチ・オブ・ゴッド・イン・クライストである。

アフリカ系米国人奴隷の解放後に出現したこれらの宗派は、主としてメソディスト、バプテスト、およびペンテコステ各派の伝統を受け継いでいたが、アメリカン・カトリック、聖公会、統一メソディスト教会などとつながる特色もかなり見られた。

アフリカ系米国人の宗教的感覚の優れた特質は、共通のアイデンティティーを築こうとする力である。黒人奴隷はアフリカのさまざまな地方から「中間航路」で大西洋を渡って米国に運ばれ、奴隷として強大な圧迫に耐えた。そうした出身地の多様性と社会的なはく奪を背景に、アフリカ系米国人の宗教的信条と慣習は、心の慰めとなるとともに、根深い対立を解決する手段、すなわち市民的不服従と非暴力という手法の知的基盤を提供した。また黒人教会は、黒人の政治活動家に、選ばれた少数に一時的な緩和を与えるのではなく、すべての人々に最終的な解決策を与えることに集中する、という強力な思想を与えた。公民権運動は、このような考え方に基づき、いかなる人間をも組織的に抑圧することを決して許さないことを目指した。従って、公民権運動の特質は、悲劇的な歴史を理解し、自らのためだけでなく国家と世界のために前進しようとするアフリカ系米国人の宗教共同体からあふれ出た自然の流れであった。

要するに、奴隷制とそれに続くジム・クロウ（黒人差別制度）に対して何らかの形の抵抗が行われるのは必然であったと思われるが、そうした状況において、抑圧を受けながらも共同体としての高い精神性を求めた黒人教会が、後に平和的な手段で目標を達成しようとした公民権運動の誕生に一役買ったのであった。

公民権運動の有力者たち、すなわちキングをはじめ、連邦議会のバーバラ・ジョーダン下院議員、ジョン・ルイス下院議員、政治活動家でバプテスト派の牧師でもあるジェシー・ジャクソン、伝説的なゴスペル歌手のマヘリア・ジャクソンといった人々の考え方は、主に黒人教会での信仰生活を通じて形成された。事実、公民権運動の主な発言者としてのキングの役割は、米国において、アフリカ系米国人の宗教共同体と人種的・社会的正義を求める闘いが直接結び付いていたことを反映している。アフリカ系米国人の宗教共同体の精神的な影響力は、米国内だけにとどまらず、ネルソン・マンデラやデズモンド・ツツ大主教といった国際的な指導者たちも、アフリカ人そしてキリスト教徒としての愛に満ちた包括的なアイデンティティーを体現することをキングから学んだ。

今日でも、アフリカ系米国人の共同精神は、これまでにも増して強力であり積極的である。黒人教会は、HIV・エイズのまん延、貧困改善の必要性、そしてアフリカ系米国人の囚人の不釣り合いに高い再犯率といった今日的課題に取り組んでいる。しかし現在もその精神性の基盤となっているのは、共通のアイデンティティーの追求である。初めてのアフリカ系米国人大統領が選出され、高等教育を受ける少数民族が増えている今、共通のアイデンティティーを求める旅は正しい方向に進んでいると言える。

要約すると、黒人教会は、アフリカ系米国人が最も厳しい抑圧の中で生き延びることを助け、普遍的な共同精神を求める画期的な呼び掛けを展開した。黒人教会は、単に民主主義の理論を語るだけでなく、民主主義を実践した。黒人教会の根から、独創的、包括的、そして非暴力的な公民権運動の花が咲いたのである。

マイケル・バトル

マイケル・バトル師は、デズモンド・ツツ大主教によって叙任され、ロサンゼルス監督教区のセントポール大聖堂の主席司祭および神学者（教会法）を務める。著書に、『The Black Church in America - African American Spirituality』などがある

— 2 —

「他の人間の5分の3」

棚上げされた約束

19世紀から20世紀初めにかけて、アフリカ系米国人と彼らを支持する白人たちは、まず奴隷制の廃止を目指し、奴隷制廃止後はさらに「自由人」の法的な平等を確保するために、さまざまな戦略を用いた。人種的平等への前進は遅々としたものであったが、その大きな原因は、奴隷制と黒人に対する抑圧が、国家の統一を支える地域間の政治的妥協の一部となっていたからであった。1861年から1865年まで続いた南北戦争によって米国の奴隷制は終わりを告げたが、戦争が終わると、人種平等に対する南部の白人の抵抗を打ち負かそうとする北部の政治的意志は徐々に弱まっていった。南部全体で「ジム・クロウ」制度と呼ばれる法的な人種隔離制度が強引に導入され、黒人の政治的な前進を妨げた。それでも、アフリカ系米国人の指導者たちは知的・制度的な資本の構築を続け、これが20世紀半ばから後半にかけての公民権運動を成功させる糧となった。

バージニア州マウントバーノンのジョージ・ワシントンの農園におけるワシントンと黒人農場労働者たち（1757年）

自由の地？

米国独立の第1日目から、米国民は奴隷制によって分断されていた。南部は新たな主要作物である綿花（「キング・コットン」と呼ばれた）とその栽培のために奴隷を大勢使うプランテーションにますます依存するようになり、それにつれて、奴隷制反対の姿勢を強化しつつあった北部諸州との衝突の可能性が高まった。まだ若いこの国家は、道徳的な課題の回避と政治的な妥協によって、そうした衝突を先延ばしにした。

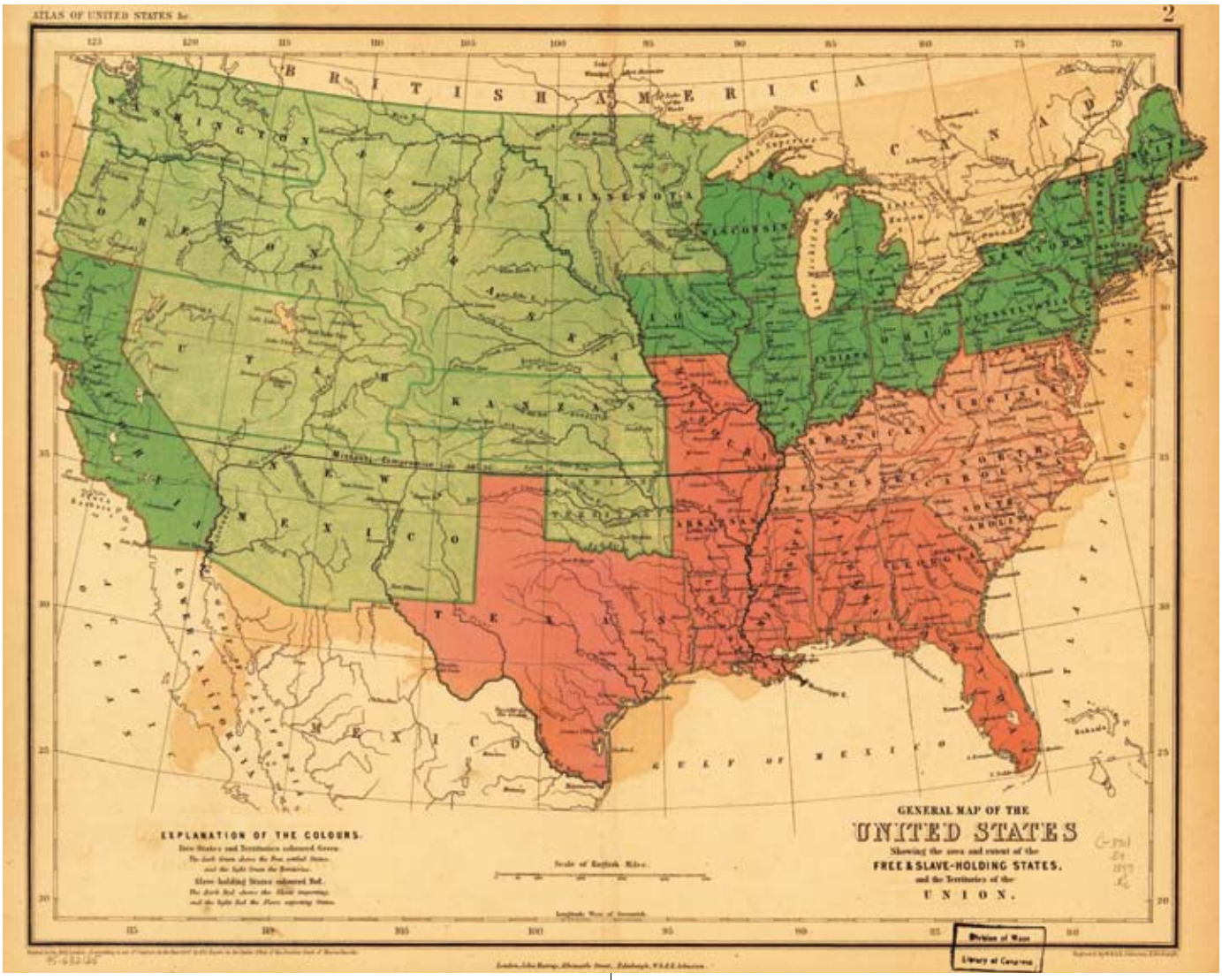
米国の独立宣言（1776年）には、普遍的な兄弟愛について述べた次のような感動的な言葉がある――「われわれは、以下の事実を自明のことと信じる。すなわち、すべての人間は生まれながらにして平等であり、その創造主によって、生命、自由、および幸福の追求を含む不可侵の権利を与えられている」

しかし、それにもかかわらず、独立宣言の主な起草者トマス・ジェファソン自身が、バージニアの奴隷所有者であった。ジェファソンはこの矛盾を認識しており、彼の草案は、奴隷制自体については述べなかったものの、奴隷貿易を「人間性に対する残酷な戦争」として強く非難していた。しかし、当時の米国の事実上の政府であった大陸会議は、独立を支持するコンセンサスを多少なりとも揺るがす可能性のある論議を避けるために、奴隷貿易に関する記述を削除した。そして、政治的な便宜が道徳的な義務を押しのけたのは、これが最後ではなかった。

1787年までには、多くの米国民が、13州から成る既存の緩やかな地方分権的な同盟から、より強力な連邦政府への移行を決意していた。同年5月から9月にかけてフィラデルフィアで開催された憲法制定会議で、そのような政府の青写真が作成された。『The Summer of 1787 - The Men Who Invented the Constitution』の著者デービッド・ステュワートによると、「この会議では奴隷制をめぐって激しい戦いがあった」 そして、「代議員の多くは奴隷制廃止の意見を持っていた」にもかかわらず「当時の米国には奴隷制廃止の風潮はなかった」

提案された憲法は、13州中9州で批准されなければ発効しなかったため、アフリカ系米国人奴隷の地位について何らかの譲歩が必要となった。ペンシルベニア州のジェームズ・ウィルソンの率いる北部の代議員は、3大奴隷州との間で合意に達した。すなわち、各州の議員数を決める際に、「非自由人」（奴隷）5人を3人として数えることになった。また20年間は連邦議会が奴隷輸入禁止法を可決することを禁止する、という合意も成立した。（議会は後に、1808年をもって奴隷貿易を廃止することを決定した。そのころには、奴隷人口が自然に増加していたため、奴隷貿易の廃止は激しい論議を呼ぶ問題ではなくなっていた。）

この「5分の3の妥協案」は、米国のファウスト的契約あるいは原罪であるとも言われている。北部の自由黒人であったデービッド・ウォーカーは、1829年に作成したパンフレッ



「自由」州を濃い緑色、奴隷州を濃い赤色と薄い赤色、そして準州（まだ州として認められていない米国の領土）を薄い緑色で表した 1857 年の米国の地図

トで次のように述べている。「ジェファソン氏は、われわれが身体的素質においても精神的素質においても白人に劣るということを世界に向けて宣言したのだろうか」 この妥協案によって、これらの州が結成する連邦はより強固になったが、同時に南部では奴隷制が確実に継続することになった。南部では、1793 年に綿繰り機が発明されたことで、奴隷労働を集約的に使ったプランテーション制度による綿花栽培が盛んになっていた。またこの妥協案は、この若い国家に極めて重大な政治的な影響を及ぼした。1800 年の大統領選挙の激しい争いでは、南部諸州が奴隷人口に対して与えられた選挙人票によって、トマス・ジェファソンが現職大統領ジョン・アダムズ（マサチューセッツ州）を破った。

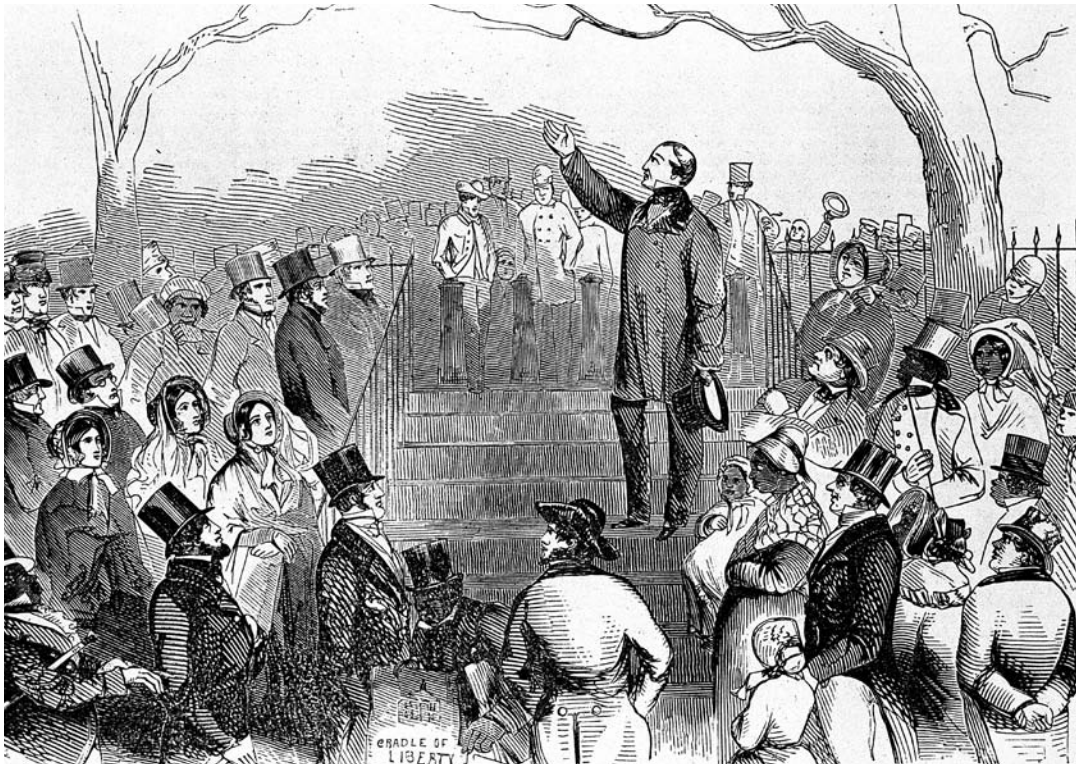
さらに重要なのは、奴隷制が国家の拡張に及ぼした影響であった。議会における「奴隷」州と「自由」州の力の均衡という点で、合衆国の新しい州が奴隷制を認めるかどうかということが極めて大きな重要性を持つようになった。19 世紀前半に、議会は数々の妥協案を成立させたが、それらはおおむね、奴隷制を容認する州を連邦に加盟させるときには奴隷制を禁止する州も同時に加盟させるようにするものであった。ミズーリ協定、1850 年協定、およびカンザス・ネブラスカ法はいずれも、こうした政治的な均衡を維持したものであった。しかし、1857 年に最高裁判所が「ドレッド・スコット対サンフォード」事件で、議会はまだ州として認められていない西部の準州における奴隷制を禁止することはできないとの判決を下した。この判決は、奴隷制をめぐる地域間の対立を激化させ、最終的な衝突の時期を早めた。

この若い国家の政治システムがアフリカ系米国人に白人と同様の公民権を保証することができずにいる間にも、勇敢な男女が奴隷制廃止を目指し、米国の最も高い理想を実現するために活動を始めていた。

フレデリック・ダグラスのペンの力

米国の政治システムは米国南部から奴隷制を除去することができなかったが、南部で「われわれの独特の制度」とも呼ばれていた奴隷制に対する反対がないわけではなかった。黒人も白人も含め、強い決意を持った男女が、奴隷制廃止、す

なわち奴隷制を法的に禁止するために人生を捧げた。彼らはさまざまな戦術を使ったが、その中には暴力的なものも非暴力的なものもあった。そして、マーティン・ルーサー・キングの時代と同様に、ペンの力と人々の良心へのアピールが強力な武器となることを証明した。米国の南北戦争は奴隷解放のためだけの戦いではなかったが、奴隷制廃止論者たちは、エイブラハム・リンカーンという上院議員候補が1858年に述べた次のような意見を支持するよう、北部の多くの人々を説得した。「分裂して争う家は立っていることができない。半分が自由、半分が奴隷という状態がいつまでも続けば、この国は持ちこたえることはできない」



1835年にボストンで開かれた奴隷制反対集会には、白人と自由な黒人の両方が参加した。

アフリカ系米国人や白人の思想家による感動的な言葉によって、米国民は、南部で黒人の米国民に課されている束縛の生活と米国の気高い理想との間の矛盾と向き合わざるを得なくなった。中でも、最も強力なペンの力を発揮したのは、脱走した奴隷であり、ジャーナリスト、出版業者、そして自由の擁護者として知られるフレデリック・ダグラスであったろう。ダグラスは、1817年または1818年に奴隷の子として生まれた。彼の女主人は、メリーランド州法を無視して少年時代のダグラスに文字を読むことを教えた。彼は13歳のときに初めて本を買った。それは自由を礼賛するエッセイや詩、対話などを集めた本で、19世紀初めの米国の学校で広く使われていた。こうした少年時代の学習体験から始まって、ダグラスは、後にこの世紀有数の雄弁家となるための能力を磨いていった。1838年に、ダグラスは、農場労働者として働いていたプランテーションから脱走し、マサチューセッツ州ニューベッドフォードに逃れて、非凡な経歴を歩み始めた。

1841年に、最も有力な白人の奴隷制廃止論者であったウィリアム・ロイド・ギャリソンが、マサチューセッツ州ナンタケットで奴隷制反対の集会を開催した。地元の黒人教会でダグラスの演説を聞いていたある出席者が、ダグラスにこの集会で演説をしてほしいと依頼した。後にダグラスは、「わたしは、まっすぐ立っているのがやっとであり、つっかえたり口ごもったりせずに一言二言話すだけでも大変なことだった」と書いている。しかし、彼の言葉は聴衆を感動させた。「聴衆はすぐに共感してくれた。そして非常に静かだった聴衆が、興奮状態となった」 集会を主催したマサチューセッツ奴隷制反対協会も、それを見て、直ちにダグラスを代理人として雇った。

新しい仕事を得たダグラスは、北部各地の公開集会で演説をした。彼は奴隷制を糾弾し、アフリカ系米国人には合衆国憲法が他の米国民に与えている公民権を得る権利があると主張した。奴隷制廃止集会が人種差別主義者の暴徒の襲撃を受けることもあったが、ダグラスの味方となって奴隷制廃止を支持する白人たちもいた。ダグラスを暴徒から守ろうとした白人の仲間が殴られて歯を折られた後、ダグラスはその友人への手紙で、「わたしたち2人が兄弟同士のように、お互いのために大胆に挑戦し、行動し、死ぬことすら辞さなかったことを、わたしは決して忘れない」と書いた。そして、その仲間が「父親や友人の多くの希望に反して（中略）安楽でぜいたくでさえある生活」を捨て、代わりに「奴隷の足かせを取り除き、さげすまれる黒人の地位を向上させるために何か」をしようとする意志を賞賛した。

1845年に、ダグラスは最初の自伝を出版した。その後も数冊の自伝を出版したが、いずれも高く評価されている。ダグラスの文章は、米国の白人たちにプランテーションの生活について教え、奴隷制が黒人にとって何らかの形で「好ましい」ものであるとの考え方を捨てさせ、公正な社会であるならば決してこの慣習を容認することはできないと多くの白人に確信させた。しかし、ダグラスが急速に名声を博したことで、奴隷時代の主人に見つかって再び捕まるかもしれないという危険が差し迫った。ダグラスは、慎重を期して2年間米国を離れ、英国、スコットランド、およびアイルランドを演説して回った。ダグラスが海外にいる間に、友人たちが金を払って彼を自由の身にした。米国有数の偉大な人物の値段は700ドル余りであった。

ダグラスは英国で、政治的により積極的な奴隷制廃止運動に触れた。1847年に米国に戻った彼は、ウィリアム・ロイド・

ギャリソンと決別した。ギャリソンは、純粋に道徳的・非暴力的な行動で奴隷制に対抗する方を選び、奴隷制の「道徳的汚点」に染まらないよう北部が連邦から離脱することもよしとした。ダグラスは、そのような道は南部の黒人奴隷を助けることにはならないと指摘し、より積極的な各種の活動を支援した。また西部準州への奴隷制拡張の防止を約束する主流政党や、全国的な奴隷制の全面廃止を要求する他の政党を支持した。さらに、自宅を地下鉄道（脱走した奴隷の北部への逃亡を助けた人々のネットワーク）の「駅（拠点）」として提供し、奴隷による武装蜂起を目指した過激な奴隷制廃止論者ジョン・ブラウンの友人となった。

1847年、ダグラスは黒人と女性の平等の権利を推進することを目的とするノーススター紙を創刊。これを皮切りに、その後も同様の新聞を数紙発行した。ノーススターのモットーは、「権利に性別はない。真実に肌の色はない。神はわたしたち全員の父であり、わたしたちはみな兄弟である」というものであった。ダグラスは、早くから熱心に男女平等のために闘った一人で、1872年には、米国初の女性大統領候補となった平等権党のビクトリア・クラフリン・ウッドハルの副大統領候補として出馬した。

1860年の大統領選挙では、ダグラスはエイブラハム・リンカーンの選挙運動を応援した。リンカーンの就任直後に米国北部諸州の連邦と南部諸州の南部連合との間に南北戦争が勃発すると、ダグラスは、北軍は黒人兵を採用すべきであると主張し、次のように述べた。「黒人に『U．S.』と記された真ちゅうの記章を付けさせ、ボタンにワシのデザインを付け、肩にマスケット銃を乗せ、ポケットに弾丸を入れさせれば、地球上のどのような権力も彼が市民権を獲得したことを否定することはできない」 ダグラスは、自ら兵士として戦うには年を取り過ぎていたが、黒人から成るマサチューセッツ第54および第55連隊を編成する兵士募集の任に当たった。この２連隊は、非常に勇敢に戦った。

南北戦争中、当初ダグラスとリンカーンの関係はぎくしゃくしたものであった。というのも、リンカーンはまず、北部の戦争遂行に極めて重要であった境界の奴隷州との協調を目指したためである。しかし、1862年9月22日、リンカーンは、依然として反抗している地域で束縛されているすべての奴隷を1863年1月1日付で解放することを宣言した奴隷解放宣言を発表した。また1863年3月、リンカーンは黒人兵の採用を承認し、その翌年には南部が奴隷制廃止に同意する前に和平交渉を開始するという提案を真っ向から拒絶した。リンカーン大統領は、２度にわたってダグラスをホワイトハウスに招待した。後にダグラスはリンカーンについて、「会見中、わたしは自分の卑しい生まれや不人気な肌の色を思い起こさせられることはまったくなく」、大統領は「ある紳士が別の紳士に接するのを見掛けるのとまるで同じように」接してくれた、と書いた。

ダグラスの目覚ましい活躍は、南北戦争後も続いた。彼は合衆国憲法修正第13条、14条、15条の可決に尽力した。これらは南北戦争後の修正条項で、白人だけでなくすべての人々に適用される権利を明記し、個々の州がこれらの権利を否定することを禁止している。こうした修正条項が敬意をもって確実に実践されるには後の世代の勇敢な公民権運動支持者の努力が必要であったが、そのよりどころとなったのはダグラスらの築いた憲法の基盤であった。ダグラスは、その後も首都ワシントンＤＣで地方自治体の数々の公職に就き、女性の選挙権と平等を求める活動を続け、1895年に死去した。フレデリック・ダグラスはいかなる見地からも、アフリカ系米国人として19世紀最大の偉人であった。

地下鉄道

フレデリック・ダグラスは非凡な才能の持主であった。ダグラスの時代には、白人にもアフリカ系米国人にも、さまざまな戦術を駆使して奴隷制と闘い、黒人の公民権を勝ち取ろうとした人たちがいた。奴隷州と自由州がそれぞれ半分を占める国においては、まず第一に、奴隷たちを北部の自由州へひそかに逃亡させるという戦術が取られるのは当然であった。いくつかの宗派の信者たちがその活動の先頭に立った。1800年ごろから、多くのクエーカー教徒（英国で創設されペンシルベニア州で大きな影響力を持った宗派）が、脱走した奴隷をかくまい、彼らが北部で新しい生活を始めたりカナダへ逃亡したりするのを助けるようになった。1793年および1850年に制定された「逃亡奴隷法」は逃亡奴隷の捕獲と送還を義務付けたが、クエーカー教徒はこの法律を不当と見なし、非暴力的に法律に違反した。その後、福音メソディスト派、長老派、および組合教会派がこの活動に参加し、さらに多くの逃亡奴隷の南部脱出を助けた。

自由を求めてカナダへ逃亡する奴隷たちを率いるハリエット･タブマン

自由になった黒人たちは、「地下鉄道」と呼ばれるこの運動で大きな役割を果たすようになった。地下鉄道と名付けられたのは、実際に地下トンネルや汽車が使われたからではなく、鉄道の用語が使われたからである。まず、地元の地理に詳しい「車掌」が、一人または複数の奴隷を「駅」（概して、協力的な「駅長」の自宅）に連れていった。逃亡奴隷は、自由な土地にたどり着くまでこうした駅を転々としていった。奴隷たちは通常、暗くなってから移動し、ひと晩におよそ16～32キロメートル移動した。これは極めて危険な活動であった。車掌も奴隷も、捕まれば厳しく処罰され、あるいは処刑された。

最も有名な車掌はハリエット・タブマンという女性であった。彼女はアフリカ系米国人の逃亡奴隷で、1849年に自由な土地に到着した後、地下鉄道の活動のためにおよそ20回南部に戻り、自分の兄弟姉妹や両親をはじめ約300人の奴隷を救出した。タブマンは変装の名人で、無害な老女や気の狂った老人などを装った。彼女が脱走させた奴隷は一人も捕まることがなかった。北部を目指すアフリカ系米国人は、聖書の「約束の地」に導かれることになぞらえてタブマンを「モーゼ」と呼び、奴隷州と自由州の境界となったオハイオ川を「ヨルダン川」に例えた。奴隷主たちはタブマンの捕獲に4万ドルの懸賞金を懸け、ジョン・ブラウンは彼女を「タブマン将軍」と呼んだ。

1850年に、地域間の政治的な妥協の結果、より強力な新しい逃亡奴隷法が可決された。それまで北部の多くの州は旧逃亡奴隷法の執行を差し控えていたのだが、この新しい法律では、特別検査官が導入され、彼らが連邦裁判所で逃亡奴隷に対する奴隷主の権利を行使する権限が認められた。またこの法律の執行を怠った連邦保安官や、逃亡奴隷を援助した者には、すべて厳罰を科した。その結果、地下鉄道はさらに積極的な戦術を使わざるを得なくなり、法廷から黒人を連れ去ったり、連邦保安官に拘束されている黒人を救出したりする大胆な行動も見られた。

地下鉄道の仲介者、駅長、車掌らの人数は相対的には少なかったが、彼らの活動によって自由になった奴隷は何万人にも上った。自らの危険を顧みない彼らの勇敢な行動は、北部における奴隷制反対の感情を高めた。南部の多くの白人はそうした反応と、1850年の逃亡奴隷法に対する北部の抵抗を見て、国の半分を奴隷州が占めるような事態を、北部が永久に容認し続けることはないと確信するに至った。

剣によって…

1663年にはすでに、バージニア州グロスター郡で黒人数人が反乱を企てたかどで斬首刑になったことに対し、黒人奴隷が奴隷主に対して何度も反乱を起こしていた。ハイチで黒人奴隷たちがフランス人入植者を追放し、奴隷農園制度を廃止して、独立共和国を設立したことは、アフリカ系米国人たちを鼓舞する出来事であった。ペンシルベニア州フィラデルフィアで黒人実業家として成功したジェームズ・フォーテンは、アフリカ系米国人も「いつまでも現在の束縛状態にいることはできない」と宣言した。米国南部の白人農場主たちは、フォーテンの言葉が正しいことを恐れ、わずかでも反乱の兆候があれば容赦なく罰した。

しかし、絶望的な戦いであっても、武器を取る決意を固めた勇敢なアフリカ系米国人もいた。おそらく最も有名な戦いは、1831年にバージニアで起こった反乱である。バージニア州サザンプトン郡にナット・ターナー（1800～1831年）という奴隷がいた。ターナーの最初の主人は、彼が読み書きと宗教を学ぶことを許した。ターナーは説教を始め、信者を集めるようになり、一部の記述によると、自分は黒人を自由に導くために神に選ばれた存在であると信じるようになった。1831年8月22日、ターナーと50～75人の奴隷がナイフ、手おの、まさかりなどで武装し、2日間にわたって家から家へと回って奴隷を片端から解放し、その過程で大勢の女性や子どもを含む白人のバージニア州民50人を殺害した。

これに対する反撃は迅速かつ圧倒的なものであった。地元の民兵が反乱者を追跡・捕獲し、48人が裁判にかけられ、うち18人が絞首刑になった。ターナーは逃亡したが、同年10月30日、洞窟（どうくつ）の中に追い詰められた。裁判にかけられ有罪となったターナーは、絞首刑に処され、その遺体は皮をはがれ、首を切られ、四つ裂きにされた。一方で、復讐（ふくしゅう）心に燃えた白人の暴徒が、ターナーの反乱とはかかわりのない黒人も含め、手当たり次第に黒人を襲撃し、およそ200人の黒人が殴打され、リンチにかけられ、あるいは殺害された。

ナット・ターナーの反乱の政治的な影響は、サザンプトン郡をはるかに越えた広域に広がった。南部各地では、それまでにも増して厳しく黒人の自由を制限する新しい法律が制定され、奴隷制反対の運動が抑圧された。一方ボストンでは、ウィリアム・ロイド・ギャリソンが、ターナーの反乱の責任は奴隷制反対運動にあるとする者を偽善者として非難した。ギャリソンは、米国の白人は事あるごとに誇らしく自由を賛美しているが、奴隷たちもまさにその自由を求めて戦っているのだと主張し、次のように述べた。

1831年にバージニアで起きた、ナット・ターナーの率いる奴隷たちの反乱

あなたがたは、奴隷解放を支持する平和的な同胞が奴隷の反乱を扇動していると非難する。そのような非難は、悪意に満ちた中傷として撤回すべきである。奴隷たちは、われわれの奨励を必要とはしない。彼らを駆り立てるのは、彼らのむち打たれやせ衰えた体、絶え間ない重労働、彼らの無知、あなたがたの父が自由を求めて戦ったすべての野原、谷、丘、そして山、あなたがたの演説、会話、式典、パンフレット、新聞、わき上がる声、海を越えて渡ってくる音声、そして彼らの上からも下からも回りからも送られてくる抵抗への勧誘である。それ以上の何が必要だろうか。そのような周囲のさまざまな力によって影響を受け、新しい傷の痛みに苦しむ彼らが、他の「英雄たち」が戦ったように、失われた権利を求めて戦うために立ち上がるのは、意外なことだろうか。それは決して意外なことではない。

反逆者ジョン・ブラウン

ジョン・ブラウン（写真は1859年ごろのもの）は、大規模な奴隷の反乱のきっかけを作ろうとしてバージニア州（現在のウェストバージニア州）ハーパーズフェリーを襲撃したが、失敗に終わった。

武力で黒人奴隷を解放しようとしたもうひとつの著名な事件は、白人の米国人を指導者とするものであった。ニューイングランド出身のジョン・ブラウンは、長年にわたって力ずくで奴隷制廃止を実現させることを検討していたが、1847年にフレデリック・ダグラスにその計画を実行する意志を打ち明けた。ブラウンは1855年に、奴隷制支持派と反対派が激しく衝突していたカンザス準州に入った。衝突の争点は、カンザスを「自由の地」として連邦に加盟させるか奴隷州として加盟させるか、という点であった。支持派と反対派がそれぞれに入植地を築いていた。

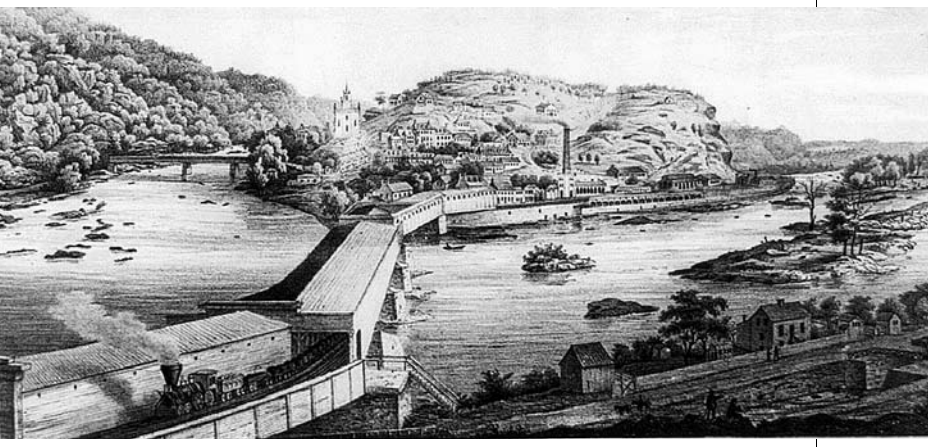
カンザスで奴隷制支持派が「自由」な土地ローレンスを襲撃した後、ブラウンは4人の息子たちと共に、1856年5月24日、奴隷制支持派の村ポタワトミーを襲撃し、男性5人を殺害した。これが「ポタワトミーの虐殺」と呼ばれる事件である。続いてブラウンは、奴隷制支持派の武装集団に対して次々とゲリラ攻撃を行った。彼はニューイングランドに戻り、黒人の戦闘集団を結成しようとしたが、その成果は思わしくなかった。しかし、主要な奴隷制廃止論者たちから資金を集めることにはある程度の成功を収めた。

カナダでブラウンの支持者による集会が行われ、ブラウンは、南部の奴隷主たちを追放するための暫定政府の最高司令官に選ばれた。彼は、ウェストバージニア州（当時はバージニア州）ハーパーズフェリーに近いメリーランド州内の地点に秘密の基地を設置し、支持者たちが集まるのを待ったが、そのほとんどは現れなかった。1859年10月16日、ブラウンはおよそ20人の白人と黒人から成る部隊を率いて、ハーパーズフェリーの連邦武器庫を占領し、約60人の地元名士を人質に取った。彼の計画は、脱走奴隷の集団を武装させ、南へ向かって進軍しながら途中でさらに多くの奴隷を解放していくことであった。しかしブラウンはその時期を逸し、間もなくロバート・E・リー中佐の率いる米海兵隊の中隊に包囲された。（リーは後に南北戦争で南軍の司令官となる。）ブラウンは降伏を拒否した。その後の戦闘で負傷し捕獲されたブラウンは、バージニア州で裁判にかけられ、反逆、共同謀議、および殺人の罪で有罪となった。判決が下された後で、ブラウンは陪審団に向かって次のように述べた。

わたしがこのように介入したことは、わたしが常に率直に認めてきたように、神に嫌われた貧しい人々のためにしてきたことであり、間違ったことではなく正しいことであったと信じている。今、正義の目的を推進するためにわたしが自らの生命を失うことが必要なら、また私の流す血とわたしの子どもたちの血とを混ぜ、この奴隷の国における不道徳、残酷、かつ不正な立法によって権利を無視された何百万もの人々の血と混ぜることが必要と見なされるならば、わたしはそれに従おう。だからそれを実行するがいい。

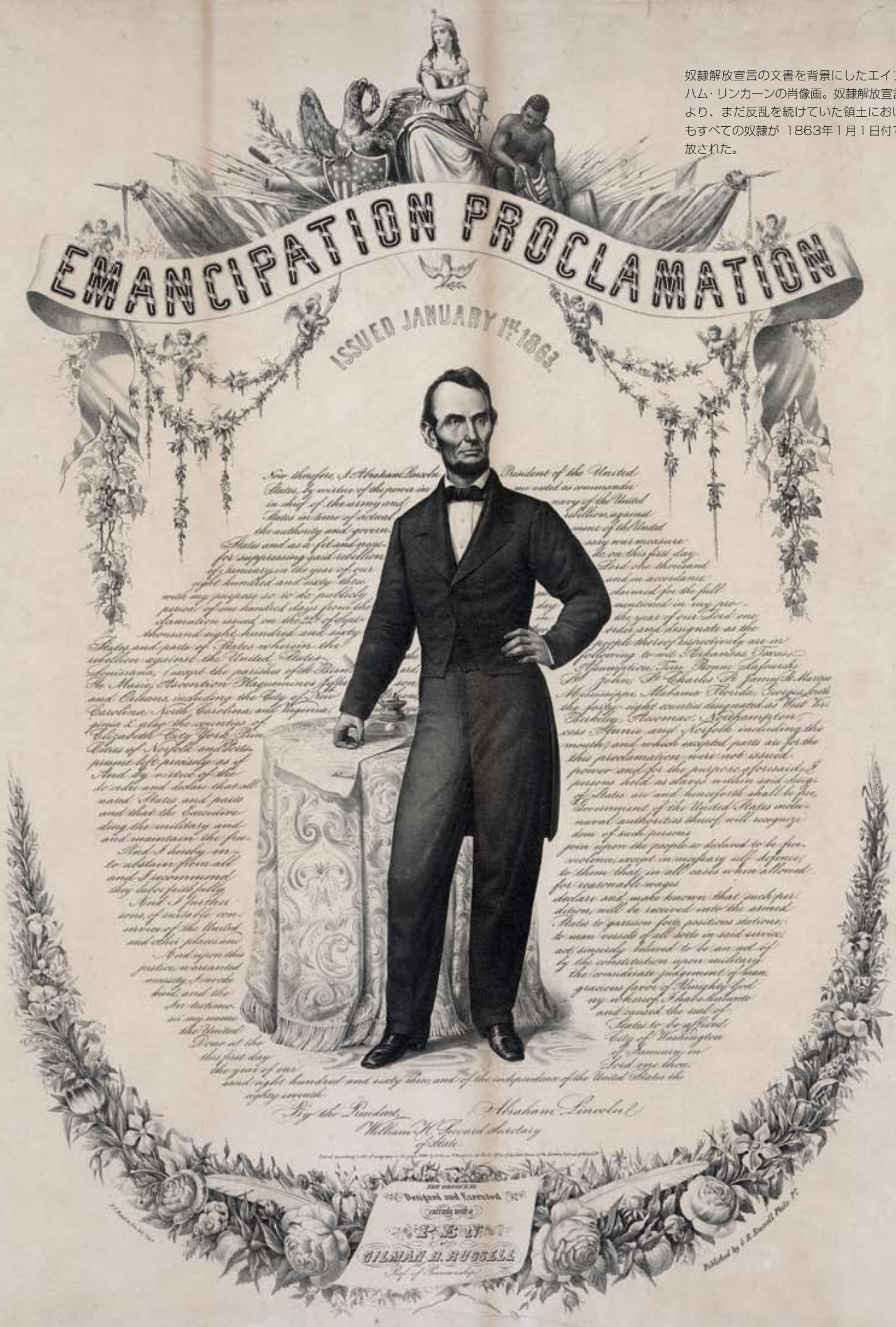
ブラウンは、1859年12月2日に絞首刑に処され、奴隷制反対運動の殉教者となった。その1年後に始まった南北戦争で北軍の兵士たちは、「ジョン・ブラウンの亡きがら」という歌を歌いながら行進した。（この歌の歌詞にはいくつかのバージョンがあり、ジュリア・ワード・ハウの作詞によるものは後に「リパブリック賛歌」として知られるようになった。）歌詞の一節は次のようなものである。

ジョン・ブラウンの亡きがらは、土の中で朽ちている
ジョン・ブラウンの鉄砲は、さびと化した血痕で赤く染まっている
ジョン・ブラウンのやりは、最後の果敢な一突きを見せた
彼の魂は行進を続けている！



ジョン・ブラウンの悪名高い襲撃の現場、バージニア州（現在のウェストバージニア州）ハーパーズフェリー

奴隷解放宣言の文書を背景にしたエイブラハム・リンカーンの肖像画。奴隷解放宣言により、まだ反乱を続けていた領土においてもすべての奴隷が 1863年1月1日付で解放された。



南北戦争

米国では独立直後から1860年にエイブラハム・リンカーンが大統領に選出されるまでの間、奴隷制と米国の黒人の地位をめぐる問題が、北部と南部の関係を徐々に悪化させていった。リンカーンは、奴隷制を「醜悪な不正」と呼んでこれに反対したが、彼の主な関心事は連邦を維持することであった。従って、すでに奴隷制の存在する州ではそれを認める一方で、奴隷制が西部の準州へ拡張されることを禁止しようとしていた。し かし、南部の白人は、リンカーンの大統領選出を南部の社会秩序に対する脅威と見なした。1860年12月にサウスカロライナ州が連邦から離脱したのを皮切りに、南部11州が連邦を脱退して、アメリカ南部連合を結成した。

リンカーンをはじめ何百万もの北部人にとって連邦は、歴史家のジェームズ・M・マクファーソンが書いているように、「ひとつまたはいくつかの州の行動によって解体することのできる自主的な州の同盟ではなく、米国民すべてを結び付けるきずな」であった。リンカーン大統領は個人秘書に次のように語っている。「われわれが今すぐ答を出さなければならないのは、自由な政府においては少数派は好き勝手に政府を解体する権利を持つのかという問題だ」 こうして、リンカーンは、戦争の初期に次のように宣言した。「この戦いでわたしが最も重視している目標は連邦を救うことであり、奴隷制を守ることでも破壊することでもない。奴隷を一人も解放せずに連邦を救うことができるのであれば、わたしはそうするだろう。すべての奴隷を解放することによって、連邦を救うことができるのであれば、わたしはそうするだろう。そして、奴隷の一部を解放し、残りを奴隷のままにしておくことによって連邦を救うことができるのであれば、わたしはそうするだろう」

しかし、地域間の対立を激化させる要因となったのは奴隷制であった。悲惨な戦争が長引くに従い、多くの北部人は、いかなる状況においても奴隷制を受け入れる意志をなくしていった。南部の黒人と直接接触した北軍兵士たちが、黒人の置かれた苦境に同情することも多かった。リンカーンも、奴隷を解放することによって南部連合の経済基盤を攻撃し、ひいてはその戦争遂行能力に打撃を与えることができると考えた。また解放された奴隷たちは、北軍のために武器を取り、自分の力で自由を「勝ち取る」ことができた。こうした諸々の理由が重なり、黒人奴隷の解放と連邦の維持とが、北軍の戦う目的として結び付いた。

1863年1月1日に発効したリンカーンの奴隷解放宣言は、反乱州のすべての奴隷は「(同日以降) 永遠に、自由の身となる」と宣言した。リンカーンはこの文書に署名をしながら、「わたしの生涯において、この文書に署名をすることほど、正しいことをしていると確信したことはない」と述べた。

後にアフリカ系米国人の指導者となるブッカー・T・ワシントンは、7歳のころに、住んでいたプランテーションで奴隷解放宣言が読み上げられるのを聞いた。ワシントンは、1901年に執筆した自伝『Up From Slavery』に次のように書いている

> 偉大な日が近付くにつれて、奴隷居住区ではいつもより歌声が多くなった。歌声はそれまでより大胆に響き渡り、夜遅くまで続くようになった。聞こえる労働歌の歌詞のほとんどは、何らかの意味で自由に言及するものだった。(中略) よそから来たと思われる人 (合衆国の役人だったと推測する) が短いスピーチをし、次にかなり長い文書を読み上げた。それが奴隷解放宣言だったのだと思う。それが終わった後、わたしたちはみんな自由であり、好きな時に好きな所へ行ってよいと告げられた。わたしの脇に立っていた母は、腰をかがめて子どもたちにキスをした。喜びの涙が彼女のほおを伝っていた。彼女はこれがどういうことなのかをわたしたちに説明し、この日が来ることを長い間祈っていたが、自分が生きているうちには来ないのではないかと心配していたと話してくれた。

脱退した諸州は、議会の議席を回復する条件として、合衆国憲法修正第13条、14条、および15条を批准することを義務付けられた。これらの「再建修正条項」は、奴隷制を廃止し、すべての市民に対する法による公平な保護 (州によるものも含む) を保証し、「人種、肌の色、または隷属の前歴」に基づく投票権の差別を禁止した。このように、南北戦争後、アフリカ系米国人にも他の米国民に与えられていた公民権を保証するための法的基盤が確立された。しかし、恥ずべきことにそれからさらに1世紀近くにわたって、こうした法律は、その意味するところは明白だったにもかかわらず、地域的な政治をめぐる妥協の駆け引きがアフリカ系米国人のための正義に優先することになった。

南北戦争の黒人兵士

1861年に南北戦争が始まった時、ワシントンDCに住む自由黒人だったジェーコブ・ドッドソンは、サイモン・キャメロン陸軍長官に手紙を書き、ワシントンの町を守るために志願することを望む「300人の信頼できる有色の自由人」がいることを伝えた。これに対してキャメロンは、「本省は現在、いかなる有色の兵士にも、この政府への奉仕を呼び掛ける意志はない」と返答した。植民地の民兵軍には奴隷も自由人も含め黒人が所属していたこと、また独立戦争では両陣営に黒人兵がいたという事実も役に立たなかった。多くの黒人男性は、軍隊に志願すれば自由と全面的な市民権を得られるかもしれないと考えた。

なぜ多くの軍および民間の指導者たちは黒人兵の採用を拒否したのだろうか。黒人兵には白人兵と戦う勇気がないだろうという意見があった。黒人は兵士として劣っているという意見、また白人兵が黒人兵と一緒に戦おうとはしないだろうという意見もあった。しかし、こうした意見にくみしない軍指導者も少数ながら存在した。

サウスカロライナ州のサムター要塞で南北戦争の最初の砲撃が行われてからほぼ1年後の1862年3月31日、デイビッド・ハンター将軍の率いる北軍の部隊が、フロリダ州北部、ジョージア州、およびサウスカロライナ州沿岸の諸島を占領した。島で豊かな綿花やコメのプランテーションを所有していた白人たちは、南部連合の支配する本土へ脱出した。彼らの奴隷たちの大半は島々に残り、間もなく本土からも脱走奴隷が島に渡ってきた。彼らは、北軍の前線にたどり着きさえすれば自由になれると考えた。しかし、話はそう簡単ではなかった。

ハンターは、この地域に多い感潮河川や島々で南部連合のしぶといゲリラ的な抵抗勢力と戦うために、さらに多くの兵力を必要とした。本土から脱走してくる奴隷によって島々の黒人人口が膨れ上がるのを見たハンターは、アフリカ系米国人の存在が軍の人員不足を解決できるのではないかと考え、極めて急進的な計画を立てた。

強硬な奴隷制廃止論者だったハンターは、自らの責任で、これらの島々だけでなく南部連合の支配するサウスカロライナ、ジョージア、およびフロリダの各州においても奴隷を解放し、武器を持つ能力のある黒人男性を北軍兵士として採用した。そして、南北戦争で初めての黒人だけから成る連隊を結成し訓練しようとした。

当時、情報伝達には時間がかかり、エイブラハム・リンカーン大統領がハンターの黒人連隊のニュースを耳にしたのは6月になってからであった。リンカーンは奴隷制には反対していたが、厳しい戦況下の北部、特に北部に味方した境界の奴隷州における世論より速いペースで物事を進めることを恐れた。また断固として、「いかなる司令官も、わたしが責任を負うべきそのようなことを、わたしに相談することなくしてはならない」と主張した。大統領はハンター将軍に怒りに満ちた手紙を送り、将軍にも、また大統領のいかなる部下にも、何者をも解放する権利はないと伝えたが、一方で、大統領自身が自ら選んだ時期に奴隷を

「黒人に『U.S.』と記された真ちゅうの記章を付けさせ、（中略）肩にマスケット銃を乗せ、ポケットに弾丸を入れさせれば、地球上のどのような権力も彼が市民権を獲得したことを否定することはできない」――フレデリック・ダグラス

奴隷解放宣言とともに、北軍は積極的にアフリカ系米国人兵士を採用し始めた。

解放する権利を主張することも忘れなかった。ハンターは黒人連隊を解散するよう命じられたが、彼のまいた種は間もなく芽を出した。

ハンターが黒人連隊を解散させてから2週間後の1862年8月、陸軍省は、ルーファス・サクストン将軍に、北軍初の黒人連隊、サウスカロライナ第1義勇連隊の結成を許可した。このほかにも黒人連隊が沿岸地帯で結成され、戦争が終わるまで沿岸の島々の防衛に成功した。

同じころ、カンザス第1黒人義勇連隊も結成されたが、これは正式に陸軍省の承認を得たものではなかった。一方リンカーン大統領は、奴隷解放宣言とアフリカ系米国人兵士の採用の基盤を慎重に築いていた。そして北部の白人が、南部連合の経済と戦争遂行における黒人奴隷の極めて重要な役割を理解するようになるに従い、奴隷解放を軍事的必要性として正当化することができた。

1863年1月1日にエイブラハム・リンカーンが奴隷解放宣言に署名すると、奴隷に対する軍の方針がさらに明確になった。北軍の前線に到達した奴隷は自由となった。また陸軍省は、北軍の新たな連隊として合衆国黒人部隊(USCT)を結成し、黒人兵の募集と採用を始めた。しかし、これらの連隊の将校はすべて白人であった。

1864年秋までには、多くの北部諸州および北軍が占領した南部の州で、およそ140の黒人連隊が結成されていた。南北戦争中、約18万人のアフリカ系米国人が従軍し、うち7万5000人以上が北部の黒人志願兵であった。

黒人連隊と白人連隊は隔離されていたが、戦場は同じであった。黒人兵は、敵である南部連合と戦うと同時に、味方である北軍兵の一部からの疑惑とも戦わなければならなかったが、勇敢に戦って勝利を収めた。

黒人は軍隊に受け入れられたものの、その役目は守備隊あるいは雑役に限られることが多かった。有名なマサチューセッツ第54歩兵連隊のロバート・グールド・ショー大佐は、部下の黒人たちの兵隊としての能力を証明するため、戦闘に参加させてほしいと上官に積極的に働きかけた。そのほかにも、部下の実力を理解し、同様の努力をした将校たちがいた。黒人兵は、白人兵と同じ給料をもらうために闘わなければならなかった。白人より低い給料を拒絶した連隊もあった。議会が黒人兵にも平等な給料を支払うことを定めた法律を可決したのは、南北戦争の終わった1865年のことであった。

こうした制約があったにもかかわらず、合衆国黒人部隊は合計449回の戦闘に参加し、うち39回は大規模な戦闘であった。彼らは、サウスカロライナ、ルイジアナ、フロリダ、バージニア、テネシー、アラバマ、その他の各地で戦い、もし捕虜となれば戦争捕虜としての権利を与えられず奴隷として売られることが分かっていたが、それでも勇敢に砦を襲撃し、砲撃に立ち向かった。黒人兵は、兵士としてのすべての義務を、名誉をもって、勇敢に遂行した。

将校は白人に限るというのが陸軍の方針であったが、最終的には約100人の黒人兵が将校に昇進した。また黒人の軍医8人が黒人部隊に配属された。そして、黒人部隊の兵士十数人が、その勇敢な働きによって名誉勲章を受章した。

1948年に、ハリー・S・トルーマン大統領が、軍隊の人種差別廃止を命令した。現在も、軍隊は米国の黒人にとって社会的・経済的機会を創出する推進力となっている。しかし、米国の軍隊でアフリカ系米国人が完全に受け入れられるための道を切り開いたのは、南北戦争時代の黒人兵が払った犠牲であった。さらに根本的な点として、彼らの努力は自由と尊厳を求めるアフリカ系米国人の闘いの重要な要素であった。

ジョイス・ハンセン
ジョイス・ハンセンは、コレッタ・スコット・キング名誉図書賞を4回にわたって受賞。『Between Two Fires - Black Soldiers in the Civil War』をはじめ、若い読者のための現代・歴史小説およびノンフィクションの著書15冊のほか数々の短編小説を出版している。

— 3 —

「分離すれど平等」

「再建」の失敗に対するアフリカ系米国人の反応

武装した白人と黒人の間に立つ解放黒人局の代表を描いた再建時代の木版画。再建の失敗が、米国南部の「ジム・クロウ」制度による人種隔離につながった。

南北戦争では60万人以上の米国民が命を失った。そうした犠牲により、この国の最も困難な対立のいくつかが解決された。ついに奴隷制が禁止され、いかなる州も合衆国から脱退することはできないという原則が確立された。しかし、依然として米国社会の将来のあり方をめぐって互いに相容れないビジョンが存在し、その後のアフリカ系米国人に極めて大きな影響を及ぼすことになった。

そのビジョンのひとつは、19世紀および20世紀初期の民主党の考え方で、米国の個人主義と大きな政府に対する懐疑心とを、地方および州政府の権限を連邦政府の権限に優先させる考え方と融合させるもので、少なくとも南部においてはその考え方にさらに根強い白人優位主義が加わった。1850年代に創設された共和党は、経済開発促進のために連邦政府の権限を使うことにより積極的であった。その中心的な信念は「自由労働」と呼ばれるものであった。何百万もの北部人にとって、自由労働とは、人は（当時この概念が適用されるのは主として男性だけであった）、どこでも、いかなる形でも自由に働くことができ、自分の名前で財産を蓄積することができ、さらに最も重要なことは、自分の才能と能力が許す限りいくらでも出世することができる、というものであった。

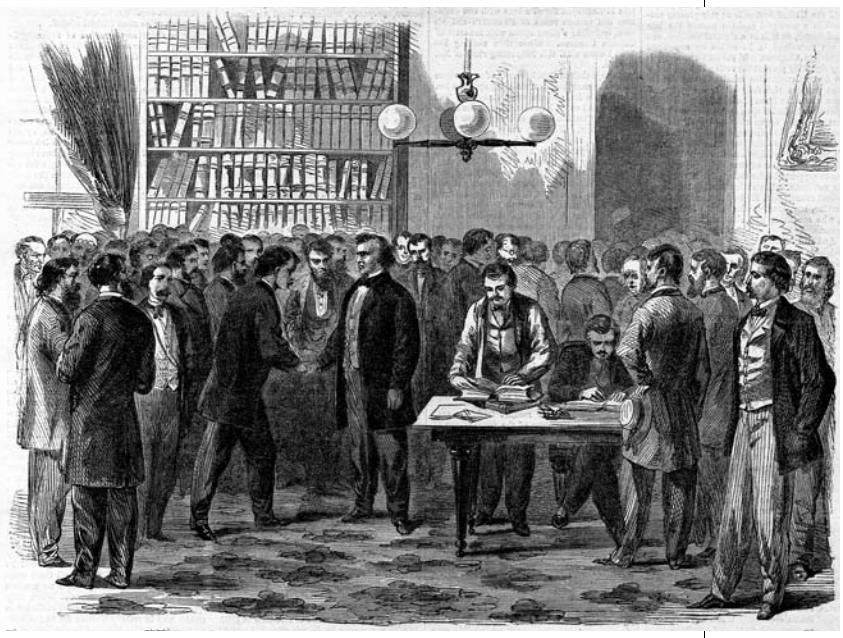
エイブラハム・リンカーンは、こうした自力で出世した人間の模範となった。大統領となった彼は、「わたしは、25年前には労働者として雇われ、おので木材を切ったり、平底船の上で働いたりしていたと語ることを恥とは思わない」と、誇りを持って述べている。多くの共和党員は奴隷制を不道徳であるとして非難し、南部は経済発展においても社会的流動性においても遅れているという考えでは全員が一致していた。

歴史家のアントニア・エサートが述べているように、共和党員は南部を「奴隷所有者の貴族階級を頂点にした、変革不可能な階級社会」と見なした。

北部の軍事的な勝利によって奴隷制が廃止された後は、北部の自由労働の思想に基づき、解放された黒人には公民権が与えられることが要求された。南北戦争後、北部の共和党員は当初、自由労働の原則に従って南部を「再建」しようと固く決意した。南部の多くの白人はこれに抵抗したが、当面は北部の軍事力によって、黒人は投票権と教育の機会を保証され、総じて他の米国民と同様に憲法で定められた権利を享受することができた。しかし、北部で南部との和解を求める声が強くなるにつれ、黒人の願望を支援しようとする北部人の決意は薄れていった。19 世紀末までには、南部の上流階級が、黒人の前進を逆行させ、法律による抑圧的な人種隔離制度を課していた。

議会の再建活動

1865 年 4 月にエイブラハム・リンカーンが暗殺され、アンドリュー・ジョンソン副大統領が大統領に就任した。ジョンソンは、テネシー州出身の民主党員で、1864 年の大統領選では、中道路線と戦後の再建に取り組む意志表示としてリンカーンの副大統領候補に選ばれた。大統領となったジョンソンは、直ちに旧南部連合の諸州を全面的に連邦に復帰させた。南部諸州は、奴隷制を禁止する憲法修正第 13 条を批准することを義務付けられたが、アフリカ系米国人州民の平等と公民権を保護する義務は要求されなかった。ジョンソンのガイドラインの下で組織された白人支配の南部諸州政府は、直ちに黒人取締法を制定した。これは、「自由」であるとされるアフリカ系米国人の行動を厳しく規制する懲罰的な法律であった。典型的な黒人取締法では、外出禁止令を課し、銃器所持を禁止し、また許可なく農場を脱走した元奴隷を放浪者として投獄することさえあった。同時にジョンソンは、放棄されていた南部のプランテーションを旧奴隷所有者に返還することを命じた。



連邦に対して武装蜂起した白人反乱者たちに恩赦を与えるアンドリュー・ジョンソン。南部出身のジョンソンは、エイブラハム・リンカーンが暗殺されたため、大統領に就任した。

多くの北部人はこうした措置に憤慨した。そして自分たちは、人種差別主義の南部上流階級に再び権力を与えるために戦い、命を捧げたのではないと、断固として主張した。1866 年の連邦議会選挙では、黒人の公民権拡張と、さらに広範には、政府の権限により南部を北部の路線に沿って再建することを目指す「共和党急進派」議員が大勢復活した。この第 40 連邦議会は、ジョンソンの承認した南部諸州政府の下で選出された議員に議席を与えることを拒否した。そして、いくつかの重要な公民権法の施行に対するジョンソン大統領の拒否権の行使を覆した。

そのひとつは、解放黒人局の活動を拡大するための法律であった。同局はリンカーンが暗殺される前に設立された連邦政府機関で、解放された奴隷の自由な生活への移行を支援することを目的としており、医療サービスを提供したり、黒人の子どもたちのために何百もの学校を建設したり、解放された奴隷が元の所有主やその他の雇用主と労働契約を交渉する手助けをした。

また 1866 年公民権法は、合衆国内で生まれた者は、人種、肌の色、あるいはそれまでの状況にかかわらずすべて米国民であると明言した。従ってアフリカ系米国人は、契約を結び実行させる権利、訴訟を起こし、裁判を受ける権利、そして財産を所有する権利を獲得した。

ジョンソンは、こうしたさまざまな措置に反対し、異論はあるもののほぼ間違いなくその適用を妨害しようとしたため、連邦議会下院は 1868 年にジョンソンを弾劾（起訴）し、憲法で定められた大統領罷免の手続きを開始した。上院は 1 票差でジョンソンを無罪としたが、それ以降ジョンソンは任期を通じて議会の再建計画にほとんど抵抗しなかった。

最も重要なのは、提案されている合衆国憲法修正第 14 条を旧反乱州が批准するまではそれらの州が議席を取り戻すことはできないということを、議会が明確にしたことである。この修正条項は、後に、近代の公民権運動が人種の平等を求める主張の法的基盤となった。修正第 1 条から第 10 条までは一括して権利章典と呼ばれ、連邦政府による侵害から米国民を守るものであった。しかし、権利章典は、州政府が制定した人種差別主義的な法律からアフリカ系米国人を守ることはほとんどできなかった。1868 年 7 月に批准された修正第 14 条はこの点を改善し、「いかなる州も、法の適正な過程によらずに、何人からもその生命、自由または財産を奪ってはならない。いかなる州も、その管轄内にある者

に対し法の平等な保護を否定してはならない」と定めている。それからほどなくして採用された修正第15条は、「合衆国市民の投票権は、人種、肌の色または隷属の前歴を理由として、合衆国または州によって拒否または制限されることはない」と明言している。

一時的な前進、そして多くの後退

南部各地で北軍兵士が再建法を執行したため、アフリカ系米国人は大きく前進することができた。奴隷小屋や強制労働といった奴隷制を支えていた要素が解体された。黒人たちが独自に設立する教会が増えていった。黒人牧師の率いるこれらの教会は、後にマーティン・ルーサー・キング・ジュニアをはじめとする指導者たちが近代公民権運動を発展させていくための基盤となった。

南部のいくつかの州では、黒人有権者と少数の白人が手を組んで、共和党主導の政府を選出した。多くの黒人が、州および郡政府で重要な公職に就いた。連邦議会では、アフリカ系米国人2人が上院議員に選出され、14人が下院議員となった。その代表的な存在が、アラバマ州初の黒人議員ベンジャミン・スターリング・ターナーであった。奴隷として生まれたターナーは、リンカーンの奴隷解放宣言によって自由となった。間もなく起業家として頭角を現し、続いてセルマの収税官および市会議員に選出された。セルマは、後に20世紀の公民権闘争で極めて重要な役割を果たすことになる土地である。1870年に連邦下院議員に選出されたターナーは、黒人の南北戦争退役軍人のために月々の恩給を確保した。また自分の選挙区のためにより多くの連邦政府支出を獲得すべく努力した。

再建時代のアラバマ州から連邦下院議員に選出されたベンジャミン・スターリング・ターナー。再建時代が終わり、北軍兵士が南部から撤退するとともに、南部の黒人たちは組織的に政治的権利を奪われていった。

再建時代の南部における共和党主導の州政府は、概して税金を引き上げ、社会福祉を拡大した。その革新的な事業としては、州の支援する教育制度や、経済成長のための補助制度などがあった。こうした改革の恩恵を最も大きく受けたのはアフリカ系米国人であり、その当座は、彼らの公民権が永久的に確保されたかのように見えた。

しかし、南部の白人の大多数は、黒人の平等に抵抗する決意を固めていた。彼らの多くは、小さいころから教え込まれた黒人の劣等性という厳しい固定観念を捨てることができなかった。多くの南部の白人は非常に貧しく、目に見える人種的優越性という認識に自らのアイデンティティーを求めた。南部の上流階級は、こうした人種的な分裂によって、共通の経済的利益を追求しようとする人種間の政治的協力を妨げることができる、と考えた。彼らはしばしば、政治的権力を回復するための手段として、白人の人種的な怒りを利用した。

この時代の南部の白人は主として民主党員であり、南部の白人の共和党員に対して激しい政治的攻撃を開始した。彼らは、南部人の共和党員を「スキャラワグ（役に立たない小さな動物）」と呼んだ。また南北戦争後の南部で一旗上げようとしてやってきた北部人は「カーペットバッガー」と呼ばれた。彼らはカーペットで作った旅行バッグを持って北部からやってきたと言われたからである。

新たに権限を与えられたアフリカ系米国人に対する反動はさらに過酷であった。黒人有権者を威嚇し投票をさせないようにするために、「白いカメリアの騎士団」（南部に咲く純白のカメリアの花を白色人種の純血の象徴としたもの）や「クー・クラックス・クラン（ＫＫＫ）」など、暴力で黒人を襲撃する秘密のテロ組織が結成された。1874年にニューオーリンズで行われた選挙では、ユリシーズ・Ｓ・グラント大統領が、公正な選挙を実施するために、歩兵３連隊と砲艦の船隊を派遣した。グラントは連邦政府軍の力でクランを粉砕したが、その後も過激な白人たちが非公式の「社交クラブ」を結成して暴力行為を続けた。歴史家のジェームズ・Ｍ・マクファーソンによると、こうした社交クラブは「自警団的な組織であり、『黒色および褐色のニグロやカーペットバッガーによる支配から南部を取り戻す』ことを目指した南部諸州の民主党の武装補助団体として機能していた」

北部の白人の間でもグラントの行動は行き過ぎであったという意見が一部にあり、またこの戦いに疲れを感じ始める人々も多かった。マクファーソンは次のように書いている。

> 北部人の多くは、白人同盟と「ニグロやカーペットバッガー」の州政府に対して、「けんか両成敗」という態度を取った。彼らは、連邦軍を撤退させ、南部の問題は南部の人々に解決させよう、その結果南部を白人優位主義の民主党が支配することになってもかまわない、と主張した。

そして、事実、ほぼその通りの結果となった。不正や威嚇や暴力で損なわれた選挙によって、民主党は再び南部各地で徐々に州政府を支配するようになった。1876年の大統領選挙は大接戦となり、政治的交渉によって1877年に共和党のラザフォード・B・ヘイズが勝者となった。その見返りとして、ヘイズは最後の連邦軍を南部から撤退させた。こうして、当時のアフリカ系米国人の大多数を占める旧南部連合州に住んでいた黒人たちは、再び人種差別的な州法に翻弄（ほんろう）されることとなった。

「ジム・クロウ」の出現

その後、特に1890年以降、南部各州の政府は、日常生活のほぼあらゆる側面で人種の分離を義務付ける人種差別法を採用した。こうした法律によって、公立学校、列車の車両、公立図書館、水飲み場、レストラン、ホテルなどをすべて、白人用と黒人用に分けることが義務付けられた。このような制度は、俗に「ジム・クロウ」と呼ばれるようになった。その由来は1828年のミンストレル・ショーの「ジャンプ・ジム・クロウ」という歌であったが、これは白人の芸人が顔を黒く塗って無学で劣等な黒人のカリカチュアを演じたものであった。

連邦裁判所が憲法による保護を広義に解釈したならば、ジム・クロウ制度は存在できなかったはずだ。しかし司法府は、逆に法の細部や抜け穴に固執し、人種差別法を無効とすることを避けた。1875年に連邦議会が制定した公民権法を最後に、その後1世紀近く公民権法が制定されることはなかった。1875年公民権法は、「何人」も、いかなる人種あるいは肌の色の市民に対しても、ホテル、劇場などの公共施設、公共の娯楽施設、および公共の輸送施設において、平等な扱いを拒否してはならないと定めた。しかし、1883年に最高裁判所は、修正第14条は州による差別を禁止しているが、個人による差別を禁止していないとして、この公民権法を違憲と判断した。従って、連邦議会は、個人による差別行動を禁止することはできなかった。

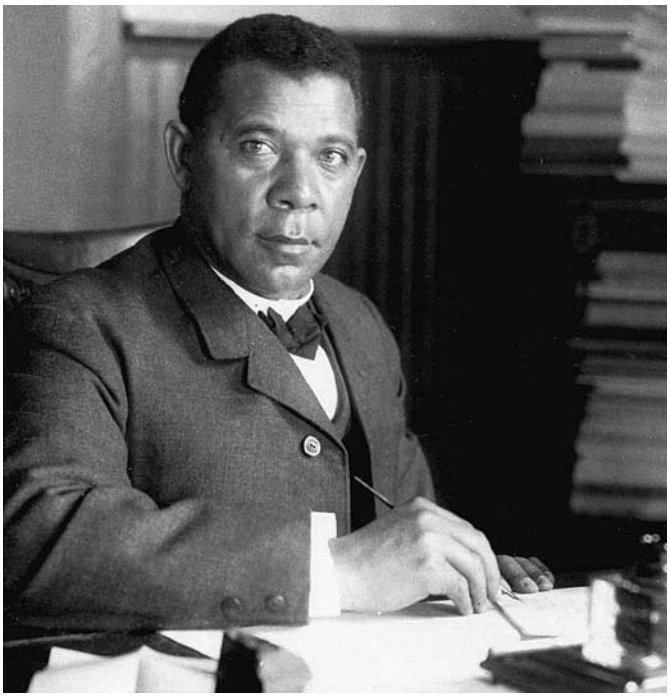
1896年に、おそらく最も重要と思われる判決が下された。その6年前にルイジアナ州が、白人、黒人、および混血の「有色人種」のために別々の鉄道車両を設けることを義務付ける法律を採用していた。この法に反対する黒人と白人の市民から成る団体が、ホーマー・プレッシーという男性を説得してこの法律を試させた。プレッシーは、公共教育の推進者で、肌は白かったが、曾祖母が黒人だった。彼は、「白人専用」の鉄道の切符を買い、座席に座ってから、車掌に自分の先祖は黒人であると告げた。プレッシーは逮捕され、訴訟が始まった。

この訴訟は1896年には最高裁で審理され、最高裁は7対1でルイジアナ州法を支持する判決を下し、多数派の見解として「この2つの人種の隔離を強制することは、有色人種に劣等の捺印を押すこと」ではない、と述べた。米国の黒人がこれに同意しない場合、それは彼ら自身の解釈であり、法律の解釈ではないとされた。こうして最高裁判所が、いわゆる「分離すれど平等」という人種隔離制度に、その権威と認可を与えたのである。

プレッシー事件（正式には「プレッシー対ファーガソン」事件）は、後に公民権運動の支持者によって頻繁に引証されることになるが、この判決の問題のひとつは、「分離」は決して「平等」ではなかったという点であった。有色人種用と指定された公立学校およびその他の施設は、ほとんど例外なく、白人用の施設に比べて劣悪であった。多くの場合、その差は極めて激しかった。しかし、さらに根本的な問題は、合衆国憲法を公正に解釈した場合、米国民を人種に基づいて分離することが正当であるかどうかということであった。プレッシー事件でただ一人判決に異議を唱えたジョン・マーシャル・ハーラン判事の次の言葉は、今日も大きな意味を持っている。

> 合衆国憲法に照らして法的見地から言えば、この国には、他の市民より優位に立つ支配階級の市民は存在しない。ここにはカースト制度はない。わが国の憲法は、人種による差別をせず、市民の間に階級を作らず、またそうした階級制度を容認しない。公民権に関して、すべての市民は法の前に平等である。

ハーラン判事の見解は、最高裁判所が、「ブラウン対教育委員会」事件でプレッシー事件の判決を全員一致で覆した1954年になって、ようやく広く認められることになる。しかしながら、アフリカ系米国人は、ジム・クロウ制度が台頭してきた当時にあっては、それに対抗する新たな手段、そして公民権を獲得するための新しい戦略を必要としていた。



ブッカー・T・ワシントンは、アフリカ系米国人が将来における政治的利益を獲得するための手段として、経済力をつけることを主張した。

ブッカー・T・ワシントン　経済的自立の追求

再建の失敗と、法的に強制された人種隔離制度の台頭により、アフリカ系米国人は難しい選択を余儀なくされた。彼らの圧倒的多数はまだ米国南部に住んでおり、人種の平等に対する激しい、時には暴力的な抵抗に直面していた。政治活動によって直接的に公民権を要求しても無駄であると考える黒人たちもいた。ブッカー・T・ワシントン（1856～1915年）の主導するそうしたグループは、黒人の経済的発展に重点を置くよう主張した。一方著名な学者で知識人のウィリアム・エドワード・バーグハート（W・E・B）・デュボイスらを中心とする人々は、合衆国憲法と、南北戦争後の憲法修正条項によって約束された投票権その他の公民権を獲得するために、妥協を排した活動を続けることを主張した。

奴隷として生まれたブッカー・T・ワシントンは、奴隷解放宣言が発表されたとき、9歳前後であった。バージニア州南東部のハンプトン師範・農業学校（現在のハンプトン大学）で優秀な成績を上げ、教師として就職。1881年には、アラバマ州メーコン郡に新設されたアフリカ系米国人の学校の校長となる機会を与えられた。

ワシントンは当時すでに、実践的な技能と経済的な自立が黒人の前進の鍵であるという結論に達していた。そしてタスキギー師範・産業学校（現在のタスキギー大学）と改名されたこの新しい学校の基盤を産業教育に置くことにした。男子学生は、大工、鍛冶などの技能を学び、女子学生は通常、看護や裁縫を学んだ。またタスキギーでは、南部各地のアフリカ系米国人の学校で教える教員たちを養成した。こうしたアプローチは、国家に対して公民権問題に正面から取り組むことを強制せずに、経済的生産力を持つ黒人市民の育成を約束するものであった。石油王ジョン・D・ロックフェラー、鉄鋼業のアンドリュー・カーネギー、そしてシアーズ・ローバック社の社長ジュリアス・ローゼンウォルドをはじめ数々の有力な慈善家が、タスキギー学校のために資金を調達し、タスキギーは規模、評判、名声共に拡大していった。

1895年9月、ワシントンは、主に白人から成る聴衆を前に、有名な「アトランタ妥協」の演説をした。彼は、アフリカ系米国人の直面する最大の危険について次のように語った。

> （その危険とは、）奴隷から自由の身へと大きく跳躍する中で、われわれの多くが自らの手で生産して暮らすべきであることを忘れ、ありふれた労働に威厳と栄誉を与え庶民の職業に知識と技能を与えれば与えるほど繁栄できることを忘れかねないということである。（中略）われわれは、人生の上層からではなく下層から始めなければならない。また、不平不満を言うことによってわれわれの出世の機会を陰らせてはならない。

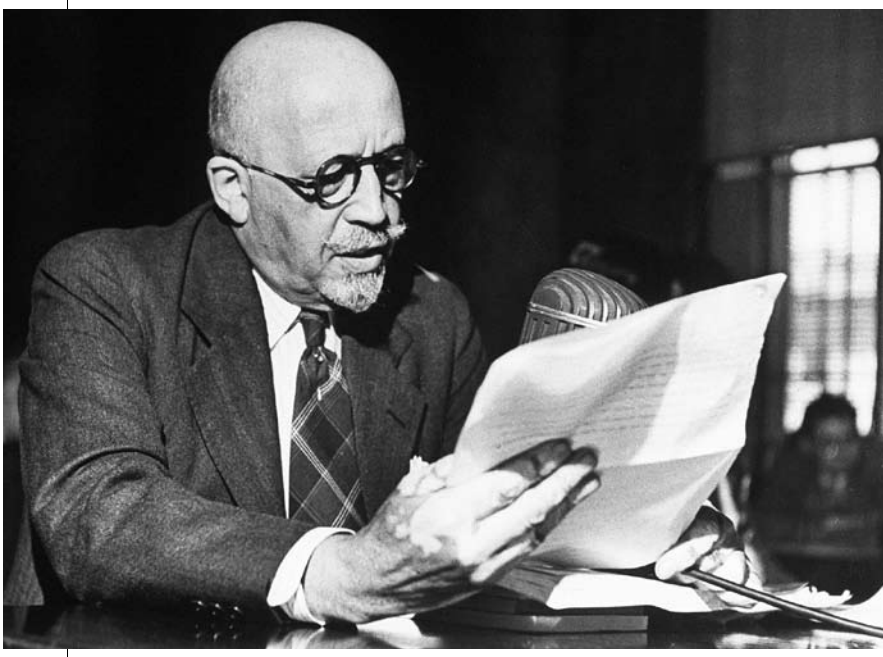
当然のことながら、多くの白人は、黒人が政治的な地位を求めるより不動産や職業的技能を求めることに集中する、という考えに安心を見出した。ジム・クロウ制度を容認する考え方であると思えたからである。ワシントンがアトランタでの演説で述べたように、「今は、工場で1ドルを稼ぐ機会の方が、1ドルを支払ってオペラ劇場へ行く機会よりも価値がある」のであった。

しかし、ワシントンの演説をよく読んでみると、彼が永久に不平等を容認するつもりはなかったことが分かる。彼は、「今は」オペラを見るより働くことの方に価値があると述べ、徐々に社会的資本を蓄積していくようアフリカ系米国人に求めたのである。また彼自身がより単刀直入に述べているように、「どの人種であれ世界の市場に何らかの形で貢献するものがあれば、なかなか排斥されることはない」のであった。

ワシントンは長年にわたりこの国のアフリカ系米国人を代表する存在だったが、彼の考え方から離れていく黒人が少しずつ増えた。ひとつの問題は、南北戦争後の南部全体が貧しく、近代化や経済開発において北部に遅れを取っていたことである。白人・黒人を問わず、南部の人々は、ワシントンが期待したほど大きな機会には恵まれなかった。またいつか分からない未来に完全かつ平等な公民権が得られるまで待つという考え方を拒否する黒人にとっては、ワシントンの漸進主義的な姿勢は受け入れ難かった。

W・E・B・デュボイス　政治運動の推進

多くの黒人は、指導者としての存在を歴史家で社会科学者のW・E・B・デュボイス（1868～1963年）に求めた。テネシー州ナッシュビルの伝統ある黒人大学フィスク大学を卒業したデュボイスは、ハーバード大学で歴史学博士号を取得し、アトランタ大学（解放黒人局の援助で創設され、黒人の



1945年、連邦議会で証言をするW・E・B・デュボイス。20世紀における米国の偉大な思想家の一人である。

教師、司書、およびその他の専門職者を養成）の教授となった。米国の黒人の生活に関する多くの学術研究書を執筆･編集。社会科学が人種関係改善の鍵を提供すると考えた。

しかし、法律によって認められた人種差別が南部全体に根を下ろすにつれて（リンチによる差別が横行し、しばしば暴徒化した人々が法の枠を越えて「犯罪容疑者」を捕獲し、ほとんど証拠もなく、また裁判もなしに殺害することもあった）、デュボイスは徐々に、アフリカ系米国人の公民権を推進する唯一の手段は直接的な政治運動と抗議である、との結論に達するようになった。当然、ブッカー・T・ワシントンと意見が対立することになる。ワシントンは、依然として米国の黒人の経済的発展を優先事項とする一方で、ある程度の政治的支援を得るためにひそかに全国の共和党員と政治的に提携していた。

1903年に、デュボイスは著書『The Souls of Black Folk』を出版した。学者のシェルビー・スティールによると、この本は「順応と謙虚という黒人種の思想形態に対する激しい反発」であり、「20世紀の問題は、人種差別の問題である」ことを正面から宣言した。デュボイスはブッカー・T・ワシントンについて次のように述べた。

> 彼の理論のせいで、北部でも南部でも白人は、黒人の問題は黒人に背負わせ、自分たちは批判的かつ悲観的な傍観者となる傾向があった。しかし実際には、そうした問題は国民全体で背負うべきものであり、われわれがこれらの大きな間違いを正すことに全力を傾けないならば、われわれすべてに罪がある。

またデュボイスは、ワシントンが職人的な技術だけを重視したことにも異議を唱え、1903年に執筆した論文で、「どの人種でも同様、黒人種もその中の極めて秀でた人々によって救われる」と主張した。そして、アフリカ系米国人の「10人に1人の才能ある人々」を「この人種の思想的指導者および文化使節」としなければならない、と述べた。デュボイスの考えでは、そのためにはブッカー・T・ワシントンがタスキギー学校で提供した実践的な訓練は不十分であった。

> 収入を稼げるようにすることを目標に人を訓練するなら、稼ぐことのできる人を養成することはできても、必ずしも人を養成することはできない。技術的な能力を教育の目標とするならば、職人を作ることはできても、人を作ることはできない。人間性を学校の目標とすることによってのみ、真の人を作ることができる。それは、知性、広い思いやりの心、過去と現在の世界や世界と人との関係に関する知識などである。（中略）こうした基盤の上にこそ、収入を得る能力、熟練した技能、鋭敏な頭脳を築くことができ、そうすれば子どもも大人も、生活の糧と人生の目的とを混同する恐れがなくなる。

その2年後、デュボイスおよび大勢の黒人知識人が、順応と漸進主義というワシントンの方針に真っ向から反対する公民権組織「ナイアガラ運動」を設立した。デュボイスは、「われわれは完全な成年男子参政権を今すぐ要求する！」と宣言した。（彼は女性の参政権についても支持した。）ナイアガラ運動は、1906年に、ジョン・ブラウンの反乱の地ウェストバージニア州ハーパーズフェリーで有名な会議を開催した。そして、ジム・クロウ法に反対するよう議員らに働きかけ、パンフレットやちらしを配布し、公民権と人種の平等に関する問題提起に努めた。しかし、この組織は、組織力・資金力共に不足しており、1910年には解散した。そのころには、新しい、より強力な組織が誕生しようとしていた。

1908年8月、イリノイ州スプリングフィールド市で、黒人男性が白人女性を強姦しようとしたという誤った容疑を掛けられた事件が発端となり、黒人を襲う暴動が発生した。この暴動で7人が死亡し、何千人ものアフリカ系米国人がスプリングフィールドの町からの逃亡を余儀なくされた。婦人参政権運動家のメアリー・ホワイト・オビントンが先頭に立って、改革主義者の組織会議が招集された。後に彼女は、「奴隷制廃止論者の精神を復活させなければならない」と書いた。間もなくオビントンの組織は拡大し、デュボイスなどのアフリカ系米国人活動家と連携した。そして1910年に、彼らは、全米有色人種地位向上協会(NAACP)を設立した。この新組織の指導層には、多くのユダヤ人を含む白人もいた。デュボイスも指導者の一人として、NAACPの有力な機関誌『ザ・クライシス』の主筆となった。

1913年に、南部生まれのウッドロー・ウィルソン大統領が連邦政府の公務員の人種隔離を認めたのに対し、NAACPは裁判によってこれに対抗するようになり、ジム・クロウ法を覆すための何十年にもわたる法的な闘いを開始した。デュボイスの指導の下で、「ザ・クライシス」誌は時事を分析し、ラングストン・ヒューズやカウンティー・カレンなど1920年代・30年代のハーレム・ルネッサンスの偉大な作家の作品を掲載した。同誌の購読者数は10万人を超えたとも言われている。

デュボイスは執筆を続け、20世紀における米国の偉大な思想家の一人としての名声を確固たるものとした。彼は、屈指の反植民地主義者、そしてアフリカ史の専門家となった。1934年、汎アフリカ民族主義を提唱してマルクス主義・社会主義的な思想を強めていったデュボイスは、人種差別撤廃を求めるNAACPと決別した。デュボイスは、90歳代まで生き、死去したときにはガーナ国民であり熱心な共産主義者となっていた。

しかし、彼が設立に貢献したNAACPは、その後、近代公民権運動の闘いを始めることになる。

マーカス・ガーベイ
もうひとつの道

20世紀初めの主な黒人民族主義者の一人であるマーカス・ガーベイ（1887～1940年）は、ジャマイカで生まれたが、最も広く活躍したのは米国においてであった。熱心な資本主義者だったガーベイは、アフリカ系米国人と世界各地の黒人たちは富と権力を自らの手に集中させるためのさまざまな組織の形成に協力すべきである、と考えた。その目的を達成するために世界黒人地位改善協会(UNIA)などを設立した。ブッカー・T・ワシントンの著書『Up From Slavery』を読んだガーベイは、こう自問した。「黒人の政府はどこに存在するのか。彼の国王と王国はどこに存在するのか。彼の大統領、国家、大使、陸軍、海軍、そして偉人たちはどこに存在するのか。わたしは見つけることができなかった。わたしは、それらを生み出すために貢献しようと決心した」

マーカス・ガーベイの黒人民族主義は、アフリカ系米国人の思想のひとつである。しかし、ほとんどの黒人は、米国の政治・経済における平等と全面的な参加を求めて闘う道を選んだ。

ガーベイは、ジャマイカのセント・アン教区で生まれ、10代初めには名付け親である印刷工アルフレッド・バローズの徒弟となった。ガーベイの父親もバローズも読書好きであり、マーカスは小さいころから文字に触れて育った。キングストンに移住したガーベイは、植字工として極めて優秀な才能を発揮するとともに、ジャーナリズムに関心を持つようになった。

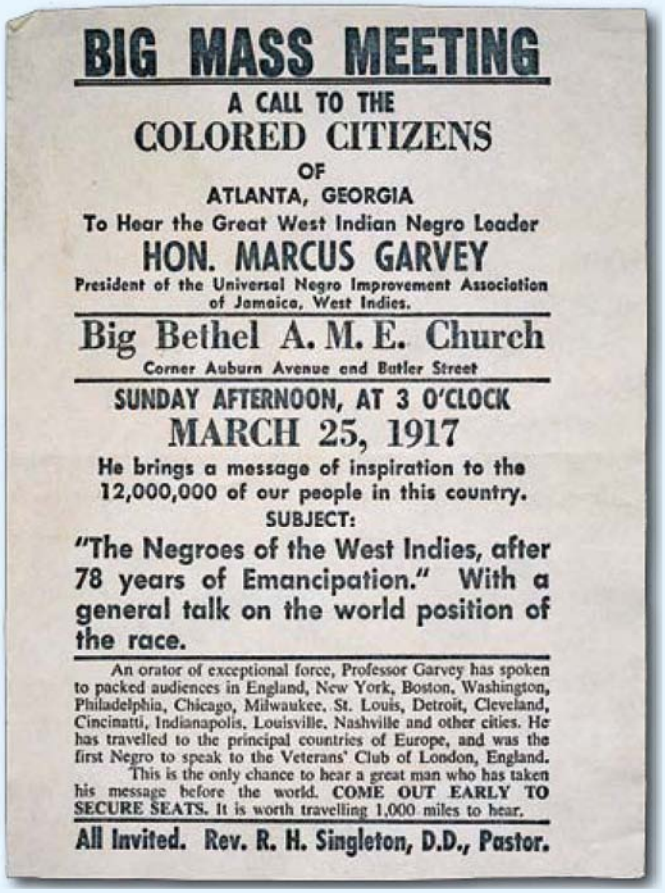
労働組合を結成しようとしてブラックリストに載せられたガーベイは、ジャマイカから中南米に移り、その後英国で2年間暮らした。英国では、ロンドン大学で非公式に学び、『アフリカン・タイムズ』と『オリエント・レビュー』を創刊したスーダン系エジプト人の黒人民族主義者ドゥーゼ・モハメッド・アリの下で働いた。

ガーベイは、黒人の権利拡大を目指す計画を米国で展開しようと決心した。1916年に米国に到着したガーベイは、アフリカ系米国人は経済力を築くことによって尊敬を勝ち取れるのだと主張した。そうした目的を実現するために、食料雑貨品店、クリーニング店など、白人の経済から独立して繁栄することのできる黒人所有の事業ネットワークを目指した。こうした活動をはじめ、大衆を組織しようとするガーベイの初期の試みはあまりうまくいかなかったが、その粘り強い努力が注目を集めるようになり、第1次世界大戦が終わるころにはガーベイの名前は米国の黒人の間で広く知られるようになっていた。

ガーベイは、マスコミの操作が非常に巧みであり、ドラマチックな公共のイベントを企画することに長けていた。彼が創設した新聞『ニグロ・ワールド』紙は、米国各地および中南米の一部の国で配布された。またガーベイの企画で毎年ニューヨーク市で開催された大会は、集まった男女が赤と黒と緑の横断幕の下を行進する華やかな催しであった。この旗をはじめとする3色のシンボルは、今日でもアフリカ系米国人の間で広く使われている。ガーベイの支持者たちは、軍服を身に着けて人目を引くことがあったが、これは彼の黒人民族主義運動が目指した軍国主義的なイメージを表したものであった。

ある時、アフリカの辺ぴな村のコンゴ人の指導者が、米国について何か知っているかと聞かれ、「マーカス・ガーベイの名前は知っています」と答えたという伝説的な話がある。

UNIAは、ブラック・スター・ラインという船舶会社を設立し、黒人所有の事業を世界に広げようとしたが、これは失敗に終わった。また、主に小



BIG MASS MEETING

A CALL TO THE

COLORED CITIZENS

OF

ATLANTA, GEORGIA

To Hear the Great West Indian Negro Leader

HON. MARCUS GARVEY

President of the Universal Negro Improvement Association of Jamaica, West Indies.

Big Bethel A. M. E. Church

Corner Auburn Avenue and Butler Street

SUNDAY AFTERNOON, AT 3 O'CLOCK

MARCH 25, 1917

He brings a message of inspiration to the 12,000,000 of our people in this country.

SUBJECT:

"The Negroes of the West Indies, after 78 years of Emancipation." With a general talk on the world position of the race.

An orator of exceptional force, Professor Garvey has spoken to packed audiences in England, New York, Boston, Washington, Philadelphia, Chicago, Milwaukee, St. Louis, Detroit, Cleveland, Cincinatti, Indianapolis, Louisville, Nashville and other cities. He has travelled to the principal countries of Europe, and was the first Negro to speak to the Veterans' Club of London, England.

This is the only chance to hear a great man who has taken his message before the world. COME OUT EARLY TO SECURE SEATS. It is worth travelling 1,000 miles to hear.

All Invited. Rev. R. H. Singleton, D.D., Pastor.

1917年のマーカス・ガーベイの演説会を宣伝するちらし

額の株式を大量に普通の労働者層に販売し、蒸気船数隻を購入したが、残念なことにこれらの船舶は老朽船であった。

ガーベイは人種は分離すべきだと考え、クー・クラックス・クランをはじめとする白人の人種差別組織の指導者たちと協力しようとした。クランの指導者と会談したガーベイは、それでなくとも彼を敵視していた黒人指導者たちから総攻撃を受けた。中でも、米国で初めて成功した黒人主体の労働組合「寝台車ポーター組合」の指導者A・フィリップ・ランドルフは、ガーベイに激しく反発した。

ランドルフは、ガーベイが白人の人種差別主義者らと協力して、米国の黒人をアフリカに帰らせようとしている、と非難した。ガーベイは、そのような意志はないと否定したが、リベリア共和国に使節を派遣して新たな事業の可能性を調査させたことは事実であり、またガーベイの思想はアフリカの若い知識人の間でかなりの支持を得ていた。

1925年に、ガーベイは、連邦政府により郵便詐欺の罪で収監された。ガーベイはこの罪を否認し、彼を批判する人々の中にもこれは不公正であるという意見があった。1927年にカルビン・クーリッジ大統領がガーベイに恩赦を与えたが、米国市民ではない既決重罪犯としてガーベイは直ちに母国ジャマイカへ強制送還された。ガーベイの最も厳しい批判者の一人だったW・E・B・デュボイスは、彼の幸運を祈り、母国で活動を続けるよう励ました。

ガーベイは、英国ロンドンに落ち着き、新しい雑誌『ザ・ブラック・マン』を創刊した。同誌は、ヘビー級ボクシング・チャンピオンのジョー・ルイス、芸能人で政治活動家のポール・ロブソン、また物議をかもした宗教指導者のディバイン神父など米国の著名な黒人を、人種的リーダーシップを十分に発揮していないとして非難した。しかしガーベイは、そこでもやはり以前のように多くの人々を組織に引きつけることはできなかった。米国ではある程度の人気を維持し、初期の活動の本拠地であったミシガン州デトロイトから川を隔てたカナダのオンタリオ州ウィンザーで集会を開いたときには、熱心な聴衆が集まった。晩年のガーベイは、ロンドンを拠点として活動し、1940年、同地で死去した。

ウィルソン・ジェレマイア・モーゼズ

モーゼズは、ペンシルベニア州立大学歴史学フェリー教授。学術論文に『Marcus Garvey - A Reappraisal』、著書に『The Golden Age of Black Nationalism, 1850-1925』などがある。

— 4 —

チャールズ・ハミルトン・ヒューストンとサーグッド・マーシャル

人種隔離制度に対する法的な挑戦の開始

1956年11月、アラバマ州モントゴメリーでは、バスの人種隔離制に抗議する黒人たちのバス・ボイコットが12カ月目に入っていた。その1年前、ローザ・パークスという黒人女性が市バスで白人優先の前部座席を白人男性に譲ることを拒否し、この勇気ある行動が政治運動に発展して、勇敢かつダイナミックな指導者マーティン・ルーサー・キング・ジュニア師の存在が米国民に知られるようになっていた。しかし、モントゴメリーの市当局がようやく譲歩してボイコットが成功したのは、裁判でアフリカ系米国人を強制的にバスの後部座席に座らせるのは違法であるとの判決が下されたためであった。歴史家のケビン・マムフォードは、「憲法に基づく正当性と法廷による保護がなければ、各地で抗議をする黒人たちは州および地方政府によって鎮圧され、人種差別主義者が容易に勝利を収めることができただろう」と書いている。

米国では、20世紀半ばにキングらの主導で社会正義を求めた活動を公民権運動と呼ぶことが多い。しかし、これまで述べてきたように、アフリカ系米国人とその支持者たちは、合衆国憲法および南北戦争後の憲法修正条項によって約束された権利を獲得するため、すでに長年にわたる闘いを続けていた。また近代公民権運動には2本の柱があったことを理解することも重要である。そのひとつは、非暴力による勇気ある抵抗運動であり、そうした活動が米国民に、同胞である黒人に対して恥ずべき扱いをしていることをようやく直視させたのである。そして、もう1本の柱は、チャールズ・ハミルトン・ヒューストンとその最も偉大な弟子サーグッド・マーシャルをはじめとする弁護士たちであり、彼らの尽力により、抵抗運動は最も強い力、すなわち国家の法律を味方に付けることができた。

チャールズ・ハミルトン・ヒューストンは、優れた訴訟者、法学教育者として、「ジム・クロウ」法に対する法的な攻撃を始めた。

1956年にマーシャルは、彼が過去に勝利を収めた判例を使ってモントゴメリーの黒人たちを弁護した。最も有名な判例は「ブラウン対教育委員会」であったが、それ以前にもヒューストンとマーシャルがパートナーとなって、米国南部におけるジム・クロウ人種隔離制度の法的枠組みの多くを解体していたのである。

チャールズ・ハミルトン・ヒューストン ジム・クロウを抹殺した男

チャールズ・ハミルトン・ヒューストンは、1895年にワシントンＤＣで生まれた。成績優秀な彼は19歳のときアマースト大学を総代で卒業し、すぐに人種隔離されていた米軍の黒人部隊に入隊して第1次世界大戦を戦った。軍隊で人種差別を体験したヒューストンは、公民権を求める闘いを生涯の仕事とすることを決意した。帰還後、ハーバード大学で法律を学び、アフリカ系米国人として初めて同大学の権威ある法律誌の編集者を務めた。そして、ハーバードで法律博士号、スペインのマドリード大学で民法学博士号を取得した。

ヒューストンは、弁護士の正しい使命は正義を確実に実現する手段として法律を使いこなすことであると考えており、「弁護士は、社会工学者であるか、または社会の寄生虫であるかのどちらかである」と述べている。1924年にはワシントンＤＣにあるハワード大学法律大学院の非常勤講師となった。当時のアフリカ系米国人現役弁護士の4分の3が同大学院の卒業生だったとも言われている。そして1929年までには同大学院の学長になっていた。

ヒューストンはわずか6年の間にアフリカ系米国人法学生の教育を根本的に改善し、ハワード大学法律大学院を完全認定校とし、公民権法を専門とする大勢の弁護士を育成した。ジョージ・R・メトカーフは、著書『Black Profiles』で、

ヒューストンがハワード大学の仕事を引き受けたのは、ハワードを「ニグロ指導層のウエストポイント（米陸軍士官学校）」のような存在とし、「それによってニグロたちが法廷で人種差別と闘い、平等を獲得できるようにする」ためであった、と書いている。

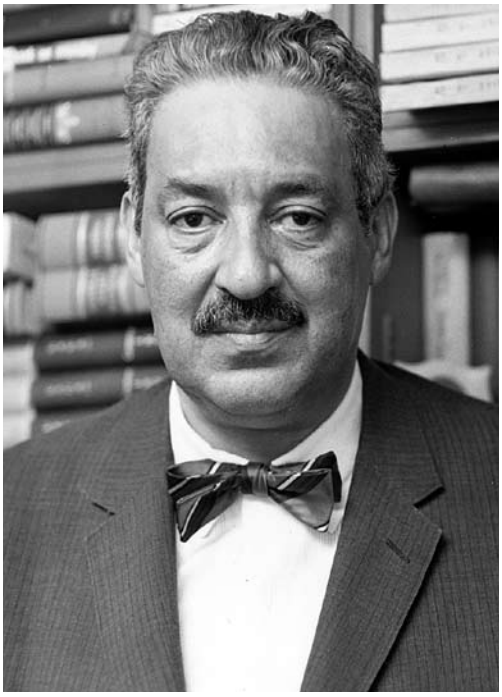
一方で、全米有色人種地位向上協会(NAACP)は、1896年の最高裁によるプレッシー判決で認められた「分離すれど平等」の原則に法的に挑戦するための基礎作りをしていた。ヒューストンの推薦に従って、元連邦検事のネーサン・ロス・マーゴルドに、南部における「分離すれど平等」の原則の実態調査を依頼した。マーゴルドは1931年に、リーガルサイズ218ページに及ぶレポートを完成させた。そのレポートは、白人用と黒人用に分かれた学校の間には州からの資金に極めて大きな差のある悲惨な状況を実証していた。

1934年に、ヒューストンはNAACPの特別弁護人となった。そして、ジェームズ・ネブリット、スポッツウッド・ロビンソン3世、A・リオン・ヒギンボサム、ロバート・カーター、ウィリアム・ヘイスティー、ジョージ・E・C・ヘイズ、ジャック・グリーンバーグ、オリバー・ヒルなど、主にハワード大学で学んだ若い優秀な弁護士たちを集めた。ヒューストンは、若い弟子サーグッド・マーシャルと共に、カメラとポータブル・タイプライターを携えて南部各地を訪問し始めた。後にマーシャルは、ヒューストンの車で共に旅をしたときのことを回顧している。「食べる場所も寝る場所もなかった。わたしたちは車の中で寝て、果物を食べた」 これは危険の伴う活動でもあったが、ヒューストンが集めた視覚的な記録と、マーゴルドが収集したデータは、新たな法的戦略の基礎となった。すなわち、黒人に与えられる施設が白人に与えられる施設と平等でなければ、これらの人種差別州はプレッシー判決の基準すら満たしていない、とヒューストンは論じた。「分離すれど平等」ならば、必然的に、これらの州は、膨大な予算を投じて黒人用の施設を大幅に改善するか、または人種差別を廃止するしかなかった。

平等を目指すこの戦略は、1935年にメリーランド州で「マレー対ピアソン」事件におけるヒューストンとマーシャルの勝利という形で実を結んだ。この訴訟では、アフリカ系米国人の原告が、人種差別によりメリーランド大学法律大学院の入学を拒否されたとして訴えていた。大学側の弁護団は、黒人の入学志願者で有資格の者には州外の法律大学院に入るための奨学金を提供することによって、「分離すれど平等」の基準を満たしている、と主張した。州の裁判所はこの主張を退けた。法廷は、公立学校の人種隔離を違法とするには至らなかったが、メリーランド大学の提供する州外の大学への奨学金という選択肢は機会の均等ではない、と判断した。メリーランド大学法律大学院は、有資格のアフリカ系米国人学生の入学を認めるよう命じられた。同大学院に入学を拒否された有資格の黒人の一人と自認していたマーシャルにとって、この勝利はことさらに喜ばしいものであった。

ヒューストンは健康を損ねて1940年にNAACPの職を引退し、1950年に死去した。後にマーシャルは、「われわれが今日あるのはすべてチャーリーのおかげである」と述べた。ヒューストンの愛弟子だったマーシャルが人種差別制度に対

有資格の黒人学生の入学を拒否したメリーランド大学法律大学院の方針を違法とする訴訟で、原告ドナルド・ゲインズ・マレー（中）の弁護士を務めたサーグッド・マーシャル（左）とチャールズ・ハミルトン・ヒューストン



1962年、連邦控訴裁判所判事に指名され、上院の承認を得た後のサーグッド・マーシャル。1967年には、リンドン・B・ジョンソン大統領が、マーシャルを初のアフリカ系米国人最高裁判所判事に指名した。

する最後の法的な闘いを主導することになるが、その戦略を生み出し、道を切り開いたのは、マーシャルの師ヒューストンであった。

サーグッド・マーシャル―「ミスター公民権」

「わが国を人種差別の荒野から脱出させる上で、サーグッド・マーシャルほど大きく貢献した人物はいない」と述べたのは、マーシャルの同僚だったルイス・パウエル最高裁判事である。マーシャルは、1908年に生まれ、メリーランド州ボルティモア市の人種隔離された中等学校で教育を受けた後、リンカーン大学に入学した。同大学は、「アフリカ系の若者に人文科学の高等教育を授けるために設立された世界初の教育機関」であった。白人専用のメリーランド大学法律大学院からは入学を拒否されることが分かっていたため、マーシャルはハワード大学法律大学院に入学し、ボルティモアからワシントンＤＣまで長い時間をかけて通学した。マーシャルの母親は、結婚指輪と婚約指輪を売って息子の学費を捻出（ねんしゅつ）した。学業に秀でていたマーシャルは、1933年に首席で卒業し、チャールズ・ハミルトン・ヒューストンに高く評価された。

マーシャルは弁護士としてヒューストンと緊密に協力し、前出の「マレー対ピアソン」事件で勝利を収めた後に、NAACPの専属弁護士となった。1938年には、ヒューストンの後任としてNAACP法務委員会の委員長となり、さらに1940年にはNAACPの「法廷弁護基金」の初代理事長となった。

これは的確な人選であった。マーシャルは比類のない多くの才能を兼ね備えていたからである。後にユナイテッド・プレス・インターナショナル（ＵＰＩ）通信社は、マーシャルについて次のように述べている。

> （前略）並み外れた細部への注意力と目標への粘り強い集中心を持つ極めて優秀な戦術家であり、しばしば、部屋の中で一番よく響くと言われた太い声の持ち主でもあった。それと同時に、その人柄は極めて魅力的であり、どんなに頑固な人種差別主義者の南部の保安官でさえも、彼の話や冗談に引き込まれずにはいられなかった。

好感を持たれる人柄と優秀な技能という強力な武器を兼ね備えたサーグッド・マーシャルは、1946年には、暴動の罪で告訴された黒人25人を弁護し、白人だけの南部の陪審団を説得して無罪判決を勝ち取った。しかし、ジム・クロウ下の南部で自分の意見をはっきりと主張する黒人が皆そうであったように、マーシャルも何度かかろうじて暴力から逃れるという体験をした。

ヒューストンの始めた漸進主義の法的な戦略が、マーシャルの下でようやく成功を収めるようになった。訴訟１件ごとに、マーシャルとNAACPの弁護士たちは、人種差別制度を支える法的な柱を少しずつ崩していった。マーシャルは、最高裁で弁護をした訴訟32件中29件で勝利を収めるという驚異的な実績を上げた。彼の弁護で勝訴した事件には次のようなものがある。

● スミス対オールライト（1944年）。政党が本選挙の候補者を選ぶ予備選挙を、白人のみによるものとすることを、最高裁が禁止。マーシャルの伝記の著者フアン・ウィリアムズによると、マーシャルはこの勝訴を最も重要な勝利と考えた。「人種差別主義者は（候補者に党の指名を得るために人種差別を支持することを要求し）、黒人やヒスパニック、そして（中略）時には女性ですら、本選挙で投票する段階では、人種差別主義者の候補者ばかりで、選択の余地がなかった」

● モーガン対バージニア州（1946年）。マーシャルはこの裁判で、州間バス路線における人種隔離を禁止する最高裁の判決を勝ち取った。後に「ボイントン対バージニア州」事件（1960年）では、州間を移動する乗客のためのバス・ターミナルなどの施設の人種隔離を廃止する判決を勝ち取った。これらの訴訟が、1960年代のフリーダム・ライド運動につながった。

● パットン対ミシシッピ州（1947年）。アフリカ系米国人を組織的に排除した陪審団はアフリカ系米国人の被告を有罪とすることはできない、というマーシャルの主張を最高裁が認めた。

● シェリー対クレーマー（1948年）。マーシャルは、人種制限特約のある不動産でも、州裁判所がその不動産の黒人への売却を差し止めることは違憲である、との最高裁判決を勝ち取った。こうした特約は、住宅所有者が不動産を黒人、ユダヤ人、およびその他の少数民族に売ることを防ぐための法的戦術として広く使われていた。

施設が不平等であれば裁判所は「分離すれど平等」の制度を覆すということが、こうしたNAACPチームの勝利によっ

The Price of the AFRO Is 7 Cents In D.C.—Pay No More

WASHINGTON AFRO AMERICAN

JC Bus Travel Outlawed

Supreme Court Votes 6-1 in Morgan Case

Jurists Rule State Laws Place Undue Burden on Interstate Travel

Her Fight Ends Bus Jim Crow

Pickets March in Protest; Choir Sings

U. S. Sues Klan for Unpaid Taxes

the week

Hundreds Ignore Line to Hear Tuskegee Concert

Cases of Bus Jim Crow Show Barbarity of Policy

連邦法は州法に比べ、アフリカ系米国人に対してより大きな保護を与えることが多かったが、主として「州際」的な状況でしか適用されなかった。ローザ・パークスより何年も前に、アイリーン・モーガンが、州の境界を越える路線のバスで、座席を譲ることを拒否した。サーグッド・マーシャルの弁護でモーガンは勝訴し、これによって州間バス路線では人種隔離が法的に禁止された。

上　人種隔離されていたアーカンソー州リトルロックのセントラル高校で初めての黒人生徒5人が無事入学できるように、ドワイト・D・アイゼンハワー大統領は連邦軍を派遣した。

右下　話し合いをするマーティン・ルーサー・キング・ジュニア師、フレッド・シャトルスワース師、およびラルフ・アバナシー師

左下　前進のしるし。1956年、ノースカロライナ州グリーンズボロのバスから、ジム・クロウ制度の規則の表示が除去された。

て立証された。これは大きな業績ではあったが、特に教育に関しては、幅広い改革をもたらすための最良の手段ではなかった。南部の何百もの学校区のすべてで、貧しいアフリカ系米国人が黒人の学校と白人の学校を比較して訴訟を起こすことは期待できなかった。サウスカロライナ州クラレンドン郡では、1949～1950年の学年度の教育支出が白人の生徒一人当たり平均179ドルであったのに対し、黒人の生徒は一人当たりわずか43ドルであった。このような格差を一挙になくすには、人種隔離制度そのものを直接廃止する判決を勝ち取るしかなかった。マーシャルは、「世紀の判決」と言われる「ブラウン対教育委員会」事件で、その直接的判決を勝ち取ることに成功した。

ブラウン判決

カンザス州トピカの小学生リンダ・ブラウンの父親オリバー・ブラウン牧師が原告として適切な素質を備えている、とマーシャルが判断したことから、ブラウン事件が形を取り始めた。ブラウン家からわずか7ブロックのところに白人の学校があるにもかかわらず、リンダは21ブロック離れた黒人の学校に通わなければならなかった。ブラウンは裁判で訴えたが、カンザス州の裁判所は、人種によって分離された黒人学校と白人学校は質において同等であるとしてブラウンの訴えを退けていた。これによって、最高裁は最終的に、人種によって分離された施設は本質的にも法的にも不平等であり、従って違憲であるという判決を下さなければならない、と主張する機会がマーシャルに与えられた。

マーシャルの法的な戦略は、社会科学的な証拠をよりどころとしていた。NAACP法廷弁護基金は、歴史学、経済学、政治学、および心理学の各分野の専門家から成るチームを結成。中でも特に重要な研究は、心理学者のケネス・クラークとメイミー・クラークによる、人種隔離制度がアフリカ系米国人の自尊心と精神衛生に及ぼす影響に関するものであった。その研究結果は痛ましいものであり、例えば3歳から7歳までの黒人の子どもたちは、肌の色が違うだけでその他の点ではまったく同じ白人と黒人の人形を見せられると、白人の人形の方を好んだ。

1954年5月17日、最高裁は全員一致で、マーシャルの戦略が正しかったことを証明した。すなわち、原告が提出したクラークらの研究論文に基づき、次のように決定的な判定を下したのである。

> （前略）公共教育の分野において「分離すれど平等」の原則が存在する余地はない。教育施設の分離は、それ自体が不平等である。従って、われわれは、原告らおよびその他同様の状況にある者は、（中略）告訴の対象となっている人種隔離が原因で、修正第14条によって保証された法による平等な保護を奪われたものと考える。

オックスフォード大学教育政策円卓会議の一人で教育専門の弁護士であるデリル・W・ウィンは、ブラウン判決の意義について次のように述べている。

> この判決では、国家の最高裁判所が、それまでの米国の黒人に対する扱いが間違っていた、と述べたのであった。（中略）わたしの父は判決当時10代の少年だったが、その父が、この判決によって自分も重要な人間なのだと思うことができた、と後に語っていたのをわたしは覚えている。（中略）個人的なレベルでは、ブラウン判決の真の遺産は、子どもたちすべてが、わたしたちすべてが重要な人間なのだということを常に思い出させてくれる、という事実である。

最高裁は学校の人種隔離を廃止する期限を具体的には指定しなかったが、翌年、総合して「ブラウンⅡ」事件と呼ばれているいくつかの訴訟によって、マーシャルと同僚の弁護士たちは、人種隔離の廃止を「時間をかけて慎重に」進めるとする、という最高裁の裁定を引き出した。

それでもなお、南部の各地で抵抗が続いた。1957年9月、アーカンソー州リトルロックのセントラル高校で、黒人の生徒たちが力ずくで登校を阻止され、マーシャルは同市へ飛んで連邦裁判所に提訴した。この訴訟でマーシャルが勝利を収めたことが発端となり、9月24日にドワイト・アイゼンハワー大統領は、次のように宣言した。「本日わたしは、アーカンソー州リトルロックで連邦法の執行を支援するために連邦政府の権限で軍隊を出動させる大統領令を発行した。（中略）わが国の裁判所の判決より暴徒の支配が優先されることを許してはならない」

ブラウン事件、リトルロック事件、その他のNAACPチームの法的な勝利は、「法律面からの」公民権運動の威力と限界の両方を表すものであった。何十年もの間、人種隔離された劣等な学校に追いやられていた米国の黒人たちにとっては、リトルロックで、また1962年のミシシッピ大学で、そして1963年のアラバマ大学で、黒人の学生たちが連邦軍兵士に護衛されて白人専用だった学校の教室に入る光景は、ほとんど想像もできないものだったかもしれない。しかし、訴訟戦略は、徐々に、訴訟1件ごとに効果を上げていった。

一方で、南部のほとんどの地域では、多くの学校だけでなく、プールからバス、映画館、軽食堂に至るまで、ほぼあらゆる種類の公共施設で、法的な人種隔離が依然として幅を利かせていた。そして、人種差別主義者が、憲法で定められたアフリカ系米国人の最も基本的な権利を奪うという例が頻繁に起こっていた。不公正な細則や、あからさまな不正や詐欺、そして最終的には暴力の威嚇などの組み合わせによって、修正第15条の明白な規定が覆され、南部の黒人は投票をすることができなかった。

新しい公民権法が必要とされていることは明らかであった。そうした法律を可決させるには、連邦議会の南部出身議員による強硬な反対を押し切るだけの強力な政治的コンセンサスが必要であった。サーグッド・マーシャルは、1961年から1965年までは連邦控訴裁判所（全米で2番目に権威のある連邦裁判所）の判事として、そして1967年から1991年までの四半世紀は米国初のアフリカ系米国人最高裁判事として、引き続きこうした法的な闘いの先頭に立った。

同時に、新たな政治的な公民権運動が形成されつつあった。勇敢なアフリカ系米国人たちが、あらゆる人種や信条の人たちと提携して、米国人として与えられている公民権の全面的な獲得を、断固として、しかし平和的に要求し始めた。彼らは同胞である米国民に、人種隔離と人種的抑圧の許し難い現実と正面から向き合うことを余儀なくした。その結果として、国民の感情が変化し、政治的な力の均衡も変わっていった。そして、1955年12月のある日の夕方、アラバマ州モントゴメリーで、長い1日の仕事に疲れた42歳の裁縫師ローザ・パークスが、人種によって分離されたバスの座席を譲ることを拒否したことから、大きな変化の動きが始まったのである。

ラルフ・ジョンソン・バンチ
学者として、政治家として

アフリカ系米国人が公民権を求めて闘っている最中にも、個々のアフリカ系米国人の業績がこの闘争の正当性を実証していた。ノーベル賞を受賞した学者で外交官でもあったラルフ・バンチは、偏見を抱かない人々に対して、黒人が米国社会に全面的に貢献できるということを証明した。

ラルフ・バンチは、1903年8月7日にミシガン州デトロイトで生まれた。父親は巡回理容師、母親は主婦でアマチュア・ピアニストでもあった。父親は家庭を捨て、母親はバンチが14歳のときに亡くなった。その後バンチは、カリフォルニア州ロサンゼルスで母方の祖母と暮らした。この祖母の英知と気骨がバンチに大きな影響を与えた。彼はカリフォルニア大学ロサンゼルス校を首席で卒業し、奨学金を得てハーバード大学大学院に進んだ。

1950年ノーベル平和賞を受賞する米国の調停者で外交官のラルフ・J・バンチ博士

バンチは子どものころから人種差別を強く意識しており、差別と闘う決意を固めていた。植民地時代のアフリカを研究した彼は、植民地主義と米国の人種差別には多くの共通点があると考えるようになり、その両方をなくすことに尽力しようと決心した。

バンチはワシントンDCの伝統ある黒人大学ハワード大学に政治学部を設立した。執筆した人種差別に関する多くの論文は、後に米国の公民権運動の基礎的な文献となった。またバンチは、米国における植民地主義研究の草分けでもあった。そして、米国の人種間問題に関する1944年の画期的な研究書『An American Dilemma』を著したスウェーデンの社会経済学者グンナー・ミュルダールの主な共同研究者であり共著者であった。「ブラウン対教育委員会」事件で、最高裁は『An American Dilemma』を肯定的に引用した。

第2次世界大戦の開戦が迫る中で、バンチは米国政府のアフリカ担当顧問に選ばれ、続いて国務省に異動して、後の国際連合憲章に関する作業に従事した。国務省初の黒人幹部であった。1945年のサンフランシスコ会議では国連憲章のうち非自治地域（植民地）および信託統治に関する2つの章を起草した。これらの章は、戦後の非植民地化を加速する根拠となった。バンチは、植民地の独立を現実化することに最も貢献した一人であった。

新たに結成された国際連合で、バンチは信託統治制度を設立。国連事務局の一員としても並はずれた実績を上げた。1947年には国連パレスチナ特別委員会の書記として、多数派意見の分割案だけでなく、少数派意見の連邦国家案も執筆した。分割案は国連総会で採択され、今日に至るまで中東における調停担当者の基本目標となっている。

1948年5月に英国がパレスチナから撤退し、委任統治領パレスチナの国連総会で指定された場所でユダヤ人がイスラエル建国を宣言し、アラブ5カ国がこの新しい国家に侵攻した。国連安全保障理事会は、フォルケ・ベルナドッテ伯爵を調停委員に任命し、バンチは彼の主任顧問となった。調停により、パレスチナで停戦が実現し、バンチは国連軍事監視団を組織して停戦を監督させた。これが国連による平和維持活動の萌芽となった。1948年9月に、エルサレムでベルナドッテがスターン・ギャング（シオニストの武装地下組織。バンチおよびシオニスト主流派はこの組織を糾弾していた）に暗殺され、バンチが調停委員となった。1949年1月、バンチは、エジプトとイスラエルを皮切りに休戦交渉を開始した。イスラエルと、その近隣のアラブ4カ国との間で休戦協定が結ばれ、戦争停止のための正式な基盤が作られた。1950年にバンチは、これらの功績に対してノーベル平和賞を授けられた。

1953年、スウェーデンのダグ・ハマーショルドが国連事務総長に就任した。事務次長だったバンチは、ハマーショルドに最も近い政策顧問となった。1956年に、エジプトがスエズ運河を国営化すると、英国、フランス、およびイスラエルがエジプトに侵攻した。この無分別な行動は世界に衝撃を与えた。カナダのレスター・ピアソンは、侵略軍をエジプトから撤退させるには全く新しい手段、すなわち国連の「平和・警察部隊」が必要であると主張して、こうした部隊の設置を提案した。ハマーショルドは、できる限り早急にこの部隊を結成し配備することをバンチに依頼した。ソビエト連邦による介入の脅威があったことも緊急性を高めていた。米国をはじめ多くの諸国の熱心な支持を得て、バンチは昼夜を分かたず作業に取り組み、国連総会の要請を受けてからわずか8日後に国連緊急軍を結成し、エジプトに配備した。

国際平和維持活動の草分けとなったことは、バンチ自身が最も誇りとした業績であった。1960年にも、2万人以上から成る国連平和維持部隊をコンゴに派遣し、また1964年には、キプロスで同様の部隊を結成するに当たり主導的役割を果した。ハマーショルドがアフリカでの飛行機事故で死去した後、バンチは、後任のウ・タント事務総長（ビルマ）にとっても顧問として不可欠な存在となった。バンチが公民権運動に全力を注ぐために国連を引退しようとしたときには、ウ・タントが懇願して引き留めたほどである。バンチは、1971年12月9日、仕事による過労と糖尿病で死去した。

ラルフ・バンチは、物事を成し遂げることには非常に熱心だったが、個人的な名声にはほとんど関心がなかった。（ノーベル平和賞を辞退しようとさえした。）バンチの数々の偉大な業績の成果は人々の記憶に留められているが、その際に彼自身が果たした役割はほとんど知られていない。旧植民地世界から解放された何百万ものアフリカ系米国人、そして国際連合自体がバンチに負うところは特に大きい。彼は、公務に生涯を捧げた20世紀有数の偉人であった。

ブライアン・アークハート
アークハートは元国連事務次長。著書に『Hammarskjold』『A Life in Peace and War』『Ralph Bunche-An American Odyssey』などの歴史研究書がある。

ジャッキー・ロビンソン
人種の壁を破る

ブルックリン・ドジャースが、ペンシルベニア州フィラデルフィアのシャイブ球場に乗り込んだとき、チームには、新たな論争の的となる存在が加わっていた。ジャッキー・ロビンソンという黒人選手である。観衆は敵意を象徴する物をグラウンドに投げ入れ、ホームチームのベンチからは差別に満ちた言葉が投げ付けられた。ドジャースの投手としてその場にいたラルフ・ブランカは「フィラデルフィアは最悪でした」と語っている。「観衆は黒猫やスイカをグラウンドに投げ込み、フィラデルフィアの監督ベン・チャップマンはジャッキーに激しいヤジを浴びせました」

それは1947年の米国であり、当時の国民の多くにとって、米国はまだ黒と白の2つに分離されていた。南部の人々をはじめ米国民の中には、肌の色が違うというだけで憎悪を募らせる人たちがいた。彼らから見ると、黒人には白人と平等の公民権を与えられる資格がなかった。そしてそれは野球の世界にも及び、20世紀に入る前から、球界の幹部やチームのオーナーの間では、大リーグ選手は白人に限るという非公式かつ暗黙のルールができ上がっていた。黒人選手は、黒人だけのニグロ・リーグに入るしかなかった。

しかし、1947年4月15日、多様な人種から成るニューヨーク市ブルックリン区を本拠地とするチームの内野手として、ロビンソンが人種の壁を破って大リーグに登場。平等の概念を浸透させる長い道のりの大きな第一歩として、スポーツの世界を超えた先駆的シンボルとなった。チームメートのブランカは、ロビンソンの業績が野球のダイヤモンドを超えたものであったことについて、次のように述べている。

> わたしは、これが野球を変えたと何度も言っていますが、それだけではなく、これはこの国をも変え、最終的には世界をも変えました。（中略）ジャッキーは、ローザ・パークスのために道を切り開き、マーティン・ルーサー・キング・ジュニ

上　1952年ワールドシリーズ第1試合でニューヨーク・ヤンキースを破り、勝利を祝うブルックリン・ドジャースのジャッキー・ロビンソン（前列右）、ジョー・ブラック（後列左）、デューク・スナイダー（前列左）、ピーウィー・リース（後列右）、およびチャック・ドレッセン監督（中央）

下　1963年、アラバマ州バーミングハムで、公民権運動の指導者ラルフ・D・アバナシーおよびマーティン・ルーサー・キング・ジュニアと会見するジャッキー・ロビンソン（右）とボクシングの元ヘビー級チャンピオン、フロイド・パターソン（左）

アのために道を切り開き、そして、人種の平等を求めるすべての黒人指導者のために道を切り開きました。それは、黒人に対する米国全体の見方を変えた出来事でした。

それはチーム内でも同じでした。チームには、黒人を見下す習慣の中で育った南部出身の選手たちもいました。彼ら（アフリカ系米国人）は、バスの後部座席に座らなければならず、白人と同じ水飲み場で水を飲むことができず、同じトイレを使うことができませんでした。しかし彼ら（白人選手たち）は徐々に考え方を変えていきました。

ロビンソンは、1919年1月31日、ジョージア州カイロで生まれ、カリフォルニア州パサデナで育った。近くのカリフォルニア大学ロサンゼルス校に進み、在学中は、野球、フットボール、バスケットボール、陸上の4つのスポーツで優れた才能を発揮した。1942年に徴兵されて軍隊に入ったが、当時米国の軍隊ではまだ人種隔離が行われていた。（ハリー・S・トルーマン大統領が1948年に軍隊の人種隔離廃止を命じた。）誇り高いロビンソンは、バスの後部に座ることを拒否し、不服従の罪で軍事裁判にかけられたが、無罪判決を受け、名誉除隊となった。「夫は行動の人でした。わたしたちの置かれた状況に甘んじようとはしませんでした」と未亡人のレイチェル・ロビンソンは語っている。

そのころ、ブルックリン・ドジャースのゼネラルマネージャー、ブランチ・リッキーは、国民的スポーツの野球において人種差別を廃止する時期が来たと考えていた。その大きな理由のひとつは、アフリカ系米国人選手を採用することによってチームの競争力を強化できることであった。黒人選手が他の選手やファンから人種差別的なヤジを浴び、時にはそれ以上のひどい扱いを受けることは避けられず、それに耐えられる強い精神力と勇気を備えた人物が必要であることをリッキーは理解していた。そして1945年に、ニグロ・リーグのカンザスシティーのチームにいたロビンソンをスカウトし、彼こそが求めていた選手であり人物である、と判断した。

ロビンソンは、次のシーズンをモントリオールのドジャースのマイナーリーグ・チームで過ごし、1947年のシーズンには大リーグに昇格した。黒人選手第1号としての立場は容易なものではなかった。リッキーはロビンソンに、向こう3年間は各地のファンや相手チームから浴びせられる侮辱的な言葉に反応しないことを約束させた。後にも先にも、他のいかなる選手も経験したことのない重圧の下で、ロビンソンは試合で大活躍をした。

大リーガーとしての初シーズン、28歳のロビンソンは1塁を守り、打率2割9分7厘を上げた。ダイナミックなプレーでも知られ、29盗塁でナショナル・リーグの盗塁王となるとともに、同リーグの最優秀新人賞を受賞し、チームのワールドシリーズ進出に貢献した。他のチームも、ドジャースがロビンソンの存在によって優位に立ったことを認め、自分たちも黒人選手を入団させるようになった。ロビンソンは、最も優れた成績を上げた1949年のシーズンには、2塁手として、打率3割4分2厘、16本塁打、124打点、37盗塁で、ナショナル・リーグの最優秀選手となった。

ロビンソンは、ドジャースで10シーズンを過ごし、ワールドシリーズに6回出場し、1955年にはブルックリン・ドジャースの最初で最後のワールドシリーズ優勝を体験した。その次のシーズン終了後、オールスター戦出場6回を誇るロビンソンは、ライバルのニューヨーク・ジャイアンツへのトレードを拒否して引退した。1962年、ロビンソンは黒人選手として初めて野球殿堂入りを果たした。

選手生活を終えた後も、ロビンソンは人種の平等を求める闘いを続け、公民権を主張し、公民権運動の指導者たちや団体を支援した。その一環として、彼は全米有色人種地位向上協会(NAACP)の理事も務めた。

ジャッキー・ロビンソンは、1972年に心臓マヒで死去した。53歳であった。その53年間に、ロビンソンは何百万もの人々に影響を与えた。偏見を持つ者を恥入らせ、アフリカ系米国人を鼓舞し、衰えを知らぬ回復力と尊厳の模範を示すことによって、米国のあらゆる国民の心を動かし、アフリカ系米国人の公民権を認めさせた。

ロビンソン自身、「人生は、他人の人生に影響を与えることができなければ意味がない」と述べている。

ブライアン・ヘイマント
ニューヨーク州ホワイトプレーンズのザ・ジャーナル・ニュース紙のスポーツ記者ブライアン・ヘイマンは、30を超えるジャーナリズム賞を受賞している。

— 5 —

「運動が始まった」

上　アラバマ州モントゴメリーのバス・ボイコット戦略を説明するキング師。キングのアドバイザーたちと座っているローザ・パークス（前列左から２番目）

左　バスの座席を譲ることを拒否したローザ・パークスは、逮捕され、調書を取られ、留置された。逮捕時の写真は、半世紀近くも後、保安官事務所の大掃除中に発見されたもの

1955年12月1日にローザ・パークスが逮捕されたことから始まったアラバマ州モントゴメリーのバス・ボイコットの成功は、公民権運動を大規模な政治運動に変身させた。このボイコットは、アフリカ系米国人が団結して統制の取れた政治活動に参加できることを実証し、マーティン・ルーサー・キング・ジュニアの台頭のきっかけとなった。多くの人々を鼓舞し、非暴力的抵抗という高い道徳的基準を維持させ、あらゆる人種・信条・肌の色の米国民をつなぐ橋を築いた指導者キングの存在抜きに、公民権運動を語ることはできない。1960年代の公民権革命には大勢の勇敢な活動家が貢献したが、米国の多くの白人にジム・クロウ制度の現実を直視させ、画期的な1964年公民権法および1965年投票権法の制定につながる政治状況の形成に誰よりも貢献したのは、キングであった。

「譲ることに疲れた」
モントゴメリーのバス・ボイコット

ローザ・パークスは、自分の人生を変えたその日について後にこう語っている。「わたしが疲れていたのは、譲ることに疲れていただけです」 南部の黒人が学校を卒業することが困難だった時代に、パークスは中等学校を卒業し、地元の全米有色人種地位向上協会(NAACP)で活動し、有権者登録をし（これも南部の黒人としては珍しかった)、アラバマ州モントゴメリーで人々の尊敬を集める存在だった。1955年夏には、労働運動の組織者や人種差別廃止支持者の教育訓練機関であるテネシー州のハイランダー・フォーク・スクールで開催された異人種間リーダーシップ会議に出席した。このようにパークスは、アフリカ系米国人の現状を改善しようとする活動について知識があり、自分もその機会が到来すればテストケースの役割を果たすことができると自覚していた。

1955年12月1日、パークスは、地元のデパートの裁縫師として働いていた。その日の午後、仕事を終えて帰りのバスに乗った彼女は、「白人用」座席と「黒人用」座席の中間にある「有色人種用」座席の最前列に座った。白人用の座席が満席になり、新たに白人の乗客が乗って来たとき、運転手はパークスに席を譲るよう命じたが、パークスは拒否した。彼女は逮捕され、留置され、最終的には罰金10ドルと裁判費用4ドルの支払いを

命じられた。こうして、当時42歳だったパークスは、政治的直接行動の世界に足を踏み入れた。

パークスの逮捕に激怒した黒人社会は、市バスのボイコット運動を組織するためにモントゴメリー改善協会（ＭＩＡ）を結成。その指導を、最近モントゴメリーに移ってきたばかりのマーティン・ルーサー・キング・ジュニアに求めた。これは、ひとつには地元社会の指導者間の競争を避けるためであった。デクスター・アベニュー・バプテスト教会の牧師に就任したばかりのキングは、当時わずか26歳ながら、指導者の血を引いていた。父親のマーティン・ルーサー・キング・シニア師は、ジョージア州アトランタの強い影響力を持つエベネザー・バプテスト教会の牧師で、NAACPジョージア支部で活動し、1920年代以来、人種隔離されたアトランタの市バスに乗ることを拒否していた。

キング・ジュニアは、ＭＩＡで行った初めてのスピーチで次のように語った。

> わたしたちには抗議をする以外に選択肢はない。わたしたちは、長い年月にわたり、驚異的な忍耐力を示してきた。そして時には、わたしたちの白人の兄弟たちに、このように扱われることに満足しているのだという印象を与えてきた。しかし今晩、わたしたちは、自由でないもの、正義でないものに対する忍耐力から解放されるためにここに集まっている。

キングのリーダーシップの下で、ボイコット参加者は自動車の相乗りを組織し、黒人のタクシー運転手たちはバス料金と同じ10セントの乗車料金でボイコット参加者を乗せた。市バスを拒否して自動車、馬車、そして徒歩という手段を使うという直接的かつ非暴力的な政治活動によって、市の人種隔離制度に対して大きな経済的代償を払わせたのである。

この運動はまた、キングの名を全国に広めた。その強力な存在感と比類のない弁舌は、運動にマスコミの関心を集めるとともに、特に北部の白人を中心とする同情的な白人層からも支持を得た。後にタイム誌は、キングは「無名の存在から、一躍この国の傑出した指導者の一人となった」と評した。

キングは自宅を襲撃され、100人以上のボイコット参加者と共に「バス妨害」を理由に逮捕されもしたが、それでも毅然として、非暴力的な戦術を維持し、ボイコット運動に対する尊敬を集める。一方、モントゴメリーの人種差別主義者に対する信頼を失墜させた。キングの家で、妻とまだ赤ん坊だった娘の在宅中に爆弾が爆発する事件が起きたとき、一時は暴動が発生するかに見えたが、キングは次のように群衆をなだめた。

> わたしたちは敵を愛さなければならない。彼らに好意をもって接しなければならない。わたしたちはこれを日々の指針とし、憎悪に対して愛情をもって接しなければならない。わたしたちは、白人の兄弟たちに何をされようとも、彼らを愛さなければならない。

モントゴメリーの白人警察官の一人は、後にジャーナリストにこう語った。「正直に言って、わたしは恐怖におびえていました。あの（中略）牧師が、わたしの命を、そしてそこにいたすべての白人の命を助けてくれたのです」

最終的には、モントゴメリーのバスの人種隔離制を廃止するには、ローザ・パークス個人の意志と勇気、そしてキングの政治的指導力だけではなく、NAACP方式の法廷闘争が必要であった。ボイコット参加者が人種差別主義者の抵抗に勇敢に立ち向かう一方で、人種隔離廃止を支持する弁護士たちは、モントゴメリーのバス条例の合理性を問う訴訟を起こし、「ブラウン対教育委員会」の判例を使って闘っていた。1956年11月、連邦最高裁はモントゴメリーの上告を退け、モントゴメリーバスの人種隔離制が廃止された。これによって勢いを付けた公民権運動は、さらに新たな闘いへと前進していった。

座り込み運動

モントゴメリー・バス・ボイコット運動の成功後間もなく、マーティン・ルーサー・キングをはじめとするこの運動の指導者たち――ラルフ・アバナシー師、Ｔ・Ｊ・ジェミソン師、ジョセフ・ローリー師、フレッド・シャトルスワース師、Ｃ・Ｋ・スティール師、活動家のエラ・ベーカーおよびベイヤード・ラスティン――が、南部キリスト教指導者会議(SCLC)を設立した。この新しい公民権支援組織は、主として法律的なアプローチを取るNAACPより積極的な取り組み方を採用。有権者登録を推進する「市民権のための改革運動」を開始した。

一方若い活動家たちは、キングの漸進主義的な戦術にしびれを切らし始めていた。1960年に、ハワード大学の学生ストークリー・カーマイケルをはじめとする活動家200人が、学生非暴力調整委員会(SNCC)を設立した。またノースカロライナ州グリーンズボロでは、黒人大学ノースカロライナ農工大学の１年生４人が独自の行動を始めた。

1960年２月１日午後４時半、同大学の学生、エゼル・ブレア・ジュニア（現在はジブリール・カザン）、フランクリン・ユージーン・マッケイン、ジョセフ・アルフレッド・マクニール、およびデービッド・リーネイルの４人は、地元のウールワース・

1961年のアラバマ州モントゴメリーにおける公民権活動家による座り込み。人種隔離されたランチカウンターに静かに座っているだけでも、逮捕される恐れがあり、場合によってはさらに深刻な事態になることもあった。

労働運動の指導者Ａ・フィリップ・ランドルフ（右）は、寝台車ポーター組合を結成してその指導者となった。この組合は、多くのアフリカ系米国人に、当時彼らにとってはまれであった中流階級の職業への道を開いた。1941 年にランドルフがワシントン大行進を実施すると警告したため、フランクリン・Ｄ・ルーズベルト大統領は防衛産業における人種差別を禁止せざるを得なかった。この行進は、有名な 1963 年のワシントン大行進のモデルとなった。

デパートのランチカウンターで白人専用の席に座った。彼らはサービスを拒否されたが、そのまま１時間後の閉店時刻まで静かに座り続けた。翌朝には、20 人の黒人学生が、３～４人ずつのグループに分かれてランチカウンターの座席に座った。地元のグリーンズボロ・レコード紙によると、「騒動はなかった。またグループの中で会話する以外には、話をする者もいなかったようだ。本を取り出して勉強しているらしい学生たちもいた」

ブレアは同紙に、ニグロの大人たちは「おびえて現状に甘んじています。（中略）誰かが目をさまして現状を変える時が来ており、（中略）わたしたちはここから始めることにしたのです」と語った。

公共の場所を非暴力的に占領する「シットイン（座り込み）」は、少なくとも、インドを英国から独立させるためのマハトマ・ガンジーの運動にまでさかのぼる。米国では、労働団体や北部に本部のある人種平等会議 (CORE) が、すでに座り込み戦術を使っていた。グリーンズボロでの出来事が注目を集め始めるに従い、SNCC は素早くこの公民権運動の戦術を支持し、座り込みは２カ月間で 50 を超える都市へ広がった。

中でも重要だったのはテネシー州ナッシュビルでの一連の座り込みで、この町では、キングとつながりのあるナッシュビル・キリスト教指導者会議がこうした機会に向けて準備を進めていた。キングは 1955 年に公民権運動家で宣教師のジェームズ・ローソン師に連絡を取り、「南部にはあなたのような人が誰もいない。すぐに来てほしい」と南部に移って来るよう説得した。ローソンはインドで布教活動に携わり、ガンジーのサティアグラハ（非暴力不服従運動）を学んだ経歴があった。

ローソンは 1958 年に、キングの南部キリスト教指導者会議 (SCLC) と協力して、新しい世代の非暴力活動家の訓練を始めた。その指導を受けた人々には、ダイアン・ナッシュ、ジェームズ・ベベル、そして現ジョージア州選出連邦下院議員のジョン・ルイスなどがいる。彼らは間もなく公民権運動家として知られるようになる。こうした訓練セミナーで、デパート内のレストランで一連の座り込みを実行することが決められた。黒人は、デパートで買い物をすることは許されていたが、デパート内のレストランで飲食をすることはできなかった。

ナッシュビルの活動家たちは入念な計画を立て、慎重に動いた。しかし、グリーンズボロの座り込みが全国的に注目され始めたころには、ナッシュビルでも行動を起こす準備が整っていた。1960 年２月、ナッシュビルで何百人もの活動家が座り込みを始めた。学生たちが作成した手引書は、次のような、個人としての厳しい規律と、世界に向けて堂々と非暴力を貫く姿勢を表したものであった。

> ののしられても、反撃したり暴言を返したりしてはならない。（中略）店の入り口や通路をふさいではならない。
>
> 常に友好的で礼儀正しい態度を取らなければならない。
>
> 背筋を伸ばし、常にカウンターに向かって座らなければならない。（後略）
>
> イエス・キリスト、モハンダス・Ｋ・ガンジー、そしてマーティン・ルーサー・キングの教えを忘れてはならない。
>
> 愛と非暴力を忘れてはならない。あなたがたの一人一人に神の恵みがありますように。

当初、ランチカウンターは、座り込みが始まると閉店していたが、何度か座り込みが続いた後は、警察が座り込んでいる抗議者を逮捕するようになり、その裁判には大勢の聴衆が詰めかけた。風紀びん乱行為で有罪となった活動家たちは、罰金を払わずに禁固刑を受けることを選んだ。

ナッシュビルでの出来事は、実情を暴露されたジム・クロウが存続できないことを示した初期の例であった。伝説的なジャーナリスト、デービッド・ハルバースタムは、当時駆け出しの記者としてナッシュビル・テネシーアン紙にこの運動の記事を書き、全国のマスコミの注意を引くことに一役買った。座り込み運動は全米各地に広がり、間もなく全国の国民が、1960 年２月 28 日付のニューヨーク・タイムズ紙に掲載された写真に代表される数々のイメージに衝撃を受けた。この写真の見出しには、「モントゴメリーでニグロ女性に向かって長さ 18 インチ（46 センチ）のバットで殴りかかる白人男性。女性は殴られて負傷した。この女性は昨日、別の白人男性に体が当たったことから、この襲撃を受けた。警察官が近くにいたが、誰も逮捕されなかった」とあった。

その年の４月 19 日に、ナッシュビルの学生活動家たちの主任弁護士の自宅で爆弾が爆発した。直ちに、およそ 2000 人の

アフリカ系米国人が市役所へデモ行進を始め、そこで市長と対決した。ダイアン・ナッシュは市長に、ランチカウンターの人種隔離廃止を支持するかと聞いた。市長は、支持すると答えたが、「わたしは人の商売に指図をすることはできない。彼にも権利があるからだ」と言った。

こうした差別をする「権利」が闘争の焦点であった。一方で、ナッシュビルの商人たちは悪評の影響に悩まされ、堂々とした態度で非暴力を貫く黒人学生たちと、彼らに対抗するあまりにも暴力的な武装集団との著しい対比も、こうした悪評に輪をかけた。裏で交渉が行われ、1960年5月10日、ダウンタウンのいくつかのランチカウンターが黙って黒人客を受け入れ始めた。その後は衝突もなく、間もなくナッシュビルは、南部で初めて公共施設の人種隔離を廃止し始めて成功した都市となった。

フリーダム・ライド

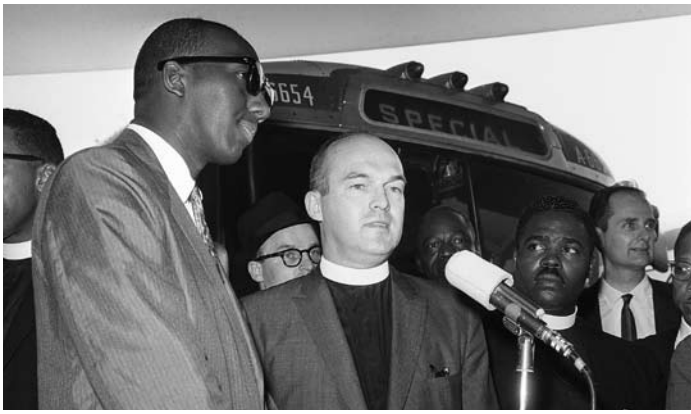
ナッシュビルの座り込み運動の若い指導者の一部は、学生非暴力調整委員会(SNCC)と手を組んだ。SNCCは1961年に開始された「フリーダム・ライド」運動を支援した。サーグッド・マーシャルの率いるNAACP弁護士チームが州間バス路線における人種隔離を禁止する最高裁の判決を勝ち取ったのは、1946年のことである。(米国の連邦制度の下では、連邦政府にとって、州の境界を越えて行われる通商を規制することの方が容易であった。)また1960年の「ボイントン対バージニア州」事件では、人種隔離禁止をバスターミナルおよび州間の移動に関連するその他の施設にも拡大するという最高裁判決も下されていた。しかし、権利を持つことと、その権利を行使することの間には、大きな違いがあった。

州間を走るバスの前部座席に座ったり、南部のバスターミナルで、それまで白人専用だった施設を使用したりという憲法上保障された権利を行使するアフリカ系米国人には暴力的な対応が待っていることは、広く暗黙の了解となっていた。こうした了解の下で、COREの全国議長ジェームズ・ファーマーら13人の黒人と白人から成るグループが、ワシントンＤＣをバスで出発した。数カ所で降車しながらニューオーリンズまで向かう計画であった。「わたしたちは、途中で逮捕されたら、それを受け入れます。また途中で暴力を受けたら、暴力をもって対応することなく、それを受け入れます」とファーマーは語った。

暴力に関するファーマーの予感は正しかった。中でも最も激しかったのが、アラバマ州アニストン付近で起きた暴力事件であろう。アトランタを出発したフリーダム・ライダーたちは２つのグループに分かれ、１つはグレーハウンド社のバス、もう１つはトレールウェーズ社のバスに乗っていた。グレーハウンド・バスでアニストンに到着したグループは、歩道が群衆で埋まっているのを見た。これは見慣れない光景であったが、大勢の人々が集まっていた理由は間もなく明らかになった。バスがバスステーションの駐車場に入ると、暴徒の群れがバスを襲撃し、石やブラスナックルでバスの窓を割った。ライダーをひそかに見張るために乗車していた白人のハイウェー・パトロール隊員２人が、バスのドアを閉め切り、クー・クラックス・クラン（ＫＫＫ）の率いる暴徒の乗車を防いだ。

しばらくして地元警察官らがようやく到着したが、彼らは群衆と冗談を言い合い、誰も逮捕せず、バスを市の外れまで護送した。そのころには200人以上に増えていたとされる暴徒たちは、車やピックアップ・トラックで、バスのすぐ後を付いていった。アニストンを出て10キロメートルほどのところで、タイヤがパンクしバスは停車した。白人男性の群衆がバスに乗ろうとし、その中の一人がバスの窓から火炎爆弾を投げ入れた。歴史家のレイモンド・アーセノーは、「フリーダム・ライダーの運が尽きたかと思われたとき、燃料タンクが爆発し、暴徒たちはバス全体が爆発することを恐れた」と書いている。バスは炎に包まれ、ＡＰ通信の報道によると、バスから逃れたフリーダム・ライダーたちは、「短時間ではあったが、ひどく殴られ、血まみれになった」

フリーダム・ライダーのもうひとつのグループは、トレールウェーズ・バスで、アトランタから乗車したＫＫＫ団員のグループと同乗することになった。黒人のフリーダム・ライダーた



上　1961年6月、ワシントンＤＣからフロリダ州へ向かうフリーダム・ライドのバスに乗り込むメリーランド州ブレントウッドのペリー・Ａ・スミス３世師とニューヨークのロバート・ストーン師

左　ミシシッピ州ジャクソンのバスターミナルに到着するフリーダム・ライダーの乗ったトレールウェーズ・バス

銃剣を構えた州兵に護衛されてアラバマ州モントゴメリーからミシシッピ州ジャクソンへ向かうフリーダム・ライダーたち。州兵の後ろにはさらに 20 人以上のフリーダム・ライダーがいる。

ちが後部座席に座ることを拒否すると、再び暴力が振るわれた。61 歳の教育者ウォルター・バーグマンら白人のライダーは、特に激しい暴力を受けた。しかし、ライダーたちは全員、ガンジーの教えに基づく訓練に従い、誰一人暴力に抵抗しなかった。バスはようやくバーミングハムに到着したが、事態はさらに悪化した。CBS ニュースの解説者ハワード・K・スミスは、目撃者として次のように証言している。「バスが到着すると、無法者たちが乗客を捕まえて路地や通路に引きずり込み、パイプや鍵束やこぶしで殴りつけた」 人種隔離されたバスステーションの中では、フリーダム・ライダーたちが一瞬ためらった後、白人専用の待合室に入っていった。彼らも殴打され、意識を失う者も出た。その間、バーミングハムの警察署長ユージーン・「ブル」・コナーは、ＫＫＫ団員やその支持者を制止しようとしなかった。

それでもライダーたちは旅を続ける決意を固めていた。ワシントンでは、ロバート・F・ケネディ司法長官がジョン・パターソン・アラバマ州知事に、フリーダム・ライダーが同州を無事に通過することを保証するよう要請した。パターソンは、「州民は怒り狂っており、わたしはこの扇動家たちの保護を保証することはできない」として、これを拒否した。アラバマ州選出の連邦下院議員ジョージ・ハドルストン・ジュニアは、フリーダム・ライダーは「進んで人種的な憎悪を売り込む商人」であり、グレーハウンド・バスのグループが火炎爆弾の襲撃を受けたのは「身から出たさび」だと述べた。

ナッシュビルでは、ダイアン・ナッシュが政治的な影響を懸念していた。彼女は後にこう語っている。「フリーダム・ライドが暴力によって阻止されたなら、この運動の将来はないとわたしは確信していました。なぜならそれは、運動が始まったら圧倒的な暴力で攻撃しさえすれば黒人はおとなしくなる、という印象を与えることになるからです」 当初のフリーダム・ライダーに加えて、SNCC およびその他の黒人・白人活動家が参加して、新たな運動が開始された。

5 月 20 日、フリーダム・ライダーの一団がアラバマ州のバーミングハムからモントゴメリーへ向かうグレーハウンド・バスに乗車した。ＡＰ通信の報道によると、バスが停車場に到着すると、「間髪を入れず」推定 1000 人の暴徒が襲い掛かった。負傷者の中には、ケネディ司法長官の補佐官ジョン・シーゲンソーラーがいた。ケネディは、法の執行のためモントゴメリーに連邦保安官 400 人を派遣した。一方、人種平等会議 (CORE) は、フリーダム・ライドを継続し、ミシシッピ州ジャクソンへ、そしてさらにはニューオーリンズへ向かうことを約束した。ジェームズ・ファーマーはニューヨーク・タイムズ紙に、「大勢の学生たちが必要に応じてボランティアとなれるように他の各都市で待機しています」と語った。そして実際におよそ 450 人の米国市民が志願してバスに乗車し、特にジャクソンでは、ファーマーをはじめとする大勢のフリーダム・ライダーが「治安妨害」の罪に科せられる罰金の支払いを拒否し、逮捕されて留置場を満員にした。

5 月 29 日、ケネディ司法長官は、州間通商委員会（ＩＣＣ）に、州間輸送機関の人種差別を廃止するために厳しい規制を採用するよう命じた。ＩＣＣはこれを実行した。こうした連邦政府の措置により、少なくとも州間輸送のバスターミナル、バス、および鉄道では、ジム・クロウの力が弱まった。

フリーダム・ライダーの勝利は、その後の偉大な公民権運動を方向付けた。公民権運動の最盛期においてこれが初めてではなかったが、検閲を受けない自由な報道によって、米国民は非道な人種差別の現実を直視することを強いられた。バーミングハムでは暴徒が地元紙ポスト・ヘラルドのカメラマン、トミー・ラングストンを殴打し、カメラを壊した。しかし彼らはフィルムを抜き取ることを忘れたため、近くにいた黒人を激しく殴る暴徒たちの写真が、同紙の一面に掲載された。逮捕や殴打事件が起こるたびに、より大きくマスコミに注目され報道されるようになった。記事の多くは、依然として「ニグロ過激派」という言葉を使っていたが、怒り狂った白人の暴徒と、落ち着いて威厳のある黒人と白人のフリーダム・ライダーとの対比は見逃しようもなく、米国民は、少なくとも「米国の価値観を最もよく代表しているのはどちらか」ということを考え始めざるを得なかった。

フリーダム・ライダーの勇気と彼らの闘いの正しさを称賛する人々の中には、白人の宗教指導者が大勢いた。ビリー・グラハム師は、フリーダム・ライダーを襲撃した者を起訴するよう求め、「いかなる社会においても特定の人々が２級市民として扱われるのは嘆かわしいこと」であると断じた。ユダヤ教のラビ、バーナード・Ｊ・バムバーガー師は、白人の人種差別主義者による暴力を「道徳的にも法律的にも全く弁護の余地のない」ものとして糾弾し、公民権運動活動家に「急がず慎重にやる」ように要求する白人たちを批判した。そして、どんなときにも心の真っすぐな人たちがいた。レイモンド・アーセノーが書いているところによると、アニストン郊外でグレーハウンド・バスが炎上したとき、「12 歳の少女ジェイニー・ミラーは、煙にむせる犠牲者たちに水を飲ませるために、ＫＫＫ団員の罵声（ばせい）を浴びながらも、５ガロン（19 リットル）のバケツで何度も水を汲んで運んだ」

オルバニー運動

1962年と1963年に行われた2つの主要な公民権運動は、非暴力抵抗の限界と可能性を示す実例となった。人種隔離制度が実施されていたジョージア州オルバニー市のアフリカ系米国人は、従来、ジム・クロウの南部で可能な政治活動を精いっぱい行っていた。1961年に、SNCCのボランティアが、オルバニーで行われていた有権者登録運動を強化するために同市にやってきた。彼らは有権者登録センターを設置し、ここが座り込みやボイコットなどの抗議運動の本拠ともなった。　1961年11月、地元の多くの黒人組織が「オルバニー運動」という組織を結成し、若い整骨医ウィリアム・G・アンダーソンがそのリーダーとなった。抗議運動がさらに活発に行われるようになり、12月半ばまでには、500人を超えるデモ参加者が留置された。アンダーソンは、マーティン・ルーサー・キング・ジュニアとキングの仲間であるラルフ・アバナシー師と面識があった。アバナシーは、モントゴメリーのファースト・バプテスト教会の牧師で、南部キリスト教指導者会議(SCLC)ではキングの首席補佐官を務めた。アンダーソンは、オルバニー運動の勢いを維持するため、そして全国的なマスコミの注目を集めるために、キングの援助を求めた。

オルバニーの警察署長ローリー・プリチェットは、キングや他の活動家にとって手ごわい相手であった。プリチェットは、堂々とした非暴力的な公民権運動活動家たちに対する人種隔離主義者の暴力がマスコミに報道されたことによって、すでに多くの米国民がジム・クロウに反感を持つようになっていたことを十分に理解していた。そこで、オルバニー運動には極力そのような「マスコミの注目を集めるチャンス」を与えないよう努めた。オルバニーの警察官たちは、抗議者に対して、特に近くに報道関係者がいる場合には、いかなる暴力をも振るわないように言い渡された。それまでの抗議者たちは「留置場を満員にする」ことに成功していたが、プリチェットは、逮捕した者を周辺の各郡に分散して留置した。『新ジョージア百科事典』によると、「結局プリチェットの留置場のスペースが足りなくなるより先に、キングの抗議デモ志願者の方が足りなくなった」

またプリチェットは、マスコミにとってはキングがスターであり、キングという「切り口」がなければ全国的な報道は減る、ということも理解していた。キングは数回にわたってオルバニーを訪れ、数回にわたって治安妨害で逮捕され有罪となった。裁判所は、キングとアバナシーに、禁固刑か罰金刑の選択肢を与えたが、2人は確実にマスコミの注意を引くために禁固刑を選んだ。ところが、「匿名の篤志家」(プリチェットの依頼を受けた人種隔離主義者)が罰金を払い、2人は釈放されてしまった。

1962年7月24日に、ようやく「マスコミの注目を集めるチャンス」が訪れたが、それはキングが望んでいたものとは違った。そのころには、オルバニーのアフリカ系米国人の多くは、運動が前進しないことに不満を募らせていた。その日の夕方、黒人2000人の群衆が、れんが、ガラス瓶、石などで武装して、オルバニーの警察官とジョージア州ハイウェー・パトロール隊員の一団を襲撃した。州警察官一人が歯を2本折られたが、警官たちはローリー・プリチェットの指導をよく守り、反撃しなかった。プリチェットは主導権を握る機会を逃さず、「あの非暴力的な石つぶてを見たかね」と言った。

1962年8月、アラバマ州モントゴメリー市役所前で、さまざまな宗派の聖職者約70人が人種隔離反対の祈祷（きとう）集会を開いた後に逮捕された。

キングは、ダメージを抑えるため、直ちに行動した。彼は、予定されていた大規模なデモを中止し、その日を償いの日とすることを宣言した。しかし、連邦政府が、オルバニーにおけるデモの実施を禁止する命令を出したため、状況はさらに困難になった。それまでは法律が公民権支持派の味方であったが、この禁止命令により、キングら活動家が何らかの行動を取れば、人種隔離支持派はキングらが法律に違反していると主張することができた。

キングは、もはやオルバニーにいても運動全体のためにならないと判断した。SNCC、NAACP、CORE、およびその他の地元の活動家たちは、その後もオルバニーで闘いを続け、最終的には同市のアフリカ系米国人のために真の前進をもたらした。キングとSCLCチームにとって、オルバニーは教訓となった。キングは、自伝で次のように述べている。

> その何カ月か後にバーミングハムでの戦略を立てたとき、われわれは何時間もかけてオルバニーでの状況を分析し、その間違いから教訓を得ようとした。その結果として、その後の戦術の効果を高めることができただけでなく、オルバニー自体も全くの失敗ではなかったことが明らかになった。

バーミングハムでの逮捕

オルバニーの警察署長ローリー・プリチェットは、非暴力に非暴力で対抗するだけの政治的手腕と冷静さを備えていたが、アラバマ州バーミングハムの警察署長ブル・コナーは、そうではなかった。キングをはじめとする公民権運動の指導者たちは、

コナーを絶好の引き立て役と考えたが、その予測は正しかった。キングの伝記の著者マーシャル・フレーディは、コナーについて、「臆面もなく脅しをかける、旧来のあからさまな人種差別主義者だった。中折れのストローハットをかぶり、肩をそびやかして歩く、ずんぐりした中年のボスで（中略）その怒りっぽい短気な性格は有名だった」と書いている。コナーは、バーミングハムのすべての白人の考え方を代表していたわけではなく、少し前に行われた地方選挙では、改革派の候補たちが得票を伸ばしていた。しかし、コナーは警察を支配する立場にあり、1961年にフリーダム・ライダーがバーミングハムで受けた「出迎え」は、ここで活動家が受けるであろう待遇を十分に予想させるものであった。

オルバニーでの体験から、キングとSCLCのチームは、人種隔離廃止という全体的な目標より、もっと具体的な目標に重点を置くべきであるとの教訓を得ていた。キングは後に次のように書いている。

> われわれは、強硬派の地域社会においては、不正で複雑な人種隔離制度のひとつの側面に焦点を絞って闘う方が効果的であるという結論に達した。そこで、バーミングハムでの闘争は、ビジネス社会に的を絞ることにした。当地の黒人の住民が十分な購買力を持ち、多くの事業の利益を左右する力を備えていることが分かっていたからである。

1963年4月3日、活動家たちは一連のランチカウンター座り込み運動を開始した。続いて4月6日にはバーミングハム市役所前でデモ行進が行われた。同市のアフリカ系米国人はダウンタウンの店のボイコットを開始し、キングはこの戦術を「驚くほど効果がある」と評した。多くの店はすぐに「白人専用」の看板を外したが、このような店に対してブル・コナーは、営業許可を取り消すと脅した。抗議運動の志願者が増えるに従い、バーミングハムの運動は、地元の教会での「ニールイン（ひざまずき）」運動や図書館での座り込み運動へと拡大していった。逮捕者の数も増え、留置場が満員になった。

その時点では、警察の対応はまだ控えめであった。典型的な出来事がニューヨーク・タイムズ紙に次のように報道されている。

ジョージア州オルバニー　同市で逮捕されたフリーダム・ライダーたちの審問が行われている間に、ひざまずいて祈るアフリカ系米国人のデモ参加者（1961年12月）

> ８人のニグロが、人種隔離された図書館に入った。彼らは、４つの階のうち３つを歩き、机に向かって雑誌や本を読んだ。警官がいたが、彼らに退去を命じることはなかった。約30分後、彼らは自主的に図書館を去った。
>
> ニグロたちが入ってきたとき図書館にはおよそ25人の白人がいた。中には、「臭いな」などと軽蔑的なことを言ったり、ニグロたちに向かって「家へ帰れ」と言ったりする者もいたが、特に問題は起きなかった。

４月10日に、コナーはプリチェットの例に従い、キング、フレッド・シャトルスワース、その他134人のリーダーたちがボイコット、座り込み、ピケなどの抗議活動を行うことを禁止する郡の裁判所命令を入手した。この禁止命令に違反すれば法廷侮辱罪となり、その刑罰は単なる治安妨害の場合より重い禁固刑であった。

キングは選択を迫られた。そしてアバナシーとともに、自らこの禁止令に違反する決断を下し、次のような短い声明を発表した。

> この禁止命令は、法的手続きを不正かつ非民主的に、そして憲法に違反して悪用したものである。われわれは良心に照らし、そのような禁止命令に従うことはできない。
>
> われわれがこの禁止命令に従わないのは、法律を軽視するからではなく、法律に対して最大の敬意を払うからである。これは、法の目をくぐったり、あるいは法律を無視したり、混乱した無秩序を引き起こすためではない。われわれは、良心に照らして不公正な法律に従うことができないのと同様、法廷を不正に利用する行為にも敬意を払うことはできない。
>
> われわれは、正義と道徳性を基づく法制度を信じている。われわれは、合衆国憲法を深く愛し、アラバマ州の司法制度を浄化することを望むが故に、この行動がもたらし得る結果を認識した上で、この重大な行動を取る危険を冒すのである。

1963年4月12日の聖金曜日に、マーティン・ルーサー・キングは、バーミングハムのダウンタウンに向かう抗議デモの先頭に立った。行進が5ブロック目に差しかかったところで、キング、アバナシー、および抗議に加わった白人牧師一人を含む約60人が逮捕された。キングが拘置されたとき、コナーは「彼は逮捕されるためにここに来たんだろう。これで願いがかなったというものだ」と言った。

バーミングハムの獄中からの手紙

キングは、独房で孤独な日々を送る中で、米国思想史においても有数の優れた文章を書き著した。地元の数人の白人牧師たちは、キングの長期的な目標には賛成していたが、短期的な戦術には反対しており、キングの率いる抗議デモは「思慮に欠けた時期尚早な」行為であるとする公式声明を発表して、キングの市民的不服従にも、「それらの活動が理論的にはいかに平和

的な行動であろうとも」反対した。

キングは、これに対する返答として「バーミングハムの獄中からの手紙」を書いた。それは、便せんが手に入らないため、新聞紙の余白に走り書きされたものであった。その新聞紙を獄中からひそかに運び出したキングの側近は、害虫駆除の広告や園芸クラブのニュースの周りにキングの手書きの言葉が書かれていた、と回想している。しかし、その余白に書かれた言葉は、不正を目の前にして何もしないことを強く非難するとともに、自由を求める運動が米国で必ず勝利を収めるという極めて強固な信念を表していた。

キングは、白人牧師たちの批判に対して、時代を超えた普遍的な真実をもって応えた。外部からバーミングハムにやってきて緊張関係を煽ったという非難に対して、キングは、抑圧の下では外部の者など存在しない、と答えた。「どこかで不正があれば、あらゆる場所の正義にとって脅威となります。わたしたちは逃れることのできない相互関係の網に捕らわれているのであり、ひとつの運命の衣に包まれています。一人に影響を及ぼすことは、間接的に全員に影響を及ぼすことになります」 また緊張関係については、「成長のために必要な、建設的かつ非暴力的な緊張関係があります」と書いた。そして、人種隔離という病に苦しんでいない人々にとっては、いかなる直接行動も時宜を得たものではないとし、「『待て』という言葉は、ほとんどの場合『絶対にだめだ』ということを意味してきました」と述べた。さらにキングは、「他の人間の自由のスケジュールを設定する」ことは誰にもできないと主張した。

キングは、支持者らと共に郡裁判所の禁止命令に違反したことを認めたが、公正な法と不公正な法を区別する聖アウグスティヌスの言葉を引用し、地域社会の意識を高めるために不公正な法律を破る者は、その行動が「率直な、愛に満ちたものであり、懲罰を受ける意志の伴うもの」であるならば、「実際には法に対する最大の敬意を表している」、と主張した。獄中でこれをしたためたキングは、自ら模範を示したことになる。

獄中のキングは、米国において最終的には自由が勝利を収めること、そして勝利を収めなければならないことを確信していた。「わたしは、この闘争の結果について何も心配していません。（中略）わたしたちは自由という目標を達成するでしょう。（中略）自由は米国の目標であるからです。（中略）わたしたちの運命は米国の運命に結び付いています。（中略）高くこだまするわたしたちの要求には、わが国の神聖な伝統と神の永遠の意志が体現されています」 そしてキングは、「いつの日か南部はその真の英雄たちを正しく評価するでしょう」と述べた。

「運動が始まった」

バーミングハムでの運動には彼らの指導力が必要だったため、マーティン・ルーサー・キング・ジュニアとラルフ・アバナシーは、留置場で８日間過ごした後、保釈金を払って釈放された。彼らは、ジェームズ・ベベル師が考案した戦術を採用した。ベベルは、ナッシュビルの座り込み運動やフリーダム・ライドの闘士で、キングに誘われて南部キリスト教指導者会議 (SCLC) の直接行動・非暴力教育を担当する責任者を務めていた。ベベルは、ほとんどの黒人家庭では一家の大黒柱が留置されれば生活に困ることから、市内の若いアフリカ系米国人を組織し始めた。大学生、中学・高校生、そして小学生までが、非暴力の原則を教えられた。彼らは、ダウンタウンへ行進し、そこで白人専用のランチカウンターに座り、白人専用の水飲み場を使い、白人専用の図書館で勉強し、白人専用の教会で祈りを捧げる準備をした。少なくとも一部の宗派の白人教会は、若い黒人たちを歓迎した。

子どもたちを運動に使う決断は論議を呼んだ。SCLC の理事会役員だったワイアット・ティー・ウォーカー師は、「ニグロの子どもたちは、人種隔離された学校に５カ月間通うよりも、留置場で５日間過ごした方が、多くを学ぶことができる」と述べて、この決断を擁護した。キングは、『自伝』の中で、父親の反対を押し切って行進に参加した 10 代の黒人少年の話を紹介している。

> 少年は言った。「お父さん、僕はお父さんに逆らいたくはないけれど、もう誓ったのです。家から出るなと言われても、僕はこっそり出掛けます。そのために僕を罰する必要があると思うなら、僕は罰を受けます。これは、僕の自由のためだけではなく、お父さんとお母さんの自由のための行動です。お父さんが死ぬ前に実現させたいのです」
>
> 父親は考え直して、息子の参加を認めた。

1963 年５月２日、何百人もの若いアフリカ系米国人が行進を始めた。彼らはトランシーバーで連絡を取り合い、「We Shall Overcome」を歌いながら歩いた。数百人が逮捕され、バーミングハムの留置場は超満員となった。そして、おそらくそれ以上に重要なのは、彼らがブル・コナー署長の苛立ちを極限にまで追い込んだことである。

５月３日に、コナーは力ずくで行進をやめさせる決断を下した。水圧を最大にした消防用ホースがデモ参加者に向けられ、彼らは、木の皮をはぐほどの強力な水流に打たれて倒れ、アスファルトの道を転がった。署長命令で、群衆を解散させるために警察犬が使われ、数人のデモ参加者がかまれた。

学生非暴力調整委員会 (SNCC) の活動家ジェームズ・フォアマンは、SCLC の本部でそのニュースを聞いた。彼によると、本部にいた指導者たちは「飛び跳ねて大喜びした。（中略）彼らは『これで運動が始まった。警察に暴力を使わせたぞ』と何度も何度も繰り返した」 フォアマンはこれを「ひどく冷酷で残酷で打算的」だと思ったが、後に歴史家のＣ・バン・ウッドワードが述べたように、「より経験豊富な活動家たちは、良くも悪くも報道写真が大きな力を持つことを学んでいた」のであった。

その週、若者たちは毎日ダウンタウンでデモ行進を行い、毎回、消防用ホースと警察犬が使用された。その結果、そうした光景をとらえた写真や映像や記事が、米国および世界各地の

ニュースで大きく取り上げられた。こうした最大の挑発に対しても、ほとんどのデモ参加者は非暴力を貫いた。ジェームズ・ベベルは、メガホンで「非暴力デモができない人は帰ってください」と叫びながら、通りを歩いていった。5月6日までには、ブル・コナーは何千人もの子どもたちを逮捕し、州の催事場に収容していた。

ニューヨーク・タイムズ紙の社説は次のように述べ、増加する一方だったこうした心情を抱く米国民を代弁した。

> 人間の尊厳を尊重することを学んだ米国民ならば、ニグロと白人のデモ参加者に対するアラバマ警察当局の野蛮な行為の記事を読んで、恥じ入らずにはいられないだろう。バーミングハムで学童たちを服従させるために警察犬や高圧ホースが使われたことは、国家の恥である。何百人ものティーンエージャーや、ティーンにもならない子どもたちが、自由という生得権を要求したために留置場や少年院に入れられていることは、法的な手続きを愚弄（ぐろう）するものである。

ワシントンＤＣでは、ある重要人物がこれを読んで、同様の意見を表明した。その様子を、キングの伝記作家マーシャル・フレーディは次のように述べている。

> 警察官が黒人の若者のシャツの胸を片手でつかみ、もう一方の手に犬の綱を握り、その犬が若者の胴体に向かって飛び掛かろうとしている写真が、オーバル･オフィス（大統領執務室）の大統領の目に触れた。その日、大統領は訪問者の一団に「あれには吐き気を催すよ」と言った。

5月7日に、フレッド・シャトルスワースが、消防ホースの水に打たれ、自分の教会の壁にたたきつけられて負傷した。その数分後、現場に到着したブル・コナーは、「見られなくて残念だった。(中略)霊きゅう車で運ばれてくれればよかったのに」と言い放った。

5月9日までには、バーミングハムの商店主たちは我慢の限界に達していた。彼らはキングおよびシャトルスワースと交渉し、合意に達した。バーミングハムの商店は、ランチカウンター、トイレ、水飲み場の人種隔離を廃止し、黒人従業員を雇い昇進させることになった。また留置されていたデモ参加者たちは釈放され、告訴は取り下げられることになった。ブル・コナーは、「生涯最悪の日だ」と言った。

1963年5月アラバマ州バーミングハム――水圧を最大にした消防用ホースは、木の皮をはぐほどの威力があった。警察署長ブル・コナーは、非暴力的な公民権運動活動家をホースで制圧することを命じ、その映像は全米の人々に衝撃を与えた。

バーミングハム運動の勝利は、アフリカ系米国人抗議者たちの勇気と規律によってもたらされた。それは、マーティン・ルーサー・キング・ジュニア、ラルフ・アバナシー、フレッド・シャトルスワース、ジェームズ・ベベルといった指導者たちの、人々を鼓舞する意思堅固な力の成果でもあった。これによって米国民は、新聞の紙面やテレビの画面で、ジム・クロウの凶暴性の現実を直視することを強いられた。またバーミングハムでの勝利は、奴隷制度と人種隔離制度の時代を生き延びてきた理想主義と、長年にわたって先延ばしにされてきた約束の実現を求める焦燥感を反映したものでもあった。5月8日に、バーミングハムの少年裁判所の判事が、5月3日の抗議活動で逮捕された15歳の少年の事件を審理した。以下はそのやりとりである。

> 判事　わたしはよく建国の父たちの言葉を思い起こす。それは「制限のない自由はない」という言葉です。家へ帰って学校に行きなさい。分かりましたか。
>
> 少年　ひと言言ってもいいですか。
>
> 判事　何でも言ってみなさい。
>
> 少年　あなたは自由があるからそう言えるのです。憲法にはわたしたちは皆平等であると書かれているけど、ニグロは平等ではありません。
>
> 判事　しかし君たちは大きく前進してきたし、今も前進を続けている。これには時間がかかるのです。
>
> 少年　わたしたちは100年以上も待ち続けているのです。

ワシントン大行進

バーミングハム運動は真の勝利を収めたが、その代償は大きかった。アフリカ系米国人が人種隔離制を打ち負かすためには、１回に１都市ずつとか、殴られ、犬にかまれ、消防用ホースの攻撃を受ける、といったやり方は長期的な解決策とはなり得なかった。公民権運動は実質的な前進を見せていたが、その一歩ごとに執拗な反対に出会った。1962年には、ミシシッピ大学初の黒人学生ジェームズ・メレディスが無事に入学できるようにするため、連邦軍が派遣されなければならなかった。その翌年には、知事就任演説で「今ここで人種隔離を、明日も人種隔離を、永遠に人種隔離を」と約束していたアラバマ州のジョージ・ウォレス知事が、「学校の講堂の扉の前に立ちはだかる」という行動に出た。そのため、アフリカ系米国人学生ビビアン・マローンとジェームズ・フッドがアラバマ大学に入学するには、連邦保安官の介入が必要であった。その翌日、ミシシッピ州ジャ

クソンで、同州のNAACPの指導者メドガー・エバーズが自宅前で殺害された。またバーミングハム自体においても、1963年９月15日、３人のＫＫＫ団員が、バーミングハム運動の非公式な本部であった16番通りバプテスト教会の地下室にダイナマイト19本を仕掛けた。アディー・メイ・コリンズ、キャロル・ロバートソン、シンシア・ウェズリー、デニーズ・マクネアという４人の少女が死亡し、22人が負傷した。

1963年６月11日、ジョン・Ｆ・ケネディ大統領は、ホテル、レストラン、劇場、商店などあらゆる私有の施設における人種隔離を禁止する法案を連邦議会に提出することを、全国民に向けて発表した。大統領は、「わたしたちが直面しているのは、主として道徳上の課題である。それは、聖書の時代にさかのぼるほど古い課題であり、合衆国憲法に明確に述べられている課題である」と述べた。しかし、効果のある公民権法の可決を阻む障害は依然として大きかった。

何人かの黒人指導者は、連邦議会が公民権法を検討する政治的現状を変えようと決心した。その一人がＡ・フィリップ・ランドルフである。当時すでに70歳を超えて久しかったランドルフは、かつて寝台車ポーター組合を結成し、何十年にもわたってその指導者を務めていた。長年、寝台車のポーターにはアフリカ系米国人が従事することが多かった。これは全米各地で、黒人が働くことのできる最も良好な職場のひとつであり、こうしたポーター組合の指導者として、ランドルフは米国の労働運動における重要な存在となっていた。

1941年に、フランクリン・Ｄ・ルーズベルト大統領は、米国の第２次世界大戦参戦の可能性を踏まえて、国防生産の強化を目指していた。ランドルフはルーズベルトに対し、連邦政府機関および防衛産業における人種隔離廃止の要求を突きつけた。ランドルフは、この要求が受け入れられなければ、ワシントンＤＣで大規模なデモ行進を行うと警告した。間もなくルーズベルトは、防衛産業と連邦政府各局における差別の禁止と公正雇用実施委員会(FEPC)の設置を命じる行政命令を発布した。第２次大戦後、ランドルフからの圧力が一因となって、ハリー・Ｓ・トルーマン大統領は、1948年に米国の軍隊の人種隔離廃止を命じた。

そして今、ランドルフは、有能な補佐役ベイヤード・ラスティンと共に同様の行進を計画し、「ひとつの行動の中に、公民権運動だけでなく全国的な経済面での要求をまとめて組み入れ」ようとした。このイベントを組織するために「ビッグ・シックス」と呼ばれる公民権運動の指導者６人のグループが結成された。そのメンバーは、ランドルフ、キング、ロイ・ウィルキンズ（全米有色人種地位向上協会）、ジェームズ・ファーマー（人種平等会議）、ジョン・ルイス（学生非暴力調整委員会）、およびホイットニー・ヤング・ジュニア（都市同盟）であった。彼らは、行進を1963年８月28日に行うことを決め、その大集会の場所としてワシントンＤＣのリンカーン記念堂を選んだ。

この「雇用と自由のためのワシントン大行進」は、米国史上最も大規模な政治デモ行進となった。全米各地から参加者が貸し切りのバスや列車でワシントンに向かった。当日集まった米国民は25万人（それ以上という説もある）、そのうち少なくとも５万人は白人であった。演壇には、公民権運動の英雄として知られる人々、キリスト教およびユダヤ教の宗教指導者、労働組合のリーダー、芸能人らが並んでいた。1939年にワシントンのコンスティテューション・ホールで歌うことを許されず、リンカーン記念堂でコンサートを行った黒人コントラルト歌手マリアン・アンダーソンが米国の国家を歌った。ビッグ・シックスのメンバーがそれぞれ演説をしたが、ファーマーだけは、ルイジアナ州での抗議活動で逮捕されていたため参加できなかった。

この日、最も人々の記憶に残る場面となったのはキングの演説であった。キングの「わたしには夢がある」という演説は、聖書のテーマ、そして合衆国憲法、独立宣言、リンカーンのゲティスバーグ演説など米国を象徴する文章の理念を織り込んだものであり、米国人による演説としては最も優れたものであるとする評価が多い。この演説は、キングがいつも日曜日の朝の礼拝で行ってきた説教の形式とスタイルを採り入れたものであった。

キングはまず、公民権運動を、まだ実現されていない過去の約束に結び付けることから語り始めた。リンカーンの奴隷解放宣言は、自由になった奴隷たちにとっては、「捕らわれの身にあった彼らの長い夜に終止符を打つ、喜びに満ちた夜明け」であると思われた、とキングは語った。しかし、それから100年の後、「黒人は、（中略）自分自身の土地にいながら、島流しになっている」 米国の建国者たちが独立宣言と合衆国憲法を書き記したとき、「彼らは、あらゆる米国民が継承することになる約束手形に署名したのである。この手形は、すべての人々は、白人と同じく黒人も、『生命、自由、そして幸福の追求』という『不可侵の権利』を保証される、という約束だった」

キングは、米国が、少なくとも有色の米国民に対してはこの約束手形を不渡りにしている、と述べた。

われわれは、正義の銀行が破産しているなどと思いたくない。この国の可能性を納めた大きな金庫が資金不足であるなどと信

ワシントン大行進を企画するためにニューヨークに集まった「ビッグ・シックス」と呼ばれる６人の有力者。左から、ジョン・ルイス、ホイットニー・ヤング、Ａ・フィリップ・ランドルフ、マーティン・ルーサー・キング・ジュニア、ジェームズ・ファーマー、ロイ・ウィルキンズ

じたくない。だからわれわれは、この小切手を換金するために来ているのである。われわれの要求に応えて、自由という財産と正義という安全を受け取ることができるこの小切手を換金するために、ここにやってきたのだ。

キングは、「黒人に公民権が与えられるまでは、米国には安息も平穏も訪れることはない」と警告したが、同時に次のようにも語った。

正当な居場所を確保する過程で、われわれは不正な行為を犯すことがあってはならない。われわれは、敵意と憎悪の杯から飲むことによって、自由への渇きを癒やそうとしないようにしよう。われわれは、絶えず尊厳と規律の高い次元での闘争を展開していかなければならない。われわれの創造的な抗議を、肉体的暴力へ堕落させてはならない。

キングの演説の「夢」に関する部分は、即興的なものだったという説もある。キングが演説しているときに、有名なゴスペルシンガーのマヘリア・ジャクソンも舞台におり、演説の途中でキングに「マーティン、夢のことをみんなに話しなさい」と言った。そして彼は夢について語り始めたのである。

（前略）われわれは今日も明日も困難に直面するが、それでもわたしには夢がある。それは、アメリカン・ドリームに深く根ざした夢である。

わたしには夢がある。それは、いつの日か、この国が立ち上がり、「すべての人間は平等に作られているということは、自明の真実であると考える」というこの国の信条を、真の意味で実現させるという夢である。

わたしには夢がある。それは、いつの日か、ジョージア州の赤土の丘で、かつての奴隷の息子たちとかつての奴隷所有者の息子たちが、兄弟として同じテーブルに着くという夢である。

わたしには夢がある。それは、いつの日か、不正と抑圧の炎熱で焼けつかんばかりの砂漠の州、ミシシッピでさえ、自由と正義のオアシスに変身するという夢である。

わたしには夢がある。それは、いつの日か、わたしの４人の幼い子どもたちが、肌の色によってではなく、その人格の中身によって評価される国に住むという夢である。

今日、わたしには夢がある。

その日のワシントンにおける映像や言葉が全米を、そして世界を駆け巡るに従い、真の変革への勢いが加速された。しかし、まだ多くの闘いが必要であり、勝利は、かつてないほど近付いてはいたものの、まだ遠くにあった。

「わたしには夢がある」 1963年、米国史上最大の政治デモ集会で演説をするマーティン・ルーサー・キング。この演説は、米国人による演説としては最も優れたものとする評価が多い。

ローザ・パークス
公民権運動の母

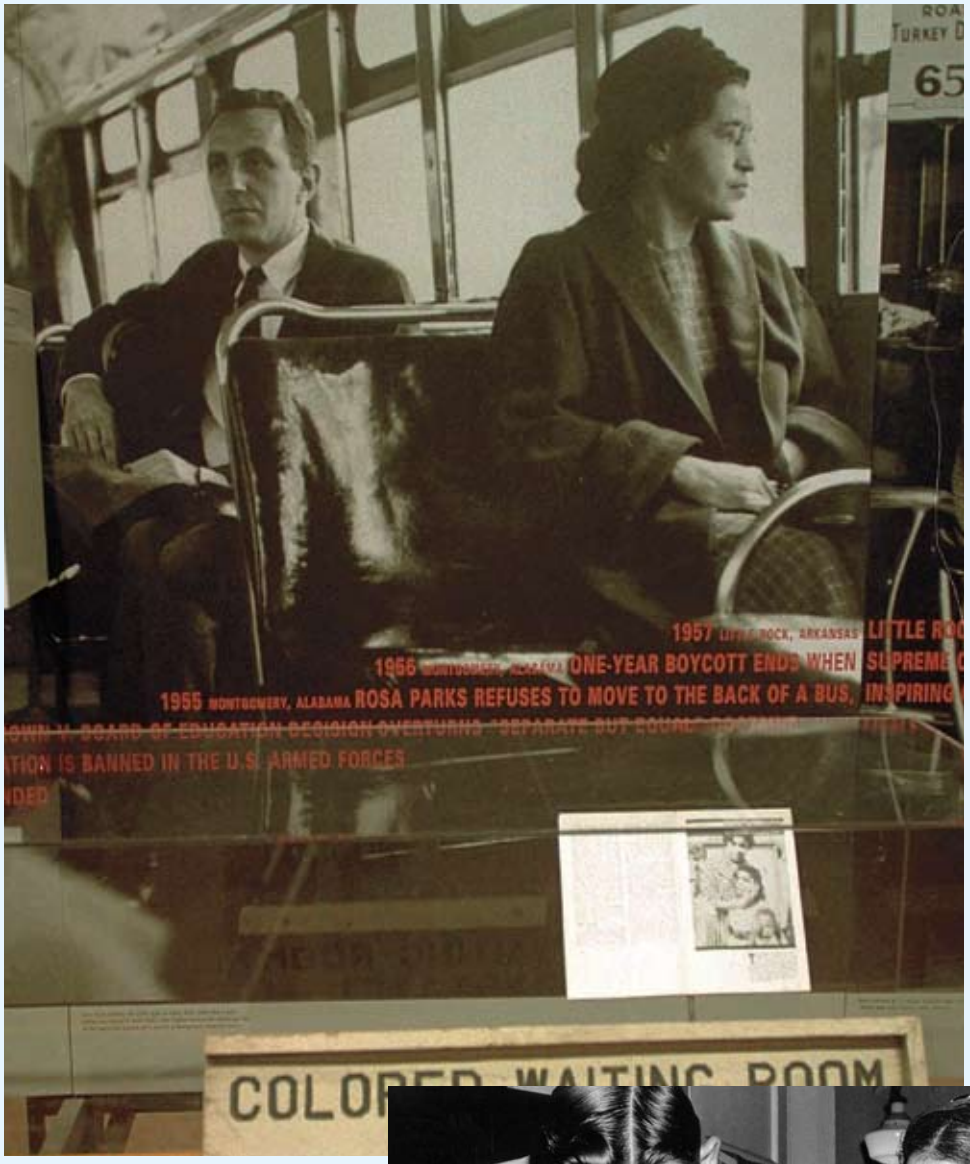
ローザ・マコーリー・パークスは、今日「公民権運動の母」として知られている。彼女がバスの座席を譲ることを拒否したことからアラバマ州モントゴメリーでバス・ボイコット運動が始まり、これが公民権運動の転換点となったからである。裁縫師として働いていたパークスは、1955年12月1日の午後、仕事帰りのバスに乗ったとき、歴史を変えるというつもりはなかった。1日の仕事に疲れ、ただ家へ帰りたかっただけであった。しかし、バスの運転手に、前部座席を白人男性に譲って後部座席へ移るように言われたとき、パークスはどうしても譲る気にはなれなかった。

後に彼女は、「逮捕されようと思ってバスに乗ったわけではなく、家に帰ろうとしていただけなのです」と語っている。

その時点でパークスは、自分の行動がきっかけとなって381日間に及ぶバス・ボイコットが始まるとは思っていなかったが、ひとつだけ確信していることがあった。彼女自身のバス・ボイコットがその日に始まった。

「わたしはそのとき、人種隔離されたバスには2度と乗るまい、と決心しました」

黒人社会で広く尊敬されていた女性ローザ・パークスの逮捕と短期間の拘置、そしてそれによって発生したバス・ボイコット運動は、市バス



上　市バスの人種隔離を違憲とする連邦最高裁判所の判決が下された後、アラバマ州モントゴメリーのバスの前部座席に座るローザ・パークス。1955年12月にパークスが前部座席を白人男性に譲ることを拒否したことから、モントゴメリー・バス・ボイコット運動が始まり、これによってマーティン・ルーサー・キング・ジュニアが公民権活動家として一躍有名になった。

右　逮捕され指紋を取られるローザ・パークス

の人種隔離を違憲とする連邦最高裁判所の判決につながった。またこのボイコット運動は、それまでほとんど無名だったマーティン・ルーサー・キング・ジュニアという若い牧師を、全国的な著名人に押し上げた。キングのリーダーシップの下で、このボイコットは、地域社会を基盤とする非暴力的な抗議活動の模範となり、後にこれが公民権運動の戦略として成功した。

情熱を内に秘めた活動家としてのローザ・パークスを形成したいくつかの要素を、その生い立ちに見ることができる。ローザ・ルイーズ・マコーリーは、1913年2月4日、アラバマ州タスキギーで生まれた。子ども時代のローザの生活は、おじが牧師を務めていた小さな教会を中心としていた。彼女はその教会で深い信仰と人種的な誇りを身に付けた。後に、アフリカン・メソディスト監督教会が何世代にもわたって黒人の平等を強く推進してきたことを、誇りを持って語っている。

ローザは、祖父母からも強い影響を受け、特に祖父の影響は大きかった。人種差別主義の暴力的な秘密結社クー・クラックス・クラン（ＫＫＫ）を恐れる家族の不安に応えて、祖父は常に弾を込めた2連式散弾銃を手元に置いていた。クランによる暴力の可能性は極めて現実的なものであったが、パークス一家がそれを体験することはなかった。しかし、ローザの祖父の挑戦的な姿勢は、彼女の考え方を形成するひとつの要素となった。

11歳になったローザは、モントゴメリーの女学校に送られた。この学校の生徒は全員黒人、教師は全員白人であった。ここで彼女は「わたしたちが人生に望むことは何でも実現できると信じること」を学んだ。またこの学校の教師から、白人が皆偏見を持っているわけではないことも学んだ。

ローザはこの学校でジョニー・カーと知り合い、２人の少女は生涯の友人となった。カーは、子ども時代のパークスについて次のように語っている。「わたしはにぎやかによくしゃべる子どもでしたが、彼女はとてもおとなしく、問題に巻き込まれることは決してありませんでした。しかし、何をするにも全力で打ち込む人でした。それでも、とにかくおとなしい人なので、彼女が逮捕されるなどということは誰にも想像できませんでした」

ローザは教師になりたかったが、病気の母親の看病をするために学校を辞めなければならなかった（後に高校の卒業証書を授与された）。18歳のときに理容師のレイモンド・パークスと恋に落ち、２人は後に結婚した。第２次世界大戦中の一時期、ローザはモントゴメリーのマックスウェル基地（現在のマックスウェル空軍基地）で働いていたが、当時この施設はすでに人種隔離が廃止されていた。後に彼女は、モントゴメリーの交通機関の人種隔離に憤慨したのは、自分が使っていた人種隔離のないマックスウェル基地の交通機関と比べたためである、と述べている。

カリフォルニア州サンフランシスコのローザ・パークス小学校の落成式のプログラムを広げる84歳のローザ・パークス

1956年、バス・ボイコット運動が成功のうちに終了した後も、パークスは公民権のための活動を続け、数回にわたってキングの活動に参加した。翌年には北部のミシガン州デトロイトへ移った。ここで、ジョン・コニヤーズ下院議員の事務所で働くことになる。コニヤーズ議員は、自分よりもアシスタントのパークスと会うために事務所を訪れる訪問客の方が多い、とよく冗談を言った。

パークスは、1993年、「全米女性の殿堂」に入った。1996年にはビル・クリントン大統領によって自由勲章を授与され、1999年には議会名誉黄金勲章を受けた。また南部キリスト教指導者会議は、毎年恒例ローザ・パークス自由賞を設立した。

2005年10月24日にパークスが死去した後、連邦議会は、パークスの遺体を連邦議会議事堂の大広間に安置して彼女の栄誉を称えることを許可する決議を採択した。1852年にこの慣習が始まって以来、その栄誉を与えられたのは、パークスが31人目であり、女性としては初めて、また黒人としては２人目であった。

ローザ・パークスは、公民権運動における自分の役割については常に謙虚であり、バスの座席を譲らなかった決断は神の力によるものだったと語っていた。「変革の時機が熟していたちょうどそのときに、わたしが必要としていた力を神が与えてくださったのは幸運なことでした。わたしは、神がわたしに動かずにいる力を与えてくださったことに、毎日感謝しています」

ケネス・M・ヘア
ヘアは、アラバマ州のザ・モントゴメリー・アドバタイザー紙の社説面責任者。著書に『They Walked to Freedom 1955-1956: The Story of the Montgomery Bus Boycott』がある。

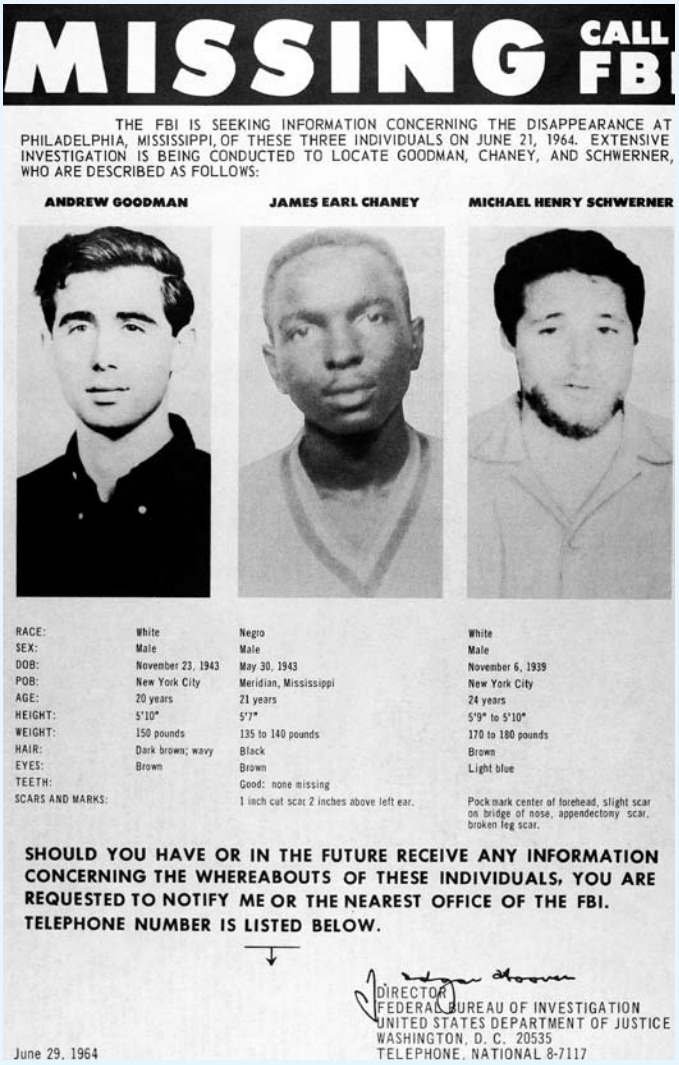
公民権運動の活動家たち
ミシシッピに死す

1964年6月21日、ミシシッピ州フィラデルフィアで、公民権運動の活動家ジェームズ・チェーニー、アンドリュー・グッドマン、マイケル・シュワーナーの3人が、地元警察とクー・クラックス・クラン（KKK）の陰謀により殺害された事件は、公民権運動における極めて重要な出来事のひとつであった。行方不明となったこの3人の若者のうち2人が白人であったこと、そしてほとんどひと夏中3人の行方が分からず捜査が暗礁に乗り上げたことから、この事件は全米の注目するところとなり、連邦捜査局（FBI）の捜査官と世界各地の報道陣がこの小さな町に集まった。

従来、ミシシッピ州は保守的な州で、人口の過半数を占める黒人に対して、白人が大きな支配力を振るっていた。そうした状況で、同州では長い年月にわたって、部外者や「南部の生活様式」（すなわち人種隔離制度と、黒人のさまざまな基本的権利の否定）を脅かす者に対して、強い不信の目が向けられてきた。1961年にはすでに、公民権運動の活動家たちがミシシッピ州を投票権拡大運動の標的としていた。同州の抑圧的な環境の下で、ごく少数の黒人しか投票を許されていなかったからである。しかし、有権者登録を推進するボランティアが殴打されたり逮捕されたりすることも多く、作業は容易ではなかった。

公民権運動の活動家たちは、米国の他地域に住む人々はこうした状況を理解していないのではないかと懸念し、ミシシッピ州に焦点を絞ったミシシッピ・サマー・プロジェクト（後にフリーダム・サマーと呼ばれる）を企画した。このプロジェクトでは、北部の大学生1000人（主として白人）が、大挙してミシシッピ州を訪れて有権者登録に協力し、こうした行動を取ることによってミシシッピ州の状況を広く知らしめることを目指した。このような「侵略」に対して、地元の抵抗が強まった。州の指導者たちは敵意をあらわにして抵抗を誓い、暴力と威嚇によって南部の人種的慣習を維持した歴史を持つ白人自警団KKKが再び活気づいた。

フリーダム・サマーの初日となった6月21日、3人の公民権運動活動家は、KKKによる最近の襲撃事件を調査するために、辺ぴな黒人部落ロングデールへ車で出掛けた。チェーニーは地元ミシシッピ州の21歳の黒人、グッドマンはニューヨーク州の20歳の大学生、そしてシュワーナーはニューヨークのロワー・イーストサイドに住む24歳のソーシャルワーカーで、すでに活動家としてはベテランであった。彼らはそれ以前にも、黒人に有権者登録の方法を教える講座を開こうとして、現地を訪れたことがあった。


MISSING CALL FBI

THE FBI IS SEEKING INFORMATION CONCERNING THE DISAPPEARANCE AT PHILADELPHIA, MISSISSIPPI, OF THESE THREE INDIVIDUALS ON JUNE 21, 1964. EXTENSIVE INVESTIGATION IS BEING CONDUCTED TO LOCATE GOODMAN, CHANEY, AND SCHWERNER, WHO ARE DESCRIBED AS FOLLOWS:

	ANDREW GOODMAN	JAMES EARL CHANEY	MICHAEL HENRY SCHWERNER
RACE:	White	Negro	White
SEX:	Male	Male	Male
DOB:	November 23, 1943	May 30, 1943	November 6, 1939
POB:	New York City	Meridian, Mississippi	New York City
AGE:	20 years	21 years	24 years
HEIGHT:	5'10"	5'7"	5'9" to 5'10"
WEIGHT:	150 pounds	135 to 140 pounds	170 to 180 pounds
HAIR:	Dark brown; wavy	Black	Brown
EYES:	Brown	Brown	Light blue
TEETH:		Good: none missing	
SCARS AND MARKS:		1 inch cut scar 2 inches above left ear.	Pock mark center of forehead, slight scar on bridge of nose, appendectomy scar, broken leg scar.

SHOULD YOU HAVE OR IN THE FUTURE RECEIVE ANY INFORMATION CONCERNING THE WHEREABOUTS OF THESE INDIVIDUALS, YOU ARE REQUESTED TO NOTIFY ME OR THE NEAREST OFFICE OF THE FBI. TELEPHONE NUMBER IS LISTED BELOW.

DIRECTOR
FEDERAL BUREAU OF INVESTIGATION
UNITED STATES DEPARTMENT OF JUSTICE
WASHINGTON, D. C. 20535
TELEPHONE, NATIONAL 8-7117

June 29, 1964

ミシシッピ州で、FBIによる44日間に及ぶ捜索の末、公民権運動活動家アンドリュー・グッドマン、ジェームズ・アーリー・チェーニー、およびマイケル・ヘンリー・シュワーナーの他殺体が発見された。

3人の若者は現地の担当者と会い、KKKが放火した教会の焼け跡を見学した後、ロングデールの西にある郡庁所在地フィラデルフィアへ向かった。その途上、シーセル・レイ・プライス副保安官にスピード違反で逮捕され、ネショバ郡の留置場へ連行された。彼らは当然、地元警察を信用してはいなかったが、抵抗はしなかった。公民権運動の活動家が皆そうであったように、人種の平等という目標を達成するための非暴力と非抵抗の力を信じていたからである。プライスがKKKの陰謀の片棒をかつぎ、暴徒の群れを集めるまでの時間稼ぎに3人を留置場に入れたことなど知る由もなかった。

グッドマン、チェーニー、シュワーナーの３人が殺害されてから41年後の2005年に、エドガー・レイ・キリンが殺人罪で有罪となった。

その晩、プライス副保安官は３人の若者を釈放した。彼らは直ちに車に戻り、活動の本拠としていたメリディアンへ向かった。南へ30分ほど走ればメリディアンに到着するはずであった。しかし、暗い田舎の道路を走る彼らの車の後を、ＫＫＫの一団が車を連ねて追跡していた。その中にはプライス副保安官もいた。ＫＫＫは、若者たちの車を近くの人目に付かない場所に追い込み、そこで彼らを車から引きずり出して射殺し、近くの酪農場に建設中だった土堰堤に遺体を埋めた。

行方不明となった３人を探すためにリンドン・ジョンソン大統領がＦＢＩ捜査官を派遣し、44日間にわたって州内で徹底的な捜索が行われた。ひと夏中３人の行方をめぐる謎が世界中に報道されたが、ミシシッピ州の関係当局は、この事件はねつ造であると主張して捜査を始めることすら拒否した。８月４日、ＦＢＩがようやく３人の遺体を発見すると、このような凶悪な犯罪に責任を負うべき者たちの逮捕・処罰を要求する世論が全国的に高まった。

通常、米国の司法制度では、殺人は犯罪の行われた州の裁判所で州法に基づいて起訴される。ミシシッピ州が殺人罪による起訴を拒否したため、連邦政府は代替策を講じた。1940年代から、連邦政府は、再建時代の古い公民権法によって、南部でリンチを行った暴徒を起訴しようとしてきたが、こうした試みが成功したことはなかった。しかし司法省は、もう一度この方法を試みる決断を下した。1964年12月初め、ＦＢＩは、地元のＫＫＫ団員、ネショバ郡保安官および副保安官を含む警察官数人など計21人の男性を逮捕し、３人の活動家の公民権を侵害する共同謀議の疑いで告発した。検察官は、連邦最高裁判所で公民権法を明確にし、この事件に同法を適用する正当性を立証しなければならなかった。しかし1967年に、ミシシッピ州民から成る連邦陪審団が７人の被告を有罪とする画期的な判決を下し、連邦裁判所が最高10年の懲役刑を科した。

チェーニー、グッドマン、およびシュワーナーの殺人事件は、「ミシシッピ砦」の強固な抵抗に打ち勝つための転換点となった。公民権運動活動家の間では、白人が殺されたから全米がようやくミシシッピ州の状況に注目するようになったのだという不満もあったが、全国からの力強い反響が、特に悪質な同州の人種差別の打倒に貢献した。今日ミシシッピ州では、大勢の黒人が投票し、黒人が州議会や連邦議会の議員に選出されている。1964年以降の数十年間に、多くのミシシッピ州民は、公民権運動時代の同州の行為を恥じるようになり、州がこの事件への対処を誤ったことを認めるよう要求する意見も出てきた。2005年６月21日、３人の若者が消息を絶ってからちょうど41年目に、この陰謀を企てたＫＫＫ団員で長らく責任を逃れてきたエドガー・レイ・キリンが、ミシシッピ州裁判所で過失致死罪で有罪の判決を受けた。あらゆる人種・民族の米国民が、これを正義の象徴的な勝利と見なし、長年にわたって米国の記憶につきまとってきた犯罪が少なくとも部分的に解決されたものとして歓迎した。

フィリップ・ドレー

ドレーの著作には、『Capitol Men - The Epic Story of Reconstruction Through the Lives of the First Black Congressmen』、またセス・ケーギンと共著の『We Are Not Afraid - The Story of Goodman, Schwerner, and Chaney and the Civil Rights Campaign for Mississippi』がある。

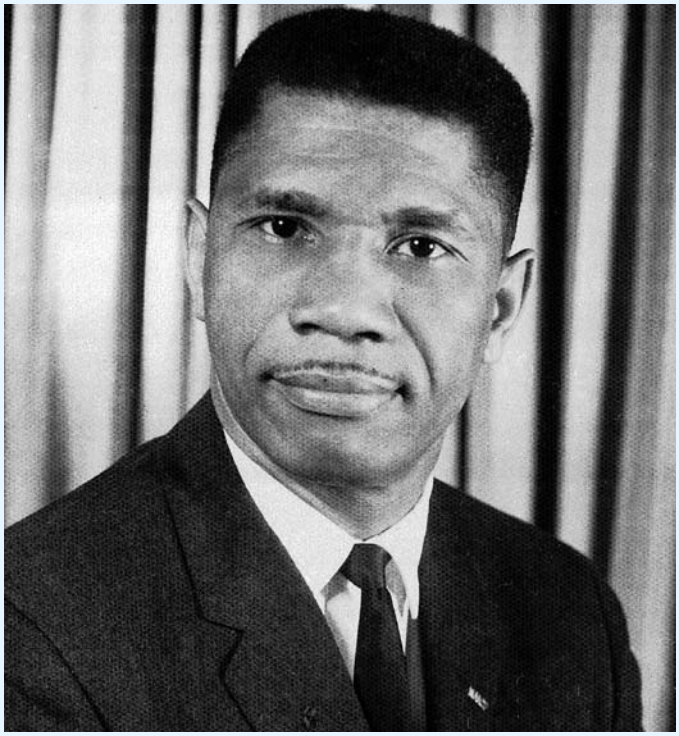
メドガー・エバーズ
ミシシッピ運動の殉教者

全米有色人種地位向上協会（NAACP）のミシシッピ州支部代表メドガー・エバーズは、精力的な活動家であったが、その生涯は1963年の暗殺によって断ち切られた。37歳のリーダーの死は、公民権運動にとっては不幸な打撃となったが、これによってその後の抗議運動に火がつき、彼の唱えた理念に対して連邦政府の同情的関心を引き付けることになった。

1925年ミシシッピ州の田舎町で生まれたエバーズは、第２次世界大戦中、ヨーロッパで米国陸軍兵士として従軍した。帰国後、アルコーン大学（ミシシッピ州ローマン近郊にある歴史的黒人大学）に入学し、学業にもスポーツにも秀でた。この大学で、将来の妻となるマーリーと知り合い、２人は1951年に結婚した。

エバーズは、ミシシッピ・デルタ地帯で保険会社と診療所を設立した黒人医師でビジネスマンでもあったＴ・Ｒ・Ｍ・ハワードの弟子となった。ハワードは、「トップダウン」方式で活動する公民権組織、ミシシッピ黒人指導者地区協議会(RCNL)も設立し、アフリカ系米国人の有力な各分野の専門家や牧師たちが、より広く黒人たちの間に自立と事業所有、そして最終的には公民権の要求を広めるよう促した。

エバーズは自らが海外で自由のために戦った経験から、その自由を米国内で確立したいと決意していた。間もなく、ミシシッピRCNLで最も影響力のある活動家の一人として頭角を現してく。師匠であるハワードと同様に、エバーズも公民権運動をビジネスと結び付け、ハワードのマグノリア生命保険会社の保険外交員として働きながら、NAACPの地方支部を次々と組織し、黒人にトイレを使わせないガソリンスタンドのボイコット運動を先導した。（「トイレを使えないガソリンスタンドは使うな」という自動車バンパー用のシールがあった）


1963年当時のメドガー・エバーズ。同年、暗殺された。

1954年、エバーズは白人ばかりのミシシッピ大学（「オール・ミス」の呼称で知られる）法科大学院への入学を出願することで、人種隔離主義体制への挑戦を試みた。エバーズの出願は拒否されたが、ここでの彼の行動力がNAACPの「法廷弁護基金」の賞賛を浴び、ほどなく、NAACPの初代ミシシッピ支部代表に任命された。しかしこれは危険で孤独な仕事であった。

「奇妙に聞こえるかもしれませんが、わたしは南部を愛しています」とエバーズは語ったことがある。「南部以外の場所に住もうとは思いません。ここには家畜を飼う土地があり、いずれわたしもそのような生活をするでしょう。ここには釣り糸を垂れスズキと格闘することのできる湖があります。わたしの子どもたちが遊び、成長し、よき市民となる場所があります。ただし、白人がそれを許せば、の話ですが」

しかし、当時においては、白人の協力を得られる可能性は極めて低いと思われた。この時期、現代米国でも有数の悪名高いリンチ事件が２件ミシシッピ州で発生した。1955年に起きた14歳の少年エメット・ティル殺害事件と、1959年のポプラービルにおけるマック・チャールズ・パーカーのリンチ事件である。エバーズは、全米でも大きな注目を浴びていたティル殺害事件の捜査に協力した。被告の罪については強力な証拠があったにもかかわらず、全員白人男性で占める陪審団は、わずか67分で無罪判決を下した。陪審員の一人は後に、陪審団は審議を１時間以上に引き延ばして「体裁を保つ」ために、「ソーダ休憩」を取ったと明かしている。（2004年５月、司法省はこの1955年の犯罪訴追手続きを「極めて重大な誤審」として殺人の再審議を行った。しかし、証人となり得る人物の多くはすでに死亡し、証拠も散逸していたため、大陪審は生き残った最後の容疑者の起訴を却下した）

1954年の「ブラウン対教育委員会」訴訟において最高裁判所が下した判決と全国の公立学校における人種隔離政策撤廃の命令に対して、ミシシッピ州は、激しく反発した。市民協議会と呼ばれる州内の白人グループは、いかなる犠牲を払っても人種差別撤廃に抵抗することを断言した。ミシシッピ大学への入学を拒否

夫メドガー・エバーズが殺害された後、ハワード大学の集会で演説するマーリー・エバーズ。マーリーはその後、公民権活動家として広く知られるようになり、後にNAACPの議長を務めた。

された経験を持つエバーズは、同校に入学しようとする他の黒人を支援した。1962年、空軍の退役軍人ジェームズ・メレディスが、米国連邦最高裁判所ヒューゴ・ブラック判事の直接命令によってミシシッピ大学への入学を許可された。しかし州当局はこの命令に抵抗し、メレディスは、死者２人、負傷者数百人を出した夜間の暴動の後、ようやく授業を受けることができたのである。

メレディスを支援したエバーズに対して、人種隔離主義者は憎悪を募らせていたが、エバーズはミシシッピ最大の都市であるジャクソンで、一連のボイコット、座り込み、抗議活動を始めた。エバーズのこうした活動の強化に対しては、時としてNAACPですら懸念するほどであった。1963年にアラバマ州バーミングハムで、マーティン・ルーサー・キング・ジュニアが率いた公民権運動が世間の注目を浴びると、エバーズもジャクソンでの活動をさらに拡大して、黒人警官の採用、異人種間委員会の設置、ダウンタウンのランチカウンターの差別撤廃、ダウンタウンの商店の白人店員による黒人客に対する敬称（ミスター、ミセス、ミス）使用を求めた。

町の反応は険悪だった。近郊のミシシッピ州催事場には、何千人もの抗議者を留置できるような、柵で囲んだ収容施設がいくつも建設された。これは、抗議活動に加わろうとしていた人々に対する単刀直入なメッセージであった。エバーズと彼の支持者はこうした妨害にひるむことなく闘いを続けた。多くの子どもたちを含む地域の黒人たちは、その後も引き続き集会や店のボイコット、行進、ピケラインに参加していった。これらの集団示威活動は、エバーズの長年にわたる公民権運動の頂点であった。そして最大の見せ場は、エバーズが地元テレビ放送で活動の目的を説明したときに訪れた。白人にとって、黒人がテレビに出演し、しかも自分の意見を自分の言葉で語るのを見ることは珍しく、これを見た多くの白人は激しい憤りを覚えた。

ほどなく、エバーズの命が狙われる出来事が何度か起きた。自宅の車庫に爆弾が投げ込まれたり、自動車にひかれそうになったこともあった。そして、1963年6月12日の夜、エバーズは帰宅して車から降りたところを待ち伏せていた者に撃たれ、自宅の玄関前で息を引き取った。

人気の高かったリーダーの殺害は黒人社会を怒りの渦に巻き込んだ。数日間にわたり、ジャクソンのダウンタウンで、警官との衝突が多発した。市の指導層の白人たちですら、扇動家とはいえ少なくとも馴染みのあったエバーズの死に衝撃を受けた。公民権運動のリーダーたちが米国中から追悼のために駆け付ける中、市の有力者たちは、エバーズの功績をたたえて沈黙の行進を行うことを許す異例の譲歩を示した。エバーズは、軍葬の礼をもってワシントンＤＣのアーリントン国立墓地に埋葬された。メドガーの兄であるチャールズがジャクソンでの活動でメドガーが果たしていた仕事の一部を引き継ぎ、妻のマーリーは後に著名な活動家となり、1995年から1998年までNAACPの議長を務めた。

公民権運動の時代には挫折感を引き起こす訴訟事件が多かったが、その最たる訴訟のひとつとメドガー・エバーズの名前が結び付くのが、彼の運命であった。彼を殺害した白人優位主義者バイロン・デ・ラ・ベックウィズは、ミシシッピ州の旧家の子孫で、1960年代に２度にわたって裁判にかけられたが、いずれも白人陪審員によって無罪の判決が下された。ベックウィズが有罪となり終身刑の判決を受けたのは1994年のことであり、エバーズがミシシッピ州の同胞を率いて偏見と不寛容に反対する改革運動を進めてから丸30年がたっていた。ベックウィズは服役中の2001年に死亡した。

死後のこととはいえ、エバーズは最終的に勝利を収めた。彼が殺害された年には、ミシシッピ州の黒人で有権者登録を完了できたのはわずか２万8000人だった。1971年にはこの人数は25万人を超え、1982年には50万人に達した。2006年には、ミシシッピ州は全米で最も多くの黒人公職者を選出する州となり、同州の連邦下院議員の４分の１、州議会議員の27％を黒が占めるまでになった。

フィリップ・ドレー
ドレーの著作には、『Capitol Men - The Epic Story of Reconstruction Through the Lives of the First Black Congressmen』、またセス・ケーギンと共著の『We Are Not Afraid - The Story of Goodman, Schwerner, and Chaney and the Civil Rights Campaign for Mississippi』がある。

— 6 —

「このままではいけない」

法的平等の確立

マーティン・ルーサー・キング・ジュニアらが指導した公民権運動は、他に類のない重要性を持つ2つの新しい法律の制定にとって、必要欠くべからざる促進剤だった。1964年公民権法と1965年投票権法によって、アフリカ系米国人の法的平等がようやく確立された。これらの法律が制定された背景には、予想外の状況により、強力に公民権を支持する南部出身の大統領が誕生して過去に公民権法を退けてきた勢力の克服に貢献したことなど、米国の政治の構造的な変化もあった。しかし何よりもこれらの法律を推進したのは、変革を求める政治的支持者の増大であり、南部における人種隔離主義者の行動に大きな衝撃を受けた大勢の米国民であった。

政治的な変化

南北戦争後の再建時代において米国南部の黒人に公民権を保証しようとする試みが失敗して以来、2つの大きな要素が、ジム・クロウ制度の廃止を目指す国家レベルの活動を阻んできた。それは米国の政党制度と連邦議会の規則である。1846～1848年のメキシコ戦争で、奴隷州となり得る広大な準州（カリフォルニアおよび今日の米国南西部の大半を含む地域）を獲得した当時、米国の各政党は、ますます地域的特徴を明確に公式化するようになっていた。すなわち、民主党が米国南

上　1965年、アラバマ州セルマで行われた有権者登録集会で演説をするホゼア・ウィリアムズ師

下　投票権法が制定され、アラバマ州で有権者として登録をするために行列に並ぶアフリカ系米国人の州民（1966年）

部を支持して奴隷制度の拡張を推進したのに対し、ホイッグ党（後の共和党）は米国北部を支持し、新たに獲得した準州に奴隷制を拡大することに反対しただけでなく、しばしば奴隷制の完全廃止も時間の問題であると考えた。一方この時代のホイッグ党（共和党）員は、経済開発を推進するために連邦政府の力を積極的に使いたいと考えた。南部人と民主党員は、連邦政府の奴隷制度に反対する措置を恐れ、連邦政府の力を憲法で具体的に定められた範囲のみに制限し、個々の州の力を優先させることを支持した。こうした「州の権限」という概念は、米国の歴史に深く根を下ろしている。しかし19世紀初めに、この概念は奴隷制や人種隔離、公民権といった問題と複雑に絡まるようになった。

この傾向は南北戦争後も続いた。これまでに述べてきたように、南北戦争後の共和党急進派は、アフリカ系米国人の権利を確保するための再建政策を強く求めた。再建時代以降も、黒人の大半は「リンカーンの政党（共和党）」を支持した。一方民主党は、南部の人種隔離主義者と北部の移民や工場労働者を中心とする都市居住者の同盟へと発展していった。20世紀には、北部の民主党支部が政治的に徐々に進歩主義となり、フランクリン・D・ルーズベルト大統領のニューディール経済政策とともに、より幅広い連邦政府の力を容認するようになった。北部のリベラルな民主党員は往々にして南部の人種差別に反感を抱いたが、民主党が「堅固な南部」の支持なしに全国的に戦うことはできなかった。

公民権法を阻んでいたもうひとつの大きな障害は、連邦議会上院の規則であった。法案を可決するには単純多数に達しさえすれば可能であったが、上院議員はたった一人でも、本会議の議場で発言をやめることを拒否して発言権を独占すれば、投票を阻止することができた（このような議事工作は「フィリバスター（議事進行妨害）」と呼ばれる）。その場合、上院の３分の２以上の賛成があれば「討論終結」の規定を適用することができた。すなわたち、実際問題としては重要な法案が上院で可決されるためには、上院議員の３分の２以上の支持がなければならないということである。従って、黒人が投票権を奪われていた南部諸州の議員たちは公民権法案を阻止することが可能であり、それを実行した。

長年にわたって、反公民権フィリバスターとして知られるようになった上院の長時間演説によって、多くの法案が阻止された。1946年には、職場での差別を禁止する法案が、過半数の支持を得ていたにもかかわらず、何週間にも及ぶフィリバスターによって挫折した。1957年には、ストロム・サーモンド上院議員（当時はサウスカロライナ州選出の民主党議員）が、穏健な内容の1957年公民権法に対して24時間18分にわたって発言を続けたが、法案を阻止するには至らなかった。

しかし徐々にではあるが、政治的勢力図が、公民権運動を推進する方向へと変わりつつあった。少なくとも北部においては、黒人票が重要性を増していた。米国ではほとんどの時代において、アフリカ系米国人の大半が南部に住んでいた。しかし、20世紀前半に、多くのアフリカ系米国人が南部からシカゴをはじめとする北部諸都市へ移住し始めた。この「大移動」によって、およそ600万人の黒人が北部へ移住したと推定されている。北部に人種差別がなかったわけではないが、北部では黒人も投票することができたので、野心的な政治家にとって黒人票はますます有力なターゲットとなった。

1960年の大統領選で民主党の候補となったジョン・F・ケネディ上院議員は、歴史的に共和党支持層であったアフリカ系米国人の票を取り込もうと決心した。ジョージア州アトランタでの座り込み運動でマーティン・ルーサー・キング・ジュニアが逮捕されると、ケネディはキングの妻コレッタ・スコット・キングに電話をして同情の意を伝え、その間にケネディの弟で後に司法長官となるロバート・F・ケネディがキングを釈放させる運動を進めた。保釈されたキングは、「ケネディ上院議員とその家族には感謝すべき多大な恩義がある」と語った。接戦となった大統領選で、ケネディはアフリカ系米国人票の推定70％を獲得し、一般投票では１％未満の差で、共和党候補リチャード・M・ニクソン副大統領を破った。

公民権に関するケネディ政権の実績については歴史家の間でも意見が分かれるが、20世紀におけるそれまでの政権よりましではあるものの公民権運動家たちが期待したほど強力なものではなかった、と述べても公正さを欠くことにはならない。ジョンとロバートのケネディ兄弟は、あまり強硬な路線を取らないようキングに何度も要請した。しかし、それでもキングが前進すれば、ほとんどの場合ケネディ兄弟もそれに従った。

前述のように、バーミングハムでの出来事の後、ケネディ大統領は幅広い公民権法案を提出した。1963年11月にケネディが暗殺されると、この法案の責任は、ケネディの副大統領で後継として大統領に就任したリンドン・ジョンソンに引き継がれた。

リンドン・ベインズ・ジョンソン

新たに大統領となったジョンソンには、極めて役に立つ資質が２つあった。それは、非常に力強い個性を備えていたことと、連邦議会の議会運営と議員たちについておそらく米国史上類のないほど精通していたことである。伝記作家のロバート・ダレクによると、ジョンソンは1954年から1960年まで、「上院史上最も有能な多数党院内総務」として活躍した。複雑で難解な部分の多い上院の規則や伝統を熟知していたことに加えて、極めて人を説得する力に長けていた。ジョンソンの副大統領だったヒューバート・ハンフリーは、「彼は津波のような勢いで襲ってきた。壁を破り、（中略）部屋中を席巻した」と語っている。ジョンソンの下でホワイトハウス特別研究員を務めた歴史家のドリス・カーンズ・グッドウィンによると、ジョンソンには、反対の立場を取る上院議員から必要な１票を全力を集中してむしり取る能力があった。グッドゥインはそれをジョンソンによる「特別な接待」と呼んだ。キングの伝記の著者マーシャル・フレーディは、それについて次のように述べている。

（前略）その猛烈な説得は、徐々に身体的圧迫へと進んでいき、

相手を圧倒した。まず、大きな腕を相手の肩に回し、もう一方の手で相手の背広の襟をつかみ、曲がったネクタイを直し、さらに相手の胸を押し、こぶしで突き、人さし指をシャツに突き立てた。そして、ジョンソンがますます顔を近付けて説得を強めていくと、相手は背を弓なりに反らせて後退しようとした。

テキサス州の貧しい家庭に生まれたジョンソンは、アフリカ系米国人やメキシコ系米国人の厳しい労働条件をよく知っていた。南部州から下院議員、そして上院議員として選出されるためには、公民権と人種平等に関する進歩的な考え方をある程度ぼかす必要があった。しかし、予想外の状況から大統領の座に就いたジョンソンは、画期的な公民権法の可決を目指して自らの政治的手腕を全面的に発揮した。

ジョンソン新大統領は、公民権法案にとって強力な障害となっていたジョージア州出身の大物反対派上院議員リチャード（ディック）・ラッセルに、次のように告げた。「わたしは、文句を言うつもりもないし、妥協もしない。ディック、わたしはこの法案をそのままの形で通過させる。そして、行く手を邪魔をするなら君をなぎ倒すつもりだ。わたしは、君のことを気に掛けているからこそ、そのことを知っていてもらいたいのだ」

1964 年公民権法

米国では、１世紀近くにわたり、多くの州が合衆国憲法修正第 14 条で明確に定められた次のような義務をまんまと免れてきた。

> いかなる州も、合衆国市民の特権または免除を制約する法律を制定し、または施行してはならない。いかなる州も、法の適正な過程によらずに、何人からもその生命、自由または財産を奪ってはならない。いかなる州も、その管轄内にある者に対し法の平等な保護を否定してはならない。

「ブラウン対教育委員会」をはじめとする数々の裁判で、サーグッド・マーシャルと全米有色人種地位向上協会 (NAACP) は、政府は、たとえ深南部の州政府でも、アフリカ系米国人に対して、あるいはいかなる人々に対しても差別をしてはならない、とする判決を勝ち取った。フリーダム・ライダーなどの公民権活動家は生命を危険にさらして闘ったが、少なくとも、法律は彼らの味方であり、彼らを襲撃する者が法に違反していることに疑問の余地はなかった。

しかし、デパートやランチカウンターのオーナーは、政府ではなかった。従って、公民権運動は、１都市ごとに、また店１軒ごとに、闘いを進めなければならなかった。ローザ・パークスがバスの後部座席に移ることを拒否するという勇敢な行動が、アラバマ州モントゴメリーの公共交通機関の人種隔離廃止につながったが、南部全体の人種隔離廃止を実現するためには、何百人あるいは何千人ものローザ・パークスやマーティン・ルーサー・キングが必要であった。

公共の場所における民間施設の差別行為を禁止する法律が必要であることは明らかであった。そのような法律は、連邦政府の権限の大きな拡大を意味した。合衆国憲法は連邦政府の権限の範囲を定めており、南北戦争後に追加された修正条項では州政府の権限が定められている。しかし、ウールワース・デパートのランチカウンターについては何も述べられていない。

最終的には、後に 1964 年公民権法と呼ばれる法案の支持者たちが、連邦議会には雇用、公共施設、およびその他の生活の側面における差別を禁止する権限があると主張し、法廷がこれを認めた。支持者たちは、連邦議会に「各州間（中略）の通商を規定する」権限を与える憲法第１条第８節を引用した。20 世紀半ばまでには、細かく検討すれば、ほぼあらゆる経済取引に何らかの形で州間の通商が関与するようになっていた。例えば、1969 年の「ダニエル対ポール」事件で、差別をしたとされる「娯楽クラブ」側が、店では州間の活動を行っていないため公民権法の適用外であると主張したが、最高裁判所はこれを退けた。最高裁判所は、このスナックバーで客に出しているハンバーガーやホットドッグにはパンが使われており、「そのパンの主な原料は他州で生産・加工されている」と判断した。

ジョンソン大統領が 1964 年公民権法案を提出したことによって、米国の歴史に残る大規模な政治論争が起きた。この法案が可決されたのは、米国民の大半がブル・コナーの目に厳しい視線を浴びせ、そこに見たものに嫌悪を感じたからである。しかし、法案の可決には、ジョンソンが強大な政治手腕を全面的に発揮することも必要であった。共和党議員の大半と北部の民主党議員がこの法案を支持することは了解されていたが、南部の民主党議員がフィリバスター作戦に出ることは必至であり、ジョンソンはこれを克服するために上院の３分の２の支持を確保しなければならなかった。

ジョンソンは、1964 年１月８日の初めての一般教書演説で、「この会期が（中略）これまでの 100 回の会期を合わせたよりも公民権に貢献した会期として知られるようにしよう」と連邦議会に促した。その後数カ月間にわたり、連邦議会はこの法案に関する集中的な調査と討議を行った。下院は、70 日間以上にわたって公聴会を開催し、およそ 275 人の証人が合計 6000 ページ近くに及ぶ証言をした。こうした過程を経て、最終的に下院は 290 対 130 でこの法案を可決した。

上院では、フィリバスターが 57 日間続き、その間上院では他の作業が事実上すべて停止した。議員の演説が続く中で（1500 ページのスピーチ原稿を持参した議員もいた）、ジョンソン大統領は多くの上院議員に対して「特別な接待」を実行し、さまざまな労働・宗教・公民権団体が、討論終結と最終投票を求めてロビー活動を行った。1964 年６月 10 日、上院はようやく討論終結の投票を行い、71 対 29 で可決した。これは、公民権問題に関して討論終結の行使が成功した初めての例となった。その１週間後、上院は公民権法の上院法案を可決した。

1964 年７月２日に下院が上院の法案に同意し、これをホワイトハウスに送付した。

「このままではいけない」 連邦議会の指導者たちおよびロバート・F・ケネディ司法長官（後列、ジョンソンの真後ろ）の見守る中で 1964 年公民権法に署名をするリンドン・B・ジョンソン大統領

ジョンソン大統領は、その晩、全米に放映された演説の途中で、この法案に署名をした。そして「あらゆる人種と肌の色の米国民が、われわれの自由を守るための戦いで命を落としてきた」と国民に語り掛け、次のように続けた。

あらゆる人種と肌の色の米国民が、拡大する可能性を持つ国家の建設に努力してきた。今、この世代の米国民は、わが国の国境内における正義の果てしない追求を続けることを求められている。

われわれは、すべての人々が平等に作られていると信じている。しかしながら、平等な待遇を拒否されている米国民が大勢いる。

われわれは、すべての人々が特定の不可分の権利を持つと信じている。しかしながら、こうした権利を享受していない米国民が大勢いる。

われわれは、すべての人々が自由の恩恵を受ける権利があると信じている。しかしながら、そうした恩恵を奪われている人々が、何百万人もいる。自らの失敗のせいではなく、肌の色のせいなのである。

その理由は、歴史と伝統と人間の性質に深く根づいている。われわれは恨みや憎しみを抱くことなく、こうしたことが、みんな起きたいきさつは理解することができる。

しかし、このままではいけない。この共和国の基盤である合衆国憲法が禁じている。（中略）この法律の目的は簡明なものである。

これは、米国民が他者の権利を尊重する限り、その米国民の自由に制約を加えるものではない。

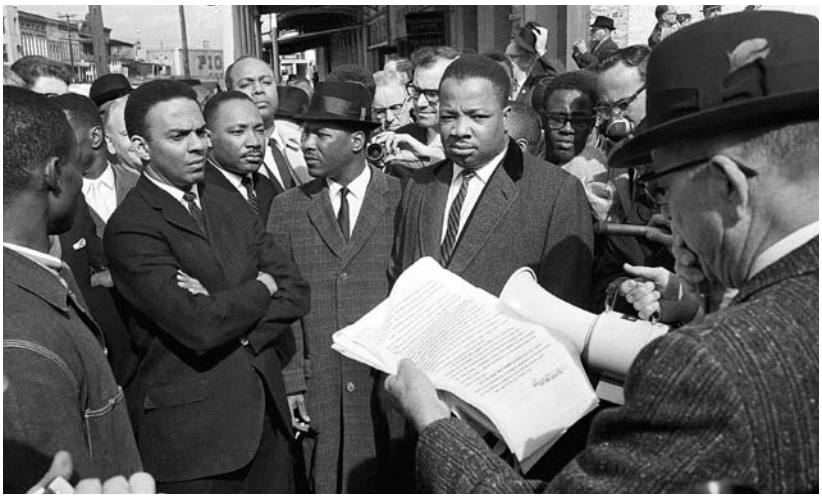
また、いかなる市民に対しても特別待遇を与えるものではない。

この法律に述べられているのは、人の幸福とその子どもたちの未来に対する希望に制約を加えるものはその人自身の能力だけである、ということである。

この法律に述べられているのは、神の前で平等な人々は、投票所、教室、工場、（中略）においても、今こそ平等な存在とする、ということである。（後略）

国民の皆さん、われわれは今、試練の時を迎えている。われわれはこれに失敗してはならない。

人種差別の毒の泉をせき止めよう。賢明で思慮深い心を得られるように祈りを捧げよう。些細な相違点を忘れて、この国



上　「We shall overcome」1965 年８月、アラバマ州セルマで、初めて有権者登録をした市民

左下　セルマからアラバマ州モントゴメリーへの行進の４日目、モントゴメリー付近に到着したデモ参加者たち。全米各地から集まった人々が行進に参加した。前列の４人は、左から、それぞれニューヨーク州（左の２人）、ミシガン州、そしてアラバマ州セルマからやってきた。

左上　1965 年３月、アラバマ州セルマで計画されていた有権者登録を求める行進に対する裁判所の禁止命令を読み上げる連邦保安官。キング師の左に腕組みをして立っているのは、後に国連大使およびジョージア州アトランタ市長となるアンドリュー・ヤング

を癒やそう。そして、われわれの無限の力と限りない精神が自由となる日が訪れるのを早めよう。

公民権法の威力

奴隷制度や人種隔離制度、法的な不平等、その結果としてもたらされる経済的不利益が２世紀にわたって続いた後に、1964 年公民権法によって、連邦政府および個々の人間は、人種差別および性差別と正面から闘うための法的権限を与えられた（同法は性別に基づく差別も禁止した）。

この権限は、「タイトル（編）」と称する広い範囲にわたるいくつかの条項に明記されている。その要点は次の通りである。

● 第１編　　有権者登録に必要な条件の不平等を廃止した。

● 第２編　　公共施設における差別を禁止した。個人が裁判所の差し止め命令（人に何かをさせる、またはさせないための裁判所の命令）による救済を求める訴訟を起こすことを認め、米国司法長官が「一般市民にとって重要」と見なした訴訟に介入する権限を同長官に与えた。

● 第３編　　「公共施設における人種隔離廃止の秩序正しい進行を実質的に促進する」訴訟に限り、権利を侵害された当事者が自ら訴訟を起こすことができない場合には、米国司法長官が訴訟を起こすことを認めた。

● 第４編　　公立学校における人種隔離廃止を強制するための訴訟を起こす権限を司法長官に与えた。この規定は、「ブラウン対教育委員会」の判決が下された後の 10 年間に人種隔離廃止の遅々とした進行を加速させることを目的としていた。

● 第６編　　この法律の諸規定の対象を、「連邦政府の資金援助を受けるあらゆる事業活動」に拡大した。これにより、連邦政府は、そのような差別を行った事業への連邦資金援助を留保する権限を与えられた。

● 第７編　　従業員 25 人を超える事業所における雇用差別を禁止した。また募集・雇用・報酬・昇進における差別に関する苦情を審査するための雇用機会均等委員会 (EEOC) を設置した。

1965 年投票権法　　その背景

裁判所の判決と公民権法は、アフリカ系米国人の公民権を

確立し、保護し、行使する上で極めて重要な手段であった。しかし、こうした権利を永続的に保証する最も確実な方法は、黒人が民主主義体制に全面的に参加して自ら主張することができるよう、彼らに政治的な権限を与えることであった。投票する権利は、当時あらゆる権利の中でも最も基本的な権利であったと言えるが、再建政策が失敗して以来、米国南部のアフリカ系米国人にはこの権利が実質的には与えられていなかった。

過去を振り返ってみると、1877年に北部の軍隊が南部から撤退した後、南部の白人エリート層は再びその政治的支配力を押し付けた。そのために最も重要なのはアフリカ系米国人による投票を抑圧することであり、それはさまざまな方法で行われた。当初は粗野な暴力が広く使われたが、その後ほかの手段もいくつか導入された。

そのひとつが「人頭税」である。これは、地域社会の構成員一人一人に平等に課される特別税であり、これを払わないと投票権がないと見なされた。1889年から1910年までの間に南部の多くの州が人頭税を採用した。アフリカ系米国人は貧困層が多かったため、大勢の黒人が選挙権を奪われた。これは貧しい白人も同様であった。合衆国憲法修正第24条（1964年）は、連邦政府の選挙においては、人頭税を払わなかった国民の投票権を拒否することを禁止した。その2年後には最高裁判所が、この規定を州および地方政府の選挙にも拡大する判決を下した。

もうひとつの手段は、有権者登録の際に「読み書きの能力」を条件とすることであった。極めて主観的な口頭および筆記試験が、ほぼ例外なく、アフリカ系米国人の登録希望者に対しては特に厳しく実施された。すでに登録されている有権者が保証人とならなければ試験さえ受けさせないという州もあった。南部ですでに有権者登録をしていた黒人は極めて少なく、また黒人の保証人となって村八分にされたり、もっとひどい目に遭う危険を冒す南部の白人はほとんどいなかったため、多くの黒人にとっては、試験を受けることはまず不可能であった。そして多くの場合、試験自体が露骨に不公平なものであった。例えば、郡の登録担当官が合衆国憲法の一節を読み上げてそれを受験者に筆記させるという試験では、白人に対してははっきりと読み上げ、黒人に対しては聞き取りにくいように口の中でつぶやく、というようなことが行われていた。

南部の選挙管理委員会は、黒人の有権者登録を拒むためにあらゆる戦術を使った。例えばアラバマ州では、登録を認めるか拒否するかの決定の過程を公開せず、下された決定に異議を唱える手段がなかった。アラバマ州のある登録委員会は、白人の登録申請者には全員登録を認めたが、黒人は一人も登録させなかった。

いかなる戦術が使われたにしても、その背後には常に暴力の脅威があった。例えば、選挙管理委員会が黒人の登録申請者の名前を地元の新聞に発表すると、地元の市民協議会やクー・クラックス・クラン支部が目をつけて、申請を取り消すようその黒人たちを「説得」する可能性があった。

こうした暴力的な威嚇を背景に、学生非暴力調整委員会（SNCC）や人種平等会議(CORE)をはじめとする活動家たちは、1961年に深南部の田舎や黒人が多く住む区域で、有権者登録運動を開始した。これは大変に勇気を必要とする行動であった。初期にボランティアとして活動した農場労働者ファニー・ルー・ヘイマーは、次のように語っている。「まともに考えていたらわたしも怖くなっていたでしょう。でも怖がることにどんな意味があったでしょうか。彼ら（白人）にできることは、せいぜいわたしを殺すことでしたが、彼らはわたしが物心ついて以来ずっと、少しずつわたしを殺そうとしているように思えました」

1964年に、南部キリスト教指導者会議(SCLC)、CORE、NAACP、およびSNCCが、「フリーダム・サマー」の活動を開始した。大学生を中心とする北部の白人1000人以上が志願して、黒人の有権者登録を支援するためにミシシッピ州へ向かった。彼らの行動は、黒人の投票権が暴力で抑圧されている現状に全米の注目を集めることも目的としていた。

フリーダム・サマー初日の6月21日、この目的は悲劇的な形で達成された。ジェームズ・チェーニー（アフリカ系米国人）、マイケル・シュワーナー、アンドリュー・グッドマン（いずれもユダヤ系米国人）という3人の活動家が消息を断ち、後に他殺体で発見されたのである。この殺人事件によって米国民は、投票権と暴力という2つの課題の関係を直視することを強いられた。勇気あるボランティア活動家たちの説得により、同様に勇気あるアフリカ系米国人およそ1万7000人が有権者登録を申請したが、最終的に選挙管理委員会が登録を認めたのはその10%にも満たなかった。黒人はミシシッピ州の人口の半分近くを占めるにもかかわらず登録有権者の5%を占めるにすぎないという事実を、ますます多くの米国民が知るようになった。

セルマの「血の日曜日」

翌年、いくつかの公民権運動組織がアラバマ州モントゴメリーから西へ50マイルほど離れた小都市セルマで、有権者登録運動を開始した。セルマにはおよそ1万5000人の黒人が住んでいたが、それまで有権者登録をすませることができたのは350人にすぎなかった。1965年2月、近郊のマリオンで行われた投票権要求集会で、ジミー・リー・ジャクソンという若い黒人男性が警官に射殺された。

これに抗議して、活動家たちは3月7日にセルマからモントゴメリーの州議会議事堂まで行進をすることになった。SNCCのジョン・ルイスやマーティン・ルーサー・キングの側近ホゼア・ウィリアムズ師を先頭に行進をしていたおよそ525人の集団は、アラバマ川にかかるペタス橋の上で、アラバマ州警察官および地元警官の一団に行く手をさえぎられた。警官隊はガスマスクを用意し、手にこん棒を握って待ち構えていた。州警察隊を率いるジョン・クラウド警視は、行進参

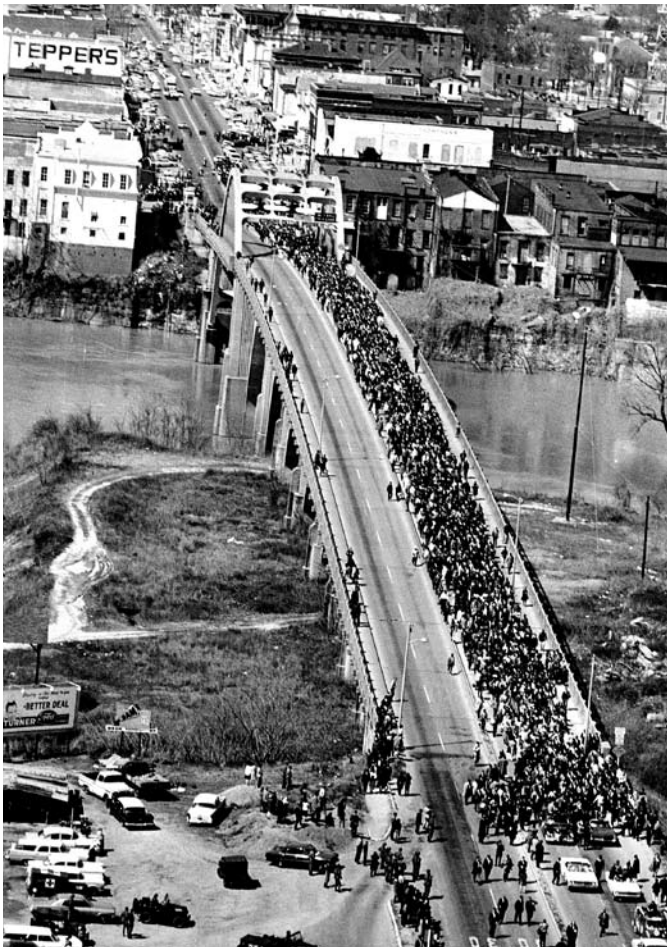
1965年3月7日、アラバマ州セルマの「血の日曜日」 セルマからモントゴメリーに向かう第1回公民権デモ行進は迅速かつ徹底的に鎮圧された。後に連邦下院議員となる活動家ジョン・ルイスは、「わたしはもう死んだと思った」と語った。

加者たちに教会へ帰るよう命じた。これに対してウィリアムズ師は「警視と話をさせてもらえませんか」と言ったが、答えは「話すことはない」の一言だった。

ニューヨーク・タイムズ紙は、この行進は「迅速かつ徹底的に鎮圧された」と報道した。同紙によると、警官隊はV字隊形をとって突進し、「先頭にいた10～20人のニグロは悲鳴を上げながらなぎ倒され、地面に転がった」 現場で取材をする報道陣の眼前で州警察隊は催涙弾を発射し、こうした映像は全米に放映されて視聴者に衝撃を与えた。地元の警官隊は、むちや警棒を持って、逃げるデモ参加者を追い掛けた。「わたしは州警察官に警棒で頭を殴られた。（中略）わたしはもう死んだと思った」と後に語っているルイスは、脳振とうを起こして入院した。

大勢の米国民にとって、1965年3月7日は「血の日曜日」として知られるようになる。ミシガン州選出のジェームズ・G・オハラ下院議員は、この日の出来事を「無謀な扇動政治家（アラバマ州知事ジョージ・ウォレスのこと）の指示の下で実行された突撃隊まがいの野蛮な行為」と評したが、これは大方の意見を代表したものであった。

アトランタでは、マーティン・ルーサー・キング・ジュニアが、自身とラルフ・アバナシーの先導でその週の火曜日に第2回目のセルマからモントゴメリーへの行進を実行する、と発表し、「全米の宗教指導者が火曜日にこの自由のための平和的・非暴力的な行進に参加する」ことを要請した。しかし行進が行われる前に、連邦判事が行進を一時的に禁止する裁判所命



1965年3月21日、セルマからモントゴメリーへの第3回デモ行進開始直後、アラバマ川にかかるエドムンド・ペタス橋を渡る参加者たち

令を発行した。この判事は、活動家たちに同情的ではあったものの、まず聴聞会を開かなければならないと判断した。

キングは四方から強力な政治的圧力を受けていた。連邦政府関係者からは、行進の延期を求められた。そして判事の差し止め命令が出たため、行進を実行すればキングらは法律に違反することになった。しかし、SNCC のメンバーを中心とする若い活動家たちは、迅速な行動を望んだ。彼らの要求に応えることができなければ、キングは運動の指導者としての地位を失う危険性があった。

3月9日に、キングとアバナシーは、およそ3000人の平和的なデモ参加者を率いてセルマからモントゴメリーへの第2回目の行進を実行した。黒人の支持者たちに加えて、何百人もの白人の宗教指導者も参加していた。今回も、ペタス橋で州警察隊が待機していた。行進者たちはそこで立ち止まり、公民権運動を象徴する歌「We Shall Overcome」を歌った。それから一団は祈りを捧げ、アバナシーは、行進者が「自らの体を犠牲とするためにここに来た」ことを神に感謝した。そしてキングは、参加者たちに引き返すよう指示した。「非暴力主義者として、わたしは暴力を生む可能性のある状況に彼らを導くことはできなかった」と彼はワシントン・ポスト紙に語った。

急進的な活動家の中には、キングの決断に失望した人々もいた。しかし、キングは事前に連邦政府関係者とひそかに話し合いをしていた。かねて公民権運動に同情的であったジョンソン大統領は、「血の日曜日」の出来事によってさらに大きな圧力を受けていた。大勢の米国民が、ようやく現実を眼前に突き付けられていた。宗教団体、州議会、そして抗議をする若者たち、連邦議会議員など、各方面から連邦政府による措置を要求する声が高まっていた。2人の指導者の間には、暗黙の取り決めがあったようだ。すなわち、キングが禁止命令に違反しなければ、ジョンソンは間もなくその命令を解除する、という取り決めである。

3月15日に、ジョンソン大統領は、後に投票権法となる法案を提出した。その晩、ジョンソンは国民に向けて演説をし、米国の基本的な価値観のひとつである投票の権利について、極めて分かりやすい言葉で次のように語った。

> これはニグロの問題ではない。南部の問題でもない。北部の問題でもない。これは米国の問題である。
>
> そして今晩、わたしたちは、その問題を解決するために（中略）米国民としてここに集まっている。
>
> 合衆国憲法は、いかなる個人もその人種または肌の色を理由に投票権を拒否されることがあってはならない、と定めている。わたしたちは皆、その憲法を支持し守ることを神の前で誓約している。
>
> わたしたちは今、その誓約に従って行動しなければならない。（後略）

「わたしたちには3世紀にわたる苦悩と困窮の歴史がある」　モントゴメリーに到着した行進者たち

> これは憲法に関する問題ではない。憲法の命じるところは明白である。これは道徳的な問題でもない。この国において、同胞である米国民の投票権を拒否することは極めて大きな間違いである。またこれは州の権利とか国家の権利の問題でもない。これはひとえに人権のための戦いである。（後略）
>
> セルマでの出来事は、米国のあらゆる地区やあらゆる州に及ぶ、はるかに大きな運動の一環である。それは、自分たちも米国的生活の恩恵を十分に手に入れようとする米国のニグロたちの活動である。
>
> 彼らの大義はわたしたちの大義でなければならない。なぜならわたしたち全員が偏見と不正の破壊的な伝統に打ち勝たなければならないからである。そしてわたしたちは勝つだろう（「we shall overcome」）。

その2日後、連邦裁判所は行進禁止命令を解除した。さらに、連邦地方裁判所のフランク・M・ジョンソン・ジュニア判事は、州および郡当局が活動家たちに干渉することを禁止しただけでなく、積極的に活動家たちを保護する措置を取ることを命じた。判事は判決文で、「苦情への対処を求めて政府に嘆願する権利を大集団で行使できること、（中略）そして一般の主要道路であっても行進をすることによってこうした権利を行使できることは、法律によって明確に定められている」と記した。

セルマからモントゴメリーへの行進

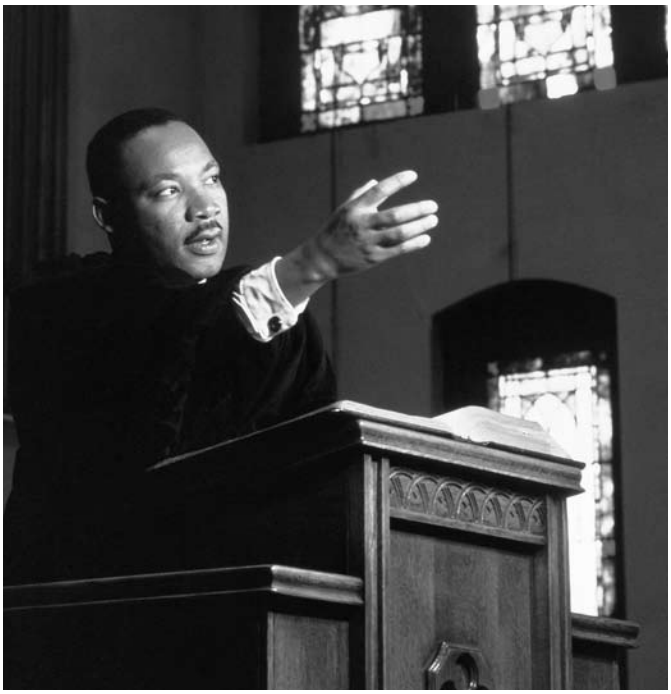
3月21日までに、あらゆる社会層の何千人もの米国民が、セルマからモントゴメリーへの第3回行進のためにセルマに集合し始めていた。全長87キロメートルの道のりを、途中野宿をしながら4泊5日で歩くという行進の計画が立てられた。この行進のルートは、今日国立史跡に指定されている。

ジョンソン政権と目覚めた米国民に支持された今回の行進は、それまでの行進とは全く様相が異なっていた。2週間前には、アラバマ州警察のジョン・クラウド警視が、行進者たちに対する殴打や催涙ガス攻撃を命じたが、今回はペタス橋を渡る行進を先導する車に乗る義務を課されていた。連邦軍警察が護衛に立ち、アラバマ州兵の分隊が一時的に連邦政府の指揮下に置かれた。行進を開始した3000人以上の参加者に、アバナシーは次のように告げた。「モントゴメリーに着いたら、ウォレス知事のところへ行って、『ジョージ、これで勝負はついた。われわれには投票権がある』と伝えよう」

キングは、「子どもたちよ、疲れることなく、共に歩きなさい。そうすれば約束の地に到着することができる」と呼び掛けた。

ニューヨーク・タイムズ紙は、国道80号線沿いに歩き始めた群衆について次のように報道した。

> その中には、公民権運動の指導者たちやユダヤ教のラビ、かわいらしい女学生やひげを生やした左翼学生、映画スターや乳母車に乗った乳児がいた。目の見えない人が2人、そして片脚のない男性もいた。しかし群衆の大半は、あまりに長い間投票権を拒否され続けてきたことに抗議をするニグロたちであった。



セルマからモントゴメリーへの行進の終わりにマーティン・ルーサー・キング・ジュニアはこう語った。「どれだけかかるのか。そう長くはない。なぜなら、まやかしが永久に続くことはできないからだ」 写真は、ジョージア州アトランタのエベネザー・バプテスト教会で説教をするキング師

行進は第1日目に11キロメートル余り進み、参加者たちはその晩大きなサーカス用テントを2つ張って、寝袋や毛布の中で寝た。翌朝キングは、「わたしは生まれて初めて寝袋で寝たが、気分は上々だ」と告げた。しかし2日目には、足にまめを作ったり、日焼けで炎症を起こしたりする人たちが増えてきた。

辺ぴな地域に差し掛かると道路の幅が狭くなるため、連邦政府は、モントゴメリー近郊で再び道幅が広くなるまでは、行進の人数を300人までに制限していた。それでも、かなりの人数の「追加人員」がすぐ後を追い、大雨となった3日目もそれは変わらなかった。参加者は、「Ain’t Gonna Let Nobody Turn Me ‘Round（誰もわたしを戻らせることはできない）」「We Shall Overcome（勝利をわれらに）」といった歌に託して、強い意志を表明した。

キングは、以前から予定されていたオハイオ州クリーブランドでの演説を行うために、一時行進を離れた。キングはクリーブランドで、マハトマ・ガンジーの影響を大きく受けたこと、そしてガンジーの有名な海への行進がセルマからモントゴメリーへの行進へとつながったことを明確に述べた。「わたしたちの課題は世界を兄弟愛でひとつに団結させることだ。わたしたちは、兄弟として共に暮らすことを学ばなければならない。さもなければわたしたちは皆愚かな者として滅びるだろう」とキングは語った。

行進がモントゴメリーに近付くころには、参加者の数は2万5000人以上に膨れ上がっていた。彼らは、チャーター機やバスや鉄道でやってきた。米国を代表する歴史家の一団が、行進の最終行程に参加し、「南北戦争の争点となった問題がようやく解決される時が来たと信じている」との声明を発表した。歌手で公民権活動家のハリー・ベラフォンテが、ハリウッドのスターを集めて参加した。

3月25日、行進は、マーティン・ルーサー・キングを先頭にモントゴメリーに入り、デクスター・アベニューを歩いていった。これは1世紀前に、奴隷制を支持して独立国家を目指し、南北戦争のきっかけを作った南部連合の唯一の大統領、ジェファソン・デービスの就任パレードが通った道であった。それから1世紀後、黒人奴隷の子孫たちの行進が、長年にわたって資格を与えられながらも実際には拒否されてきた権利を要求するために、州議会議事堂に近付いていた。彼らの嘆願書には、次のように記されていた。

> わたしたちの後ろには、この5日間の50マイル（80キロメートル）だけでなく、3世紀にわたる苦悩と困窮の歴史がある。アラバマ州知事殿、わたしたちは、今すぐに自由を獲得しなければならないということを宣言するためにここに来た。わたしたちは、投票する権利、法による平等な保護、そして警察による暴力の停止を獲得しなければならない。

ウォレス知事はすでに現場を去っていたが、それは重要なことではなかった。

その日キングが行った演説は、彼の演説の中でも最も有名なもののひとつである。その中で、モントゴメリーのバス・ボイコットに参加した70歳の女性の言葉が引用された。その女性マザー・ポラードは、歩くよりバスに乗った方がいいのではないかと聞かれてこう答えた。「わたしの足は疲れているけれど、心は元気です」

キングは、その日終点に達した行進は、「人間の良心における輝ける瞬間」であると語り、特に「あらゆる人種と信仰の聖職者や一般の人々が、苦闘するニグロたちと肩を並べて危険に直面するために遠路はるばるセルマに集まったこと」は、賞賛され、また勇気づけられる素晴らしいことである、と述べた。そして、「今まさに時機が到来しているのであり、強力な軍隊でさえもわたしたちを止めることはできない。わたしたちは自由の地へと前進しているのである」と宣言した。

> わたしたちの求める目標は、社会そのものと平和に暮らすことのできる社会、良心にやましいところのない社会であるということを、理解しなければならない。それは、白人のための時代でも黒人のための時代でもなく、人間としての人間のための時代である。
>
> 今日、皆さんは「あとどれだけかかるのだろうか」という疑問を持っているはずだ。今この瞬間がいかに困難であっても、今この時間がいかに失望に満ちたものであっても、わたしは、今日ここで、わたしたちの目標が達成されるまでそう長くはないということを皆さんに伝えたい。なぜなら、踏み付けられた真実は再び立ち上がるからだ。
>
> どれだけかかるのか。そう長くはない。なぜなら、まやかしが永久に続くことはできないからだ。
>
> どれだけかかるのか。そう長くはない。なぜなら、今でも自分のまいた種は自分で刈るものであるからだ。
>
> どれだけかかるのか。そう長くはない。なぜなら、道徳的宇宙の腕は長いが、常に正義に向けて曲げられているからだ。

投票権法の制定

それから5カ月後、連邦議会は1965年投票権法を可決し、ジョンソン大統領が署名して法律として成立させた。1965年8月6日の正午少し前に、ジョンソンは車で米国連邦議会議事堂に到着した。そこには、議会の有力議員と、マーティン・ルーサー・キング・ジュニアやジョン・ルイスなど公民権運動の指導者らが待機していた。投票権法に署名をするに際し、ジョンソンは国民にこう語った。

米国の文明の主流をなす基本的事実は、（中略）自由と正義と人間の尊厳はわたしたちにとって単なる言葉ではない、ということである。わたしたちはそうした概念を強く信じている。大きな発展や混乱、そして豊かさを体験しながらも、わたしたちはそれを信じている。従って、わたしたちの中に抑圧された人々がいる限り、わたしたちはその抑圧に加担しているのであり、それはわたしたちの信念を弱め、気高い目的の力を弱めるものである。

それ故に、これは米国のニグロの自由の勝利であるだけでなく、米国の国民の自由の勝利でもある。そして、皆さんが可決し、今日わたしが署名をするこの法律によって、探求を続けるこの偉大な国家に住むすべての家庭が、さらに力強く自由の中で暮らし、さらに素晴らしい希望を持ち、米国民であることをさらに誇りとすることができる。

投票権法の成果

投票権における人種差別は、すでに合衆国憲法修正第15条で禁止されていたので、問題はアフリカ系米国人に法的な投票権がないということではなく、一部の州・地方政府の関係者が、組織的に黒人からそうした権利を奪っていたということだった。そこでこの投票権法は、1964年に有権者登録のために読み書きなどの資格試験を実行し、かつ投票年齢に達した住民のうち登録または投票をしていない者が半数に満たない州や選挙区においては、連邦政府が有権者登録手続きを管理することを認めた。南部6州の全体がこの規定の対象となり、その他数州でも多くの郡が対象となった。対象となった管轄区は、投票に関する法規を修正する場合には、そうした修正が差別的な意図や効果を持つかどうかについて、まず連邦政府の担当者の審査を受けなければならなかった。また同法は、今後の読み書き試験の実施を禁止するとともに、米国司法長官が州選挙における人頭税の廃止を求める訴訟を起こすよう定めた。(1964年1月に批准された合衆国憲法修正第24条により、連邦政府の選挙における人頭税はすでに禁止されていた)

連邦政府の「検査官」が導入されたことで、少数派有権者に対する大規模な威嚇に終止符が打たれた。その成果は劇的だった。1965年末までに、深南部5州だけで新たに16万人のアフリカ系米国人が有権者登録をした。そして2000年までには、アフリカ系米国人の有権者登録率は、白人に比べわずか2％低いだけとなった。1965年には、南部では連邦議会または州議会議員に選出されたアフリカ系米国人は2人にすぎなかったが、今日ではその数が160人に達している。

当初、投票権法の有効期間は5年間であったが、その後、期間が延長され、内容も拡張されて、例えば選挙関連文書を2カ国語で提供することなど、新たな要件が追加された。

1982年に、ロナルド・レーガン大統領が、同法を25年間延長する法案に署名し、「投票の権利は、米国の自由の中でも最も貴重な宝石であり、わたしたちはその輝きを失わせてはならない」と述べた。2006年には、ジョージ・W・ブッシュ大統領が、同法をさらに25年間延長する法案に署名した。

公民権運動に対する南部の白人の反応

公民権獲得のために歴史的な闘いを繰り広げたアフリカ系米国人たちは、南部の白人の世界にも変化をもたらした。白人の中には、異人種が融合する新たな国家の可能性を歓迎する者もいたが、敵意を示す白人の方が多かった。彼らは社会的・政治的な変化を恐れ、慣れ親しんできた自分たちの生活様式が永久に消えたように見える現実と不安な気持ちで向き合っていたのだ。

「南部の生活様式」とは、独特の経済的、社会的、文化的な要素の融合であり、芳香を放つマグノリアの花やゆったりとした生活のペース、甘いミントジュレップ（南部人がよく飲むアルコール飲料）がそれを象徴していた。同時にそれは、この地域の人種的な秩序、すなわち白人が権力を有し黒人はそれに従うという状況を、暗に含むものでもあった。何世紀にもわたる奴隷制と、何十年間も続いた人種隔離制度によって、白人優位主義を特徴とする確固たる法制度と政治制度ができあがっていた。20世紀になるころには、「ジム・クロウ」という言葉が、法律で定められた人種隔離制度を表すようになっていた（ジム・クロウとは、白人が顔を黒く塗って黒人に扮し、奴隷文化を戯画化した19世紀のミンストレル・ショーの登場人物の名前である）。日常生活のあらゆる側面で大きな差別が見られた。黒人は白人に対して必ず「ミスター」または「ミセス」を付けて呼ばなければならなかったが、白人が黒人にそのような敬称を使うことはほとんどなかった。黒人は白人の家庭で、乳母、料理人、メード、庭師として働いた。白人は黒人に従順を求め、黒人が反抗するなど理解しがたいことだった。

長年にわたる奴隷制と人種隔離の時代に、南部の白人はアフリカ系米国人について、極めて否定的な固定観念、すなわち黒人は不潔な怠け者で知能が低く、性欲ばかりが強いという偏見を作り出し、それを信じ込んだ。黒人は道化者か野蛮人となり、その中間はなかった。白人は、黒人についてでっち上げられたこうした概念との関連で、自分の地位やアイデンティティー、毎日の生活、そして自己の価値を定義することが多かった。黒人が従順で幼児的な存在であれば、白人は強く威厳のある存在になれた。黒人であることは地位の低下を意味し、白人であることは自由であるということであった。公民権運動の闘いは、白人が定めた黒人の社会的な「居場所」から黒人を引き上げる恐れがあった。南部の白人は、自分たちの学校や住宅街、レストランや投票所に、黒人を受け入れなければならなくなる。多くの白人は、このような南部の将来を想像して不安を抱いた。

アフリカ系米国人は2級市民としての役割を受け入れ、満足さえしていると考える南部の白人も多かった。しかし、1950年代・60年代に南部を席巻した公民権運動は、そのような考え方が偽りであることを暴き出した。アフリカ系米国人が、長い忍耐の末にようやく不満を声に出し、尊厳を要求したのである。黒人たちの反抗はそれまでの白人の認識からあまりにかけ離れたものだったので、多くの白人は自らの目を疑った。そして、草の根の活動家が黒人の平等を求めて大規模な運動を組織し始めると、白人は立ち上がって抵抗した。

1960年、ルイジアナ州ニューオーリンズの公立学校の人種統合に抗議をする人々

連邦最高裁判所による1954年の「ブラウン対教育委員会」判決によって、まず南部の学校が闘いの場となることが確実になった。最高裁は、人種隔離された学校は黒人の子どもたちに「劣等の刻印」を押しており、南部諸州は「慎重に、時間をかけて」学校の人種差別を撤廃しなければならない、という判決を下した。

南部の政治家は、最高裁の判決を非難した。バージニア州のハリー・バード上院議員をはじめとする議員たちは、白人市民の潜在的な人種的恐怖心を刺激する言葉や、連邦政府に対する蔑視（べっし）を煽る言葉を使って、最高裁の判決は越権行為であると主張した。南部の白人は、この命令を回避しようとし、至る所で人種隔離の廃止を阻止しようとした。地域の指導者やビジネスマンは自ら市民協議会を結成し、人種差別廃止を支持する者には、それが黒人であっても白人であっても経済的報復を加えた。

1957年、連邦裁判所が、アー

カンソー州リトルロックの公立学校における人種差別撤廃を命じた。9人の黒人生徒が選ばれてリトルロックのセントラル高校に入学することになったが、オーバル・フォーバス州知事は生徒たちの登校を阻止した。ドワイト・アイゼンハワー大統領は、当初は消極的だったものの、結局米陸軍第101空挺師団の戦闘部隊を派遣し、9人の生徒（「リトルロック・ナイン」）を教室まで護衛させて、裁判所命令を執行した。10代の黒人生徒たちがようやくセントラル高校に到着したとき、彼らを迎えたのは悪意に満ちた白人の暴徒集団であった。白人生徒の親たちは、登校する黒人生徒と彼らを護衛する連邦保安官らにあざけりの言葉を浴びせた。連邦軍が南部の黒人の公民権を守るという風景は再建時代とともに消えたと信じていた南部の白人たちは、その再現を嘆き、激怒していた。

ルイジアナ州ニューオーリンズが深南部で初めて人種差別を撤廃した町となったときも、同様の闘争が発生した。1960年11月、同市ナインス・ワード地区の人種統合された第19マクドナー小学校に、アフリカ系米国人の少女4人が入学した。ここは、市内で最も貧しい地区のひとつであった。組織化した黒人の活動や連邦政府の介入に対する不満に加えて、南部の白人の間では深い階級的対立があった。ナインス・ワードの白人住民は、ニューオーリンズの裕福な有力者たちがナインス・ワードだけに人種差別撤廃を押し付けていると考えた。地域で人種統合の「重荷」を担うのは、貧しい白人たちだった。上流階級の白人にはカントリークラブ、私立学校、郊外の高級住宅地など、社会的な安全弁があったが、より貧しい白人たちは、自分たちの公立学校やプール、住宅地で真っ先に人種差別が撤廃されることが多いという事実に直面しなければならなかった。

クー・クラックス・クランの団員は頭巾をかぶって行動することが多く、白人優越主義を推進するために、アフリカ系米国人、ユダヤ人、カトリック教徒などに対して、テロ、暴力、リンチという手段を使った。

大勢の南部の白人は、政治的利益のために公民権運動に対する根深い反感を助長し利用するアラバマ州知事ジョージ・ウォレスのような政治家に、共感を見いだした。ウォレス知事は1963年の就任演説で、「今ここで人種隔離を、明日も人種隔離を、永遠に人種隔離を」と宣言し、白人の抵抗を象徴する存在となった。また人種差別主義、反ユダヤ主義、移民排斥主義を原動力とする暴力的な組織クー・クラックス・クラン（ＫＫＫ）も、流血の暴力を振るうことによって人種平等の到来を先延ばしにできるという妄想に固執していた。1963年に、アラバマ州バーミングハムで、ＫＫＫ団員が黒人のバプテスト教会を爆破し、４人の少女を殺害した。翌年には、ミシシッピ州フィラデルフィアのＫＫＫ団員が、３人の公民権運動活動家を殺害し、土堰堤に埋めた。多くの南部の白人はこうした残虐な暴力行為に嫌悪感を抱き、南部の白人の間にも亀裂が生じた。それでも、南部の白人の大半は同じことを望んでいた。それは、黒人が白人に敬意を表して帽子を脱ぎ、人種隔離されたジム・クロウの秩序に従う懐かしい日々に戻ることであった。

過激な行為はしばしば相手に勝利をもたらした。ＫＫＫによるショッキングな暴力が米国の白人の良心を刺激し、画期的な公民権立法、すなわち1964年公民権法と1965年投票権法の可決へと米国を動かした。テキサス州出身の南部人であるリンドン・ジョンソン大統領が議会をこうした法案の可決へと導くのに一役買ったとき、南部の白人は裏切られたように感じた。

公民権法により、商店や公共施設の人種差別が廃止された。突如として、白人は自分の店に黒人を客として迎え、レストランで黒人と並んで食事をしなければならなくなった。こうした変化は、南部の白人の日常生活のリズムを破壊した。多くの白人は、公民権法は自分たちの権利を危うくする間違った法律であると非難した。彼らは、権利には一定の量があり、黒人が自由を獲得すれば白人が自由を失わなければならない、という考えに固執した。白人は、南部における人種関係は不安定なシーソーであり、その上では、黒人の地位が向上すれば白人の地位は急降下すると考えた。

黒人が過半数を占める地域では、投票権法によってアフリカ系米国人が新たに驚異的な力を得た。こうした昔の南部の奴隷制度の拠点では黒人

の人口が白人の4倍近くもあり、投票ができるようになった黒人有権者によって黒人の政治家が選出される地域も出てきた。例えばアラバマ州メーコン郡やグリーン郡のような農村地域では、アフリカ系米国人が突如として政治的な権力を持つようになった。公民権運動以前には、そのような変化は、ほとんどの白人にとって想像もできなかった。しかし、1970年代までには、それまでは考えられなかったことが政治的現実となっていた。

公民権運動は、南部の白人の日常生活を永久に変え、黒人に対する彼らの従来の考え方を覆し、町によっては政治的勢力の均衡を変えた。公民権運動は、アフリカ系米国人のうわべだけの従順さを取り払い、彼らに新たな尊厳を与えた。多くの南部の白人にとって、毎日の生活が以前とは全く違ったものになった。考えたこともなかったような現実に直面して、一部の白人は可能な限りあらゆる手段を使って抵抗した。この激動を避けて通ろうとした白人たちもいた。彼らは、足元の地面が大きく揺れる中で、自分たちの大切な生活様式を維持しようとした。しかし結局、避けることはできなかった。白人たちはさまざまな戦略を使って公民権運動と闘ったが、この運動の広い範囲に及ぶ影響から逃れることのできた者はほとんどいなかった。

最終的に、公民権運動は米国南部を、そして米国全体を大きく変えた。公民権運動が南部の人々の生活と考え方を変えていくに従い、白人の中にも解放感を感じる人たちがいた。それは、人をおとしめ差別しなければならないという義務からの解放、そして抑圧的な人種階級制の中での役割からの解放であった。しかし、21世紀に入っても、人種の不平等は米国人の生活に存在し続けている。アフリカ系米国人の間では、貧困層、服役者、そして教育水準の低い人たちの比率が、人口に比して不釣り合いに高い。しかし、ジム・クロウの南部の亡霊は消えた。公民権運動後は、アフリカ系米国人も人種統合された学校に通うことができるようになり、選挙に立候補して当選し、ジム・クロウの文化の下では奪われていた尊厳を持って暮らせるようになった。こうした変化は南部の白人の生活にも浸透し、その輪郭を変えていった。公民権運動は、南部の黒人も白人も等しく、さらなる人種平等の道へと押し出したのである。

ジェーソン・ソコル
ペンシルバニア大学博士でアンドリュー・メロン・フェロー。著書に『There Goes My Everything - White Southerners in the Age of Civil Rights』がある。

人種統合された公立学校の昼食風景

エピローグ

現代では、今ここにいるわたしたちは皆、米国人である。

1965年3月21日、公民権運動の活動家や支持者たちがセルマに集合したとき、地元の南部キリスト教指導者会議(SCLC)の指導者の一人ジェファソン・P・ロジャーズ師は、報道陣に、過激な活動家たちが「無責任な行動」を取れば、運動に大きな痛手を与えることになるかもしれない、と語った。ロジャーズ師が懸念した過激な活動家たちとは、学生非暴力調整委員会(SNCC)のことであった。SNCCの指導者たちは、マーティン・ルーサー・キングをはじめとする公民権運動主流派の漸進的な戦略にもどかしさを募らせていた。幅広い基盤を持つ社会運動は必ずと言っていいほどそうした緊張関係に直面するが、サーグッド・マーシャルやキングらの取った戦略が賢明であったことは、その後数十年間の展開によって証明される。公民権運動の偉大な勝利は、法治国家においては、アフリカ系米国人の真の法的平等を公共施設、教育施設、そして何よりも投票所で確立することが、前進の鍵であったことを物語っている。

しかし、こうした真実は当時はまだ明らかではなかった。1966年5月までには、有権者登録運動のベテランであったストークリー・カーマイケルが、SNCCの新たな指導者としての地位を確立していた。カーマイケルはミシシッピ州グリーンウッドでの演説で、「ブラック・パワー」の蜂起を呼び掛けた。サーグッド・マーシャルやマーティン・ルーサー・キングが人種統合を追求したのに対し、カーマイケルは人種分離を求め、人種統合は「白人の優位を維持するための狡猾な口実である」と主張した。一方1966年10月にカリフォルニア州オークランドでヒューイ・P・ニュートンとボビー・シールによって結成されたブラック・パンサー（黒豹）党は、「パンサー」と呼ばれる武装党員を使って、不当に黒人を標的にしたとされる警察官を尾行させた（ブラック・パンサーという名前は、アラバマ州での有権者登録運動で、読み書きのできない有権者のために使われた図案に由来するという説もある）。ブラック・パンサー党は、社会奉仕活動も行って一時的に人気を得たが、武装して地元警察と対立したために有力党員らが死亡したり拘禁されたりし、その暴力的なやり方は多くの米国民の支持を失い、党内の対立にもつながった。ブラック・パンサー党は、多くの派閥に分裂し、互いに非難し合って、やがて消滅していった。

1968年は、西欧諸国では政治的激動の年となった。米国では、司法長官時代に時機を逃がさず公民権運動活動家を支援したロバート・F・ケネディ上院議員が暗殺された。そして、マーティン・ルーサー・キングの目覚ましい活躍が終わりを告げた。

晩年のキングが経済的平等を目指す活動に専念したということは、公民権運動が法的平等を獲得したという成果を示すひとつの指標である。1968年4月3日、キングは、テネシー州メンフィスで、ストライキ中の清掃作業員（主に黒人）を支援する活動をしていた。キングの最後の演説は、彼が生涯をかけて研究してきた聖書の教えを多く引用したものであった。その内容は、予言的とも言えた。

さて、これから何が起きるのか、わたしには分からない。この先、困難な日々が待っている。しかし、それはわたしには重要なことではない。わたしはすでに山の頂上に達したからだ。わたしは気にしていない。わたしも他の人々と同様、長い人生を生きたいと思っている。長い人生には意味がある。しかし、わたしは今、それを気にしてはいない。わたしが望むのは、神の意図するところを実行することだけだ。そして神は、わたしに山に登ることを許してくださった。そしてわたしは、そこから約束の地を見た。わたしは皆さんと共にそこにたどり着くことができないかもしれない。しかし、今晩、皆さんに知っておいてほしい。わたしたちは、ひとつの国民として、約束の地に到達する。今晩、わたしは本当に嬉しい。何も心配していない。誰をも恐れてはいない。わたしはこの目で主の到来の栄光を見たからだ。

その翌日、暗殺者の銃弾がキングの命を奪った。キングは39歳だった。監察医らによると、長年にわたって大勢の人々の苦悩を背負ってきたキングの心臓は、60歳の人間の心臓のようだったという。葬儀にはおよそ30万人の国民が参列した。

マーティン・ルーサー・キング・ジュニアの暗殺により、ワシントンＤＣをはじめ100カ所を超える米国の都市で暴動が発生した。その時点では、洞察力に欠ける人や弱気な人は、キングの生涯の事業に疑問を持ったかもしれない。しかし、キングの語った約束の地は、1968年4月の怒りと炎に満ちた暴動の夜に人々が想像していたより、いろいろな形ではるかに間近に迫っていたのである。

上　自分の家を持つことは、長年にわたって「アメリカン・ドリーム」の大きな要素となってきた。

左　友人のデニーズ・マクネアが人種差別主義者に殺害されてから42年後、コンドリーザ・ライスは米国国務長官に就任した。

公民権運動の勝利

アフリカ系米国人の歴史的な体験は、これからも他に類のない例としてあり続けるだろう。しかし、投票権を保証する実質的に意味のある連邦法の施行によって、アフリカ系米国人は、移民やその他の少数集団が長年にわたってアメリカン・ドリームの追求と実現のために利用してきた手段を与えられた。米国では、投票をする者が真に政治的な力を持つ。投票権によって、また時の経過とともに、アフリカ系米国人の法的・政治的平等が、暮らしのほぼあらゆる側面に向上をもたらした。

例えば、ジョン・Ｒ・ルイスは、1961年にフリーダム・ライダーの一人としてモントゴメリーで暴徒に殴られ血まみれになった。今日ルイスは、ジョージア州第5選挙区を代表する連邦下院議員である。下院議員のうち50人近くがアフリカ系米国人であり、その中には有力な委員会の委員長として政治的に大きな力を持つ議員も数人いる。

1963年に、人種差別主義者の自警団員らがバーミングハムの16番通りバプテスト教会を爆破し、デニーズ・マクネアら4人の少女が殺害された。2005年には、デニーズの友人だったコンドリーザ・ライスが米国国務長官に就任し

大統領選挙の夜、当選が決まってシカゴの群衆に演説をするバラク・オバマ次期大統領。

た。

1966年以来、黒人の中等学校卒業率は3倍近く伸びており、同時に貧困率はおよそ半分に減少している。黒人の中流階級の台頭と、多くのアフリカ系米国人起業家、学者、文学者、芸術家などの成功は、社会的進展を物語るものとして広く知られている。

米国民は今も人種問題と闘っているが、これらは、サーグッド・マーシャルやマーティン・ルーサー・キング、そして公民権運動が取り組んだ問題とは大きく異なっている。今日の人種問題は、かつての人種問題に劣らず現実的な課題であるが、この何十年の間に達成された真の前進を反映した課題であることも事実である。

その一例として、「ブラウン対教育委員会」判決の主題であった教育の問題が挙げられる。最近の連邦最高裁判所の判決では、「アファーマティブ・アクション(積極的差別是正措置)」の許容限度が検討されている。アファーマティブ・アクションとは、過去の差別を是正し、公共機関がその対象地域の人口構成を正しく反映することを義務付け、また奨励する政策である。

今日では裁判官は、例えば、親が子どもの学校を選べる学区において、こうした政策と対立する要求を解決しなければならなくなっている。特定の学校を選ぶ親が多すぎれば、一部の子どもたちしか第1志望校に通えなくなる。その場合、その学区は、「決定的な条件」として人種を考慮し、その人気校の人種の均衡を保つような人選をすることが許されるのか、という点が争点となる。

リンダ・ブラウンの時代のように何百万人ものアフリカ系米国人生徒が故意に隔離され、古い劣等な学校に通わされていた時代とは異なり、今日の新たな住宅地区別の人種分布によって学校が実質的に人種隔離されている場合、政府が干渉すべきなのだろうか。

こうした問題をめぐって、あらゆる層の米国民が異議を唱えることができるし、実際に意見を戦わせている。そして、こうしたジレンマに答えを出すことのできる米国の指導者は少ない。

本誌（英語版）の印刷時点で、ケニア出身の黒人男性とカンザス州出身の白人女性の息子であるバラク・オバマが、米国の次期大統領に選ばれている。オバマは、人種について語った選挙演説で、次のように述べた。

奴隷制に関する問題への答えはすでに合衆国憲法に含まれている。それは、法の下での平等な市民権を中核とする憲法であり、国民に自由と正義を約束し、また時とともに完ぺきとなり得る、そして完ぺきとなるべき連邦を約束した憲法である。

またオバマは大統領選に勝利した夜、次期大統領として、国民に次のように語った。

> 米国はあらゆることが可能な国だということをいまだに疑う人がいるなら、また建国の父たちの夢がこの時代にまだ生き続けているのかといまだに疑い、この国の民主主義の力をいまだに疑う人がいるなら、今晩こそがその人たちへの答えだ。

バラク・オバマの勝利は、この国の前進の度合いを示すひとつの尺度である。もうひとつの尺度、そして間違いなく最も重要な尺度は、特に米国の未来を築く若い国民の間で、奴隷制、人種隔離、およびそれによる不利な状況という恥ずべき歴史を過去のものとしなければならないという考え方が広く深く浸透し始めていることである。

米国大使館 / アメリカンセンター
レファレンス資料室

札幌アメリカンセンター・レファレンス資料室
〒 064-0821 札幌市中央区北 1 条西 28 丁目　米国総領事館内
Tel: 011-641-3444
Fax: 011-641-0911
http://japan.usembassy.gov/j/irc/ircj-sapporo.html

米国大使館レファレンス資料室
〒 107-8420 東京都港区赤坂 1-10-5
Tel: 03-3224-5292　(レファレンスサービス)
Tel: 03-3224-5293　(来館予約)
Fax: 03-3505-4769
http://japan.usembassy.gov/j/irc/ircj-tokyo.html

名古屋アメリカンセンター・レファレンス資料室
〒 450-0001　名古屋市中村区那古野１－４７－１　名古屋国際センタービル６階
Tel: 052-581-8641
Fax: 052-561-7215
http://japan.usembassy.gov/j/irc/ircj-nagoya.html

関西アメリカンセンター・レファレンス資料室
〒 530-8543　大阪市北区西天満２－１１－５　米国総領事館ビル６階
Tel: 06-6315-5970
Fax: 06-6315-5980
http://japan.usembassy.gov/j/irc/ircj-kansai.html

福岡アメリカン・センター・レファレンス資料室
〒 810-0001　福岡市中央区天神２－２－６７
Tel: 092-733-0246
Fax: 092-716-6152
http://japan.usembassy.gov/j/irc/ircj-fukuoka.html

米国大使館 のウェブサイト

米国大使館：	http://japan.usembassy.gov/tj-main.html
American View:	http://japan.usembassy.gov/american-view.html
レファレンス資料室：	http://japan.usembassy.gov/j/ircj-main.html
アメリカ早分かり：	http://aboutusa.japan.usembassy.gov/

Printed in Japan

米国国務省国際情報プログラム局
http://www.america.gov

編集主幹――ジョージ・クラック
編集長――ミルドレッド・ソラ・ニーリー
副編集長――マイケル・ジェイ・フリードマン
デザイン――ミン・チー・ヤオ
写真担当――マギー・ジョンソン・スライカー

本誌の主文を執筆したマイケル・ジェイ・フリードマンは、国務省国際情報プログラム局出版部の責任者。米国政治外交史で博士号を取得している。

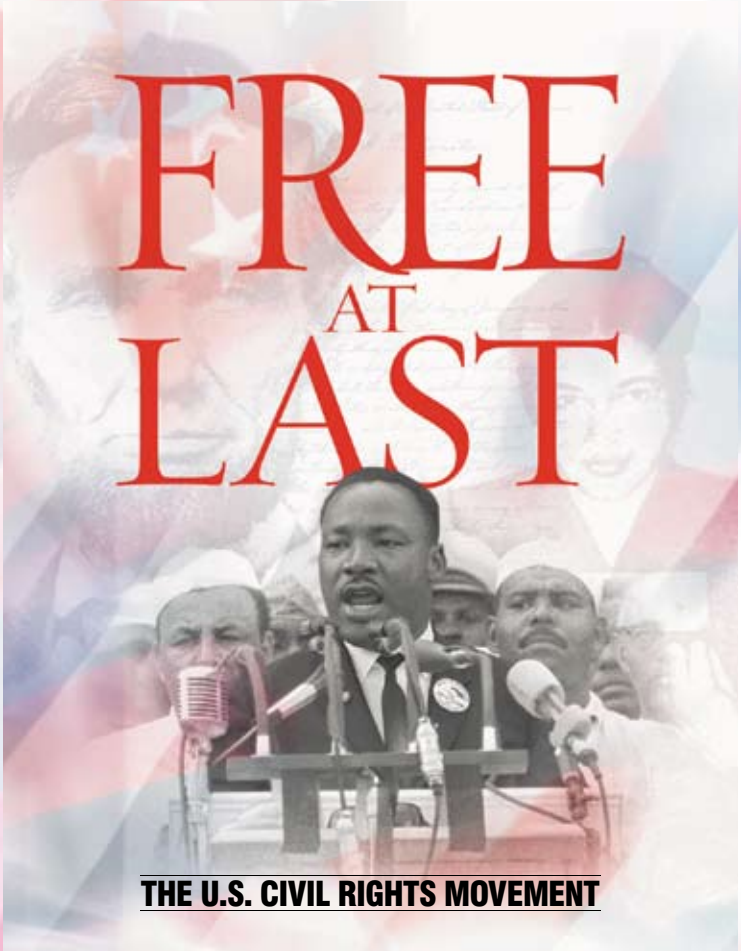
編集・発行：米国大使館レファレンス資料室（2010年4月）

本号の日本語文書は参考のための仮翻訳であり、正文は英文です。

Photo credits:

Picture credits for illustrations appearing top to bottom are separated by dashes and from left to right by semicolons.

Cover: AP Images (4). Inside Front Cover: AP Images. Page 3: Schomburg Center/Art Resource, NY. 4: British Library/London/Great Britain/HIP/Art Resource, NY. 6: Hulton Archive/Getty Images. 8: The Bridgeman Art Library/Getty Images. 9: Library of Congress. 10: Hulton Archive/Getty Images. 11: Painting by Jerry Pinkney, National Geographic Society. 12: MPI/Getty Images. 13: Hulton Archive/Getty Images — Library of Congress, Prints and Photographs Division. 14: Library of Congress, Prints and Photographs Division. 16: Library of Congress, Prints and Photographs Division. 17: Louie Psihoyos/Science Faction. 18: Library of Congress, Prints and Photographs Division. 19: © CORBIS. 20: Library of Congress, Prints and Photographs Division. 21: AP Images. 22: Marie Hansen/Time Life Pictures/Getty Images. 24: Library of Congress, Prints and Photographs Division. 25: © David J. & Janice L. Frent Collection/CORBIS. 26: Scurlock Studio Records, Archives Center, National Museum of American History, Behring Center, Smithsonian Institution. 27: Library of Congress, Prints and Photographs Division; AP Images. 28: Virginia Historical Society, with permission from Afro-American Newspaper Archives and Research Center. 29: © Bettmann/CORBIS — © Jack Moebes/CORBIS; AP Images. 31: AP Images. 33: © Bettmann/CORBIS — AP Images. 35: Don Cravens/Time Life Pictures/Getty Images — Montgomery County Sheriff's Office/AP Images. 36: © Bettmann/CORBIS. 37: Sy Kattelson, Gelatin silver print, 1948, National Portrait Gallery, Smithsonian Institution. 38: © Bettmann/CORBIS (2). 39: Paul Schutzer/Time Life Pictures/Getty Images. 40: Horace W. Cort/AP Images; © Bettmann/CORBIS. 43: Bill Hudson/AP Images. 44: Harry Harry/AP Images.Hulton Archives/CNP/Getty Images. 46: Carlos Osorio/AP Images — Gene Herrick/AP Images. 47: Lacy Adkins/AP Images. 48: © Bettmann/CORBIS. 49: Landall Kyle Carter/CORBIS. 50: AP Images. 51: © Bettmann/CORBIS. 52: © Flip Schulke/CORBIS (2). 55: AP Images. 56: AP Images; Dozier Mobley/AP Images — AP Images. 58,59: AP Images (3). 60: © Flip Schulke/CORBIS. 62-63: © Bettmann/CORBIS; Hoarce W. Cort/AP Images. 64: Bill Eppridge/Time Life Pictures/Getty Images. 65: Digital Vision/Getty Images. 66: Ariel Skelley/Getty Images — Bebeto Matthews/AP images.



Bureau of International Information Programs
U.S. DEPARTMENT OF STATE
http://www.america.gov